

上信越自動車道関係発掘調査報告書XIII

小野沢西遺跡

2004

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 上信越自動車道関係発掘調査報告書 XIII

## 小野沢西遺跡

2004

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

上信越自動車道は、首都圏と上越地方を結ぶ幹線道路として、群馬県藤岡ジャンクションから分岐し、群馬県・長野県を経て新潟県上越市に至る全長203kmの高速自動車国道です。これによって、関越・磐越自動車道と並び、日本海側と太平洋側を結ぶ大動脈として、沿線地域の発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

新潟県教育委員会は、昭和63年度から建設用地内の埋蔵文化財について調査を開始し、平成7年度には長野県境～中郷インターチェンジ間の発掘調査を、平成9年度には中郷インターチェンジ～上越ジャンクション間の発掘調査を終了して、県内全線の調査業務を完了しました。

本書は上信越自動車道建設用地内において、平成5年度から7年度に行った小野沢西遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、妙高山麓を流れ下る数条の沢跡が発見され、中から縄文時代～古墳時代の遺物が大量に出土しました。とくに弥生時代後半の土器には信州地方の影響を受けた土器をはじめとして様々な地域の土器が出土し、北国街道沿いにある当遺跡を含む県境一帯が越後と信濃を結ぶ交通上の要地であったことが推定されます。

今回の調査成果が、歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大なご協力とご援助を賜った妙高村教育委員会ならびに地元の方々をはじめ、日本道路公団新潟建設局（現・北陸支社）・同上越工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

新潟県教育委員会

教育長　　板屋越　麟一

## 例　　言

- 1 本書は新潟県中頃城都妙高村大字関山字大峯・小野沢西ほかに所在する小野沢西遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は上信越自動車道の建設に伴い、新潟県が日本道路公团から受託して実施したものである。
- 3 発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委）が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が平成5～7年度に調査を実施した。
- 4 整理および報告にかかる作業は平成15年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。
- 5 出土遺物と整理にかかる資料はすべて県教委が保管・管理している。遺物の註記号は「オノ西」とし、出土地点・層位などを併記した。
- 6 グリッド杭の打設は有限会社中郷測量に委託した。
- 7 本書で示す北方位は日本平面直角座標第VII系（旧測地系）のX軸方向を指しており、真北から0度10分9秒西偏している。
- 8 作成した挿図・図版のうち、既存の図を使用した場合にはそれぞれにその出典を記した。
- 9 掲載した遺物の番号は、縄文土器、縄文時代の石器、弥生～古墳時代の遺物、古代・中世の遺物でそれぞれ通し番号を付し、遺物実測図版と写真図版の番号は一致している。
- 10 文中の注釈はページごとの脚注とした。また、引用参考文献は著者および発行年を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 11 本書の編集・執筆は土橋由理子（埋文事業団調査課長）が担当した。ただし、第Ⅱ章は県教委・埋文事業団の既刊報告書等を一部改変して転載した。詳細は第Ⅱ章文末に記す。
- 12 本書作成作業の一部は株式会社セピアスに委託した。詳細は第Ⅰ章に記す。
- 13 本遺跡については『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』[土橋1995、武田1996]、『埋文にいがた』[武田1995、土橋2003]に記載されているが、本書の記述をもって正式な報告とする。上記『年報』等と本書に齟齬がある場合は、本書の記述をとるものとする。
- 14 中部高地系土器については千野浩氏（長野市教育委員会）に御教示をいただいた。
- 15 縄文土器・弥生土器については石川日出志氏（明治大学文学部）、渡邊朋和氏（新津市教育委員会）に御教示をいただいた。
- 16 発掘調査から本書の製作に至るまで、下記の方々から多大な御教示を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略・五十音順）  
相田泰臣　石川日出志　赤澤徳明　甘粕　健　伊藤秀和　遠藤恭雄　川村浩司　小島正巳  
坂井秀弥　笠澤　浩　笠澤正史　高橋　勉　高橋春栄　千野　浩　辻　秀人　橋本博文  
早津賢二　久田正弘　渡邊朋和

## 目 次

第Ⅰ章 序 説 .....	1
1 調査に至る経緯 .....	1
2 調査の方法と経過 .....	2
A 一次調査 .....	2
B 二次調査 .....	2
C 調査体制 .....	4
3 整理の方法と経過 .....	5
第Ⅱ章 遺跡を取りまく環境 .....	6
1 地質的環境 .....	6
2 地理的環境 .....	6
3 歴史的環境 .....	7
A 弥生時代 .....	7
B 古墳時代 .....	8
第Ⅲ章 層序と遺構 .....	11
1 グリッドの設定 .....	11
2 層 序 .....	11
A 基本層序 .....	11
B 自然流路 .....	11
3 遺 構 .....	16
A ピット .....	16
B その他の遺構 .....	16
第Ⅳ章 遺 物 .....	18
1 概 要 .....	18
2 繩文時代 .....	18
3 弥生時代中期～古墳時代 .....	19
A 土器の調整 .....	19
B 土器分類 .....	20
C 各 説 .....	35
4 古代・中世 .....	39
第Ⅴ章 ま と め .....	42
1 弥生時代中期 .....	42

2 弥生時代後期～古墳時代	42
《要 約》	47
《引用文献》	47
《観察表》	52

### 挿図目次

第1図 上信越自動車道路線図	1
第2図 一次調査トレンチ位置図	2
第3図 調査範囲の区割	3
第4図 周辺の遺跡	9
第5図 主な自然流路の名称	11
第6図 グリッド設定図	12
第7図 基本順序	13
第8図 繩文土器分布図	18
第9図 石器分布図	18
第10図 弥生時代中期の土器	21
第11図 弥生時代後期～古墳時代の土器 各部名称	23
第12図 弥生時代後期～古墳時代前期（区分2）の土器（1）	24
第13図 弥生時代後期～古墳時代前期（区分2）の土器（2）	25
第14図 弥生時代後期～古墳時代前期（区分2）の土器（3）	26
第15図 弥生時代後期～古墳時代前期（区分2）の土器（4）	27
第16図 古墳時代中期～後期（区分3）の土器（1）	31
第17図 古墳時代中期～後期（区分3）の土器（2）	32
第18図 古墳時代中期～後期（区分3）の土器（3）	33
第19図 底部径組成図（1）	40
第20図 底部径組成図（2）	41

### 表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表	8
第2表 土器組成表（1）	40
第3表 底部調整集計表（1）	40
第4表 土器組成表（2）	41
第5表 底部調整集計表（2）	41
第6表 編年対応表	46

### 図版目次

#### 【図面】

図版1 造構全体図
図版2 分割図（1）
図版3 分割図（2）
図版4 側別図（1）
図版5 側別図（2）
図版6 側別図（3）
図版7 側別図（4）
図版8 繩文時代の遺物（1）
図版9 繩文時代の遺物（2）
図版10 弥生～古代時代の遺物（1）SD1
図版11 弥生～古墳時代の遺物（2）SD1
図版12 弥生～古墳時代の遺物（3）SD1
図版13 弥生～古墳時代の遺物（4）SD1

図版14 弥生～古墳時代の遺物（5）SD1・SD2
図版15 弥生～古墳時代の遺物（6）SD2
図版16 弥生～古墳時代の遺物（7）SD2
図版17 弥生～古墳時代の遺物（8）SD2
図版18 弥生～古墳時代の遺物（9）SD2
図版19 弥生～古墳時代の遺物（10）SD3・SX1
図版20 弥生～古墳時代の遺物（11）SD3・SX1・SX2
図版21 弥生～古墳時代の遺物（12）SD3・SX2・SD5・沢1
図版22 弥生～古墳時代の遺物（13）包含層ほか
図版23 弥生～古墳時代の遺物（14）包含層ほか
図版24 弥生～古墳時代の遺物（15）包含層ほか

図版 25 弥生～古墳時代の遺物 (16) 包含層ほか  
図版 26 弥生～古墳時代の遺物 (17) 包含層ほか  
図版 27 弥生～古墳時代の遺物 (18) 包含層ほか

【写 真】

図版 31 遠景・調査区完掘 (1) '94, '95 I・II①・II②区  
図版 32 調査区完掘 (2) '95 II③・II④区・基本層  
序・沢1・SD1  
図版 33 SD1・遺物出土状況  
図版 34 SD2・SD3・SD5・SX1・SX2  
図版 35 SX1・SX2・小櫻集中城  
図版 36 Pit7・8・17～19, '94小櫻集中城周辺完  
掘・SD14  
図版 37 純文時代の遺物 (1)  
図版 38 純文時代の遺物 (2)・弥生～古墳時代の遺物  
(1) SD1  
図版 39 弥生～古墳時代の遺物 (2) SD1  
図版 40 弥生～古墳時代の遺物 (3) SD1  
図版 41 弥生～古墳時代の遺物 (4) SD1・SD2

図版 28 弥生～古墳時代の遺物 (19) 包含層ほか  
図版 29 弥生～古墳時代の遺物 (20) 包含層ほか  
図版 30 古代・中世の遺物

図版 42 弥生～古墳時代の遺物 (5) SD2  
図版 43 弥生～古墳時代の遺物 (6) SD2  
図版 44 弥生～古墳時代の遺物 (7) SD2  
図版 45 弥生～古墳時代の遺物 (8) SD2・SD3・  
SX1  
図版 46 弥生～古墳時代の遺物 (9) SD3・SX1  
図版 47 弥生～古墳時代の遺物 (10) SX2・SD5・  
沢1・包含層ほか  
図版 48 弥生～古墳時代の遺物 (11) 包含層ほか  
図版 49 弥生～古墳時代の遺物 (12) 包含層ほか  
図版 50 弥生～古墳時代の遺物 (13) 包含層ほか  
図版 51 弥生～古墳時代の遺物 (14) 包含層ほか  
図版 52 弥生～古墳時代の遺物 (15) 包含層ほか  
古代・中世の遺物

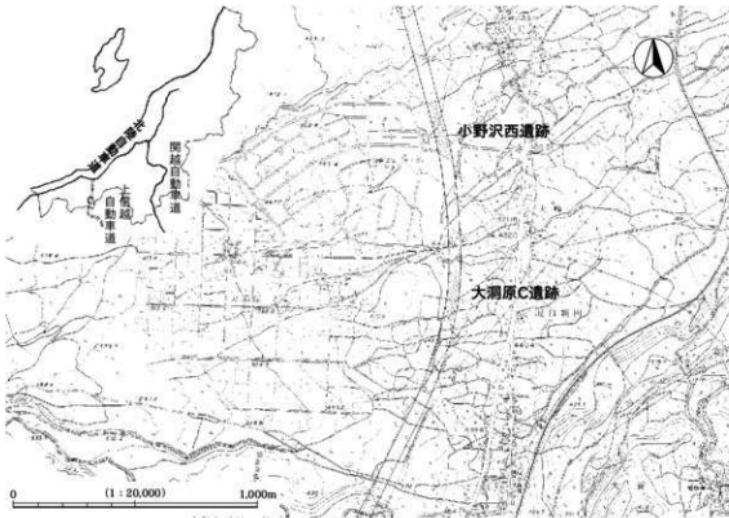
# 第Ⅰ章 序 説

## 1 調査に至る経緯

上信越自動車道（以下、上信越道）は、群馬県藤岡ジャンクションから新潟県上越ジャンクション間の延長203kmにわたる高速自動車国道であり、関越自動車道と長野自動車道を結んでいる。

小野沢西遺跡にかかる上信越道第10次施工命令区间（長野県中野市～新潟県中頃郡中郷村）は昭和63年9月に施工命令が出来され、これ以後、用地内の遺跡分布調査・試掘調査などに関する協議が本格化した。新潟県教育委員会（以下、県教委）は日本道路公團（以下、公團）の依頼を受けて同年11月14日から同月19日に、第10次施工命令区间3町村（妙高高原町・妙高村・中郷村）の踏査を行い、周知の14か所、新発見の遺跡2か所、遺跡推定地7か所、総計848,000m<sup>2</sup>について確認調査や試掘調査が必要である旨、公團新潟建設局に回答している（昭和63年12月21日付け、教文第1002号）。

本報告書の遺跡はこの時点では存在が確認されていなかったが、新発見の遺跡（調査地点No.14）として取り上げられ、平成5年10・11月に27,400m<sup>2</sup>を対象に一次調査が実施された。調査の結果土師器片が出土したため、小野沢西遺跡として県教委の遺跡台帳に登録した。平成6年6月には前年度に未伐採のため調査できなかった8,200m<sup>2</sup>を対象として追加の一・二次調査を行い、二次調査必要範囲を確定した。県教委は一次調査の結果を受けて13,870m<sup>2</sup>について二次調査が必要であると公團に通知した。二次調査は平成6年9～11月と平成7年4～10月の2か年に分けて実施した。



第1図 上信越自動車道路線図

[原図：妙高村都市計画図2 昭和58年9月調整]

## 2 調査の方法と経過

### A 一次調査

平成5年度と平成6年度に27,400m<sup>2</sup>を対象に調査を実施した(第2図)。調査は対象地の任意の位置に試掘坑(トレンチ)を設定し、バックホーを使用して徐々に掘り下げながら、調査員による精査を併行して行い、遺構・遺物の有無、土層の堆積状況を確認する方法で行った(第2図)。

平成5年度は高速道路法線センター杭STA436+80～STA441+70の間で27か所(1,370m<sup>2</sup>)のトレンチを調査した。そのうち8か所から土師器が出土し、1か所で古墳時代とみられる土坑が検出された。村道大京線以北の一部は雑木未伐採のため十分な調査ができなかつたが、土師器が表面採集されることからSTA438～439に遺構・遺物が集中すると推定され、STA437+60～440+20の範囲について二次調査が必要であると判断した。

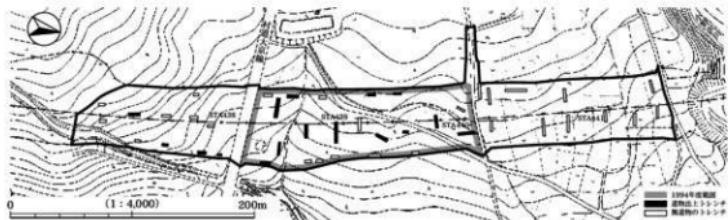
平成6年度は、前年度に調査ができなかつたSTA438+20～440+10の範囲を対象として、二次調査範囲の北限を再確認する目的で調査を実施した。16か所のトレンチを調査した結果、9か所で遺物が出土し、3か所で溝状の遺構、1か所で自然流路が検出された。自然流路では焼山火山灰(KG-c)の堆積が確認された。調査の結果、対象範囲内ではほぼ一様に遺物の出土を見たため、前年度に二次調査が必要とした範囲を変更することはせず、STA437+60～440+20の間13,870m<sup>2</sup>を二次調査対象範囲とすることとした。

### B 二次調査

二次調査は平成6(1994)年度と平成7(1995)年度に実施した。6年度は村道大京線の南側2,300m<sup>2</sup>を、7年度は村道以北11,570m<sup>2</sup>を調査した(以下、調査区を示す際には6年度を「94」、7年度を「95」と略す)。6・7年度ともに、包含層および自然流路出土遺物は層位別に小グリッド一括で取り上げ、地形測量・遺構平面実測は平板測量で行った。出土した遺物量は浅箱換算で6年度が4箱、7年度が130箱である。

#### 6年度

表土除去は9月26日からバックホー1台で行った。後に沢1と呼称する範囲は、調査前からすでに浅い沢となっており、底の方の土は水分を多く含んでいた。この部分は表土より下の土層もバックホーで掘削し、遺物が出た場合には作業員による精査を行った。



第2図 一次調査トレンチ位置図

遺構は土坑数基が検出されたほか、小砾を敷き詰めた道状に見える部分が2か所検出されたため、「道状遺構」と仮称し調査を進めた。小砾に混じり珠洲焼製円盤も出土したため、該当範囲の小砾を採取し、調査終了後に土器等を選別した。11月18日までにすべての記録作業を終え、現場を撤収した。

## 7年度

7年度は調査区をI～III区に分け、II区をさらに6分割して調査を進めた(第3図)。4月17日から表土除去を開始し、I～III区の順に進めた。I区ではこの段階でも大量の遺物が出土したが、II③・④区以北ではほとんど遺物が出土しなかった。そのためIII区は表土除去に先立ち人力でトレンチ掘削を行い、遺構・遺物の有無を確認した。この結果、ともに検出されなかったため、バックホーを用いて地山上面(第III章2A参照)まで掘削した。II③・④区にもトレンチを入れたが、II④区で遺物が5点出土したのみであったので、ここもバックホーで地山上面まで掘削した。

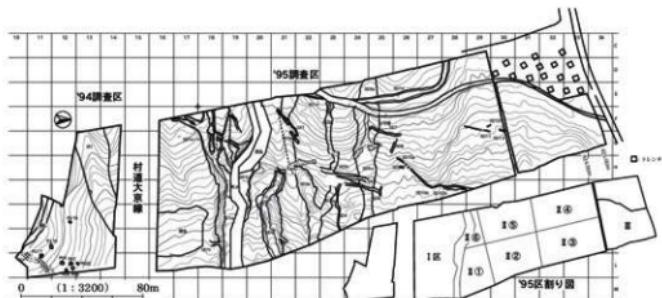
表土除去と併行してI区から作業員による発掘調査を開始した。I区ではII層から大量の遺物が出土し、7月に入り検出されたSD1でも、II層やその下の砂層・砂層に挟まれた黒色土から土器が出土した。出土土器はIIa・IIb層以外は堆積中のほどに見られた焼山火山灰層(KGc)を目安に、その上下等を記録して取り上げたため、セクション図に記載された層位番号とは一致しない。これはII区で検出された自然流路に関しても同様である。なお、I区村道際は最近の建物の基礎により搅乱されており、遺物の残存状況は良好とは言えない状況であった。

II区では表上掘削の段階でSD2・SD3・SD5が検出された。SD3・SD5では遺物の出土する範囲が限られていたので、始めに流路の輪郭を確定し、流路に直交する方向で2m幅のトレンチを4m間隔で掘削し、遺物が出土するとその周辺を面的に掘り広げるという方法で調査を進めた。遺物の出土が希薄で人力精査を行わなかった部分については、最終的にバックホーを用いて地山上面まで掘削した。

7年度調査区においても6年度調査区で道状遺構と仮称した小砾を敷き詰めたような箇所が何か所か検出され、「SX」あるいは「石敷」として記録を作成した。しかし、SD1e等自然流路の底面でも同様のものが検出されたため、これらは遺構ではなく自然の堆積によるものと考えた方が妥当と判断するに至った。

最終的に遺構と判断されたのは近世の溝SD14と時期不明の溝SD10～13のみであった。

9月下旬までにII区②・③、10月上旬には残るII区⑤・⑥の調査を終え、10月16日に現場を撤収した。



第3図 調査範囲の区割

### C 調査体制

平成5（1993）年度

一次調査 調査期間 平成5年10月25～29日 11月8～11日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調査 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管 理	藍原 直木（事務局長） 渡辺 耕吉（總務課長）
庶務	藤原 守彦（總務課主事）
調査総括	茂田井信彦（調査課長）
調査指導	藤巻 正信（調査課調査第一係長）
調査担当	小池 義人（調査課専門員）
調査職員	佐藤 正知（調査課主任） 藤田 豊明（調査課主任） 武田 孝昭（調査課専門員）

平成6（1994）年度

一次調査 調査期間 平成6年6月20～28日

二次調査 調査期間 平成6年9月7日～11月18日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調査 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管 理	藍原 直木（事務局長） 渡辺 耕吉（總務課長）
庶務	泉田 誠（總務課主事）
調査総括	茂田井信彦（調査課長）
調査指導	藤巻 正信（調査課調査第一係長）
調査担当	土橋由理子（調査課文化財調査員）
調査職員	大庭 良夫（調査課主任調査員）

平成7（1995）年度

二次調査 調査期間 平成7年4月24日～10月18日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）

調査 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 平野清明）

管 理	藍原 直木（事務局長） 山上 利雄（總務課長）
庶務	泉田 誠（總務課主事）
調査総括	亀井 功（調査課長）
調査指導	藤巻 正信（調査課調査第一係長）
調査担当	武田 孝昭（調査課文化財調査員）
調査職員	星 泰津子（調査課文化財調査員） 山田 弁（調査課嘱託員）

### 3 整理の方法と経過

出土遺物の水洗・註記作業は、発掘調査と並行して調査現場および埋文事業団曾和分室で行った。註記は手書きのほか、インクジェット方式による註記機械を併用した。接合・復元作業の一部は平成8年度に同分室で行った。

報告書作成作業は、平成8年度に新津市に新設された新潟県埋蔵文化財センターにおいて平成15年度に実施した。作業内容は以下の通りである。

**遺物** 事業団職員が、接合および実測遺物の退出・図化・トレース・写真撮影（デジタルカメラ ニコンD100を使用）を行った。

**遺構** 遺構の製図作業は、原図および仮版作成を事業団職員が行い、トレース・版組みを株式会社セビアスに委託した。

**版下作成・印刷製本** 版下作成から印刷製本にかかる作業については、デジタル化に適応して従前の手法を転換し、トレースの一部と版構成作業を株式会社セビアスに委託するとともに、印刷業者の作業を印刷・製本に限定した。委託した業務は遺構図面などのコンピュータトレースと従来印刷業者が行っていた版構成作業一般であり、埋文事業団は本文・図版のレイアウトを含む編集作業を行い、以下の資料を支給した。

本文・挿図：テキスト形式・Microsoft社Excel形式のデータ、貼り込み版下

遺構図面図版：原図コピー・レイアウト図案・文字データ

遺物図面図版：個々のトレース図・レイアウト図案・拓影・文字データなど

遺構写真図版：遺構写真的CD-R・レイアウト図案

遺物写真図版：遺物写真的CD-RW・レイアウト図案

整理期間 平成15年4月1日～平成16年3月31日

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越嶺一）

整理 理 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 板屋越嶺一）

總括	黒井 幸一（事務局長）
管理	長谷川二三夫（総務課長）
庶務	高野 正司（総務課長）
整理總括	藤巻 正信（調査課長）
整理指導	高橋 保（調査課整理担当課長代理）
整理担当	土橋由理子（調査課班長）
作業	和泉 裕子 小熊 洋子 小倉 瞳子 中川 祥子 吉原 智子（以上、嘱託員）

## 第Ⅱ章 遺跡を取りまく環境

### 1 地質的環境

妙高山は噴火活動によって形成された火山体であり、外輪山である神奈山、赤倉山などと共に「妙高火山」と総称される。この周辺には多くの火山体が集中しており、妙高山の南側には黒姫山、飯綱山が一直線に並び、西側には佐渡山と焼山が南北に位置する。野尻湖を挟んで東側には斑尾山が位置し、これら6つの成層火山の集まりを妙高火山群と呼んでいる【早津 1985】。

今から數十万年前に始まった妙高火山の活動によって噴出された噴出物は、周辺地域の地形形成に大きな影響を及ぼしている。

小野沢西遺跡周辺の地形を規定しているのは、今から約4,000～4,500年前に噴出された「大田切川火砕流」の堆積物である。この火砕流は北地獄谷から大田切川に沿って流れ、片貝川と小二保川に挟まれた地域に分布し、妙高村北東側の隅にまで達した【早津前掲】。これ以降大幅に地形を変えるような噴火は起こっていないので、約4,000年前には現地形に近い様相を呈していたものと考えられる。

確認できる妙高火山の最後の活動は約2,600～3,000年前に起きたと考えられる水蒸気爆発で、同じ頃焼山でも噴火活動が開始された。

焼山火山東方の火打山から妙高山にかけて点在する天狗の庭・高谷池・黒沢池などの湿原の堆積物中には、高谷池火山灰層グループ(KG)【早津・新井 1985】と呼ばれる火山灰層が何枚も挟まれている。これらの火山灰層のうち、その分布と岩質から焼山起源であることが明らかな火山灰層を、上位のものからKG-a～KG-eと呼称している【早津 1994】。本遺跡でも自然流路中でKG-cの二次堆積物が検出された。

KG-cは焼山起源の火山灰層の中では最も分布範囲が広く、焼山の東方一帯、新井市の周縁部まで広がっている。層相は遠方では土壤の挟みは認められず、灰白色～桃灰色を呈する1層の火山灰層として産出する。噴出時期は、考古遺物との層位関係と<sup>14</sup>C年代値より、今から約1,000年前の平安時代であることが確実視されている。さらに新井市杉明遺跡【高橋勉 1989】で10世紀後半の遺物包含層の直下に産出することから、10世紀後半ないしその直前に限定できると考えられている。

### 2 地理的環境

小野沢西遺跡の所在する新潟県中頸城郡妙高村は妙高山東麓に位置する。村域の南西部は、村名の由来ともなっている妙高山（標高2,454m）をはじめ、西側は火打山などの山々が西頸城山地を形成している。村域の東側は東頸城郡松之山町の天水山から西へ弧を描くように延びる関田山脈の南端にあたり、長野県飯山市方面との境をなす。

妙高村の中央部付近には関川が北流する。関川は火打山・焼山の山腹に源を発し、妙高山と黒姫山の間で谷を刻みながら東流し、妙高山の南東側、妙高高原町関川付近で北に進路を変える。この後、大田切川や矢代川等の河川と合流しながら穀倉地帯である高田平野を潤し、日本海に注ぐ。

この関川を境に、妙高村域の両岸の地形は異なった様相を見せている。関川右岸は東頸城丘陵に続く関

田山脈の広い丘陵地となっているが、左岸は妙高火山の活動によって形成された広大な緩傾斜地が広がる。

本遺跡は関川の左岸、妙高山東側の緩傾斜地に位置し、標高は423～427mを測る。遺跡の南側約1.7kmには妙高山北地獄谷に源を発する大田切川が深い谷を刻んで東流し、南東約1.8kmの地点で関川に合流する。

遺跡の東側約300mの所には日本海側と長野盆地を結ぶ国道18号が南北方向に走っている。現在の路線に改築整備される以前の国道18号は、かつての北国街道にあたる。绳文時代においても、信州産黒曜石が頸城地方に搬入されていることなどから、街道として整備される以前から人々の往来があったと推測される。本遺跡はその交通路と距離をおかない場所に位置していたものと考えられる。

### 3 歴史的環境

#### A 弥生時代

弥生時代の遺跡の分布域は、新潟県側では関川流域の沖積地・西頸城丘陵東縁・妙高山麓、長野県側では野尻湖周辺・長野盆地（善光寺平）・飯山盆地に大別される。長野県側、特に長野盆地に比べて、新潟県側のそれは希薄である。

関川流域の沖積地では、中島廻り遺跡・子安遺跡・本郷新田遺跡・池山遺跡・上百々遺跡・吹上遺跡がある。上百々遺跡では中期の栗林式・後期の箱清水式がやまとまって出土している〔高橋勉1985a〕。吹上遺跡では弥生中期の銅鋤形土器や、玉作り関係の資料が一括出土した。大規模な集落であった可能性があるが、弥生後期には墓域へと転換しており、方形周溝墓群が検出された〔上越市教育委員会2002〕。

丘陵部には高地性集落の斐太遺跡・裏山遺跡・下馬場遺跡等がある。斐太遺跡は弥生時代末期～古墳時代初頭の比較的短い期間に営まれた遺跡である〔駒井・吉田1962〕。近年の分布・確認調査で、沢を挟んで隣接する丘陵でも埋没住居が多数発見され、地域の拠点集落であったことを窺わせる〔佐藤ほか2002〕。裏山遺跡は標高92mの山頂に築かれた弥生後期の高地性集落で、8基の竪穴建物跡が確認された〔小池ほか2000〕。下馬場遺跡では後期後半の竪穴建物14基などが検出され〔小池1998〕、これに隣接する下馬場古窯跡群でも尾根上の舌状台地で埋まりきっていない竪穴建物4基が確認され、2号住居とその周辺から弥生後期の土器が出土している〔小島1989〕。

妙高山麓では中部高地系の土器を出土した遺跡が散見される。中期では栗林式土器を出土した上中島遺跡〔飯坂ほか2000〕、後期では箱清水式土器を出土した伏見遺跡〔新潟県埋蔵文化財包蔵地カード（妙高高原町）〕・籠峰遺跡〔親跡・野村編2000〕・大洞原C遺跡〔三ツ井ほか1997〕・上中島遺跡・野林遺跡〔飯坂ほか前掲〕がある。籠峰遺跡に隣接する和泉A遺跡では绳文時代晩期～弥生時代前期のまとまった資料が出土している〔加藤・荒川1999〕。

野尻湖周辺の弥生時代の遺跡は集落跡は検出されていないが、夫平B遺跡で箱清水式土器4個体が集中して出土し、善光寺平から日本海へ抜けるルートのキャンプ地点であったと推定されている〔中島2000〕。

長野盆地の高丘丘陵では、中期～後期の遺跡として栗林遺跡・七瀬遺跡・西条・岩船遺跡群・安源寺遺跡・間山遺跡などがある。このうち栗林式土器の標識遺跡である栗林遺跡では中期後半～後期にかけての集落跡が検出された。七瀬遺跡では在来の箱清水式土器に伴って、北陸・東海地方を中心とする外来系土器が多量に出土した〔関・中島ほか1994〕。弥生時代後期後半～古墳時代前期の時期ではがまん淵遺跡と牛出古窯遺跡で集落跡・沢田鍋土遺跡で粘土採掘坑群が検出された。がまん淵遺跡は長野県内では

じめて検出された高地性集落である〔鶴田・中島ほか1997〕。

飯山盆地では千曲川左岸の長峰丘陵上に遺跡が多く存在する。中でも小泉遺跡では中・後期の大集落跡や、中期の木棺墓群などが検出されている。照丘遺跡では栗林式土器・建築用材と推定される木製品等が出土した〔小林1994〕。

## B 古墳時代

### (1) 古 墓

高田平野は新潟県内最大の古墳集中域であり、平野周辺の丘陵上を中心に中・後期の群集墳が密集している。また、近年上越市域および南部の沖積地調査が相次いだ結果、地表下1m以下の遺跡の存在が確認された。沖積層に埋没した前期の集落・古墳・周溝墓の存在は、時期による集落域・墓域の変遷を示す。

沖積面の古墳あるいは周溝造構 予安遺跡では弥生時代末～古墳時代初頭の周溝造構が2基検出された〔上越市教育委員会1993〕。中島廻り遺跡では古墳2基〔小島1991〕、月岡遺跡では5世紀中頃の古墳3基が検出された〔高橋勉1985b〕。杉明遺跡では直径4mの円弧状の溝が検出され、小円墳と推定されている〔高橋勉1993〕。

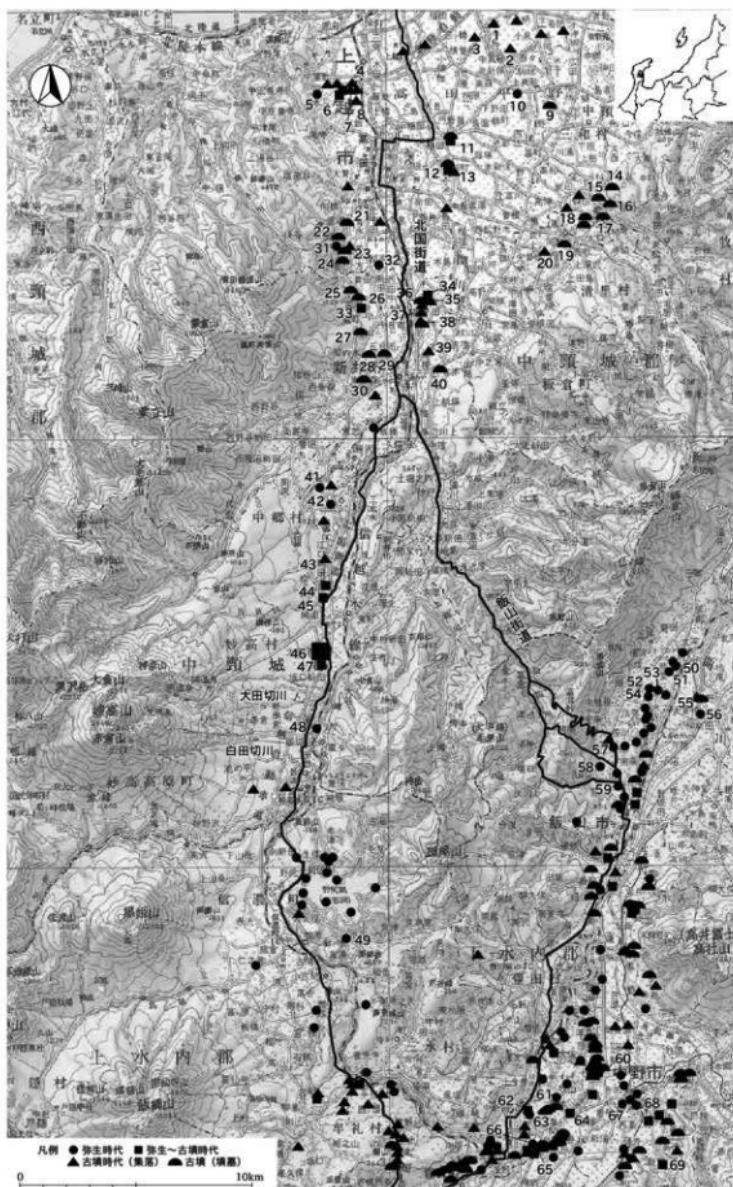
西頸城丘陵東縁 西頸城山地から広がる丘陵の東縁には7群、総計190基前後の古墳が分布しており、矢代川中流域の古墳群と合わせて「頸城西部古墳群」と総称される〔金子・高橋保・秦ほか1980〕。古墳群は北から灰塚古墳、黒田古墳群、南山古墳群、稻荷山古墳群、青田古墳群、親音平古墳群、天神堂古墳群と呼ばれている。これらの大半が径10m前後的小規模墳で、径20mを越えるものが若干存在するとされてきたが、最近の親音平古墳群における確認調査〔佐藤ほか2002〕で、4号墳が主軸長33.6mの前方後円墳であることが明らかとなった。頸城平野では菅原古墳を凌ぐ最大規模のものである〔橋本博文2002〕。

矢代川中流域の古墳 新井市の南西部にあり、妙高山の火山性堆積物が形成した緩斜面上に立地する。梨ノ木古墳群、谷地林古墳群、小丸山古墳群がある。

飯田川・櫛池川扇状地の古墳群 「頸城東部古墳群」と総称される〔金子・高橋保・秦ほか前掲〕。これには水吉古墳群、宮口古墳群、水科古墳群、高士古墳群、菅原古墳群、北方古墳群があり、総計200

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	北側遺跡	19	菅原古墳群	36	杉明遺跡	54	東長峰遺跡
2	前田遺跡	20	岡崖遺跡	37	栗原遺跡	55	上野遺跡
3	津倉田遺跡	21	灰塚古墳群	38	月岡遺跡	56	大倉崎遺跡
4	一之口遺跡	22	黒田古墳群	39	宮ノ本遺跡	57	北原遺跡
5	裏山遺跡	23	南山古墳群	40	西俣1号墳	58	鶴治田遺跡
6	山畠遺跡	24	細荷山古墳群	41	野林遺跡	59	須田ケ峯遺跡
7	池山遺跡	25	青田古墳群	42	上中島遺跡	60	七瀬遺跡
8	本郷新田遺跡	26	親音平古墳群	43	横引遺跡	61	栗林遺跡
9	大野古墳群	27	天神堂古墳群	44	龍峰遺跡	62	牛出遺跡
10	下削遺跡	28	梨ノ木古墳群	45	和泉A遺跡	63	牛出古窓遺跡
11	中島廻り遺跡	29	谷地林古墳群	46	小野沢西遺跡	64	安源寺遺跡
12	予安遺跡	30	小丸山古墳群	47	大洞原C遺跡	65	がまん瀬遺跡
13	今池遺跡	31	下馬場遺跡	48	伏見遺跡	66	沢田鋸上遺跡
14	水吉古墳群		下馬場古窓跡群	49	大平B遺跡	67	岩船遺跡
15	水科古墳群	32	吹上遺跡	50	光明寺前遺跡	68	西条遺跡
16	宮口古墳群	33	斐太遺跡	51	照丘遺跡	69	間山遺跡
17	北方古墳群	34	上百々遺跡	52	柳町遺跡		
18	高士古墳群	35	倉田遺跡	53	小泉遺跡		

第1表 周辺の遺跡一覧表



第4図 周辺の遺跡

[原図：国土地理院 1:200,000 地勢図「高田」 平成10年2月発行]

基以上が存在すると言われる。古墳群は飯田・櫛池両河川の上流域に位置し、約3kmの範囲内に近接している。菅原古墳群内の前方後円墳1基は「菅原古墳」と呼ばれ、長軸約30mを測る。

頸城東部古墳群から3kmほど下流の飯田川右岸に大野古墳群が位置する〔吉川2001〕。

上記の古墳群のほか、これまで後期古墳が未発見であった関川右岸の新井市吉木地区において、石室をもつた古墳が新たに検出されており、頸城地方における古墳文化の受容とその後の展開を考える上で重要な発見と言える〔佐藤・高橋勉2000〕。

長野盆地から飯山盆地にかけては、千曲川沿いの丘陵上に古墳が密集する。

## (2) 集落遺跡の調査

古墳時代の集落遺跡の確認例は、新潟県側では平野部・丘陵ともに少ない。

前期の遺跡は、一之口遺跡東地区で竪穴住居2基、多数の土坑・溝が〔鈴木・春日ほか1994〕、山畠遺跡で竪穴住居2基と土坑1基が〔小島1979〕、前田遺跡では土坑・溝・井戸のほか、円形周溝状遺構が検出された〔小島・中西ほか1996〕。北割遺跡では、土坑・溝のほか、多数の土器が出土した〔小島・笛澤1995〕。津倉田遺跡では古墳前期から古代へ至る、竪穴建物・平地式住居・掘立柱建物・溝・土坑・方形周溝墓が検出された〔笛澤・小島1999〕。妙高山麓では大洞原C遺跡に前期のまとまった資料があり、東海系・畿内系など多系統の土器が交錯している〔三ツ井ほか前掲〕。籠峰遺跡・横引遺跡でも東海系S字甕・畿内系布留式甕が出土している〔川村1988a、親跡・野村編前掲、立木(土橋)1996〕。

中期の遺跡は少なく、月岡遺跡では井戸・土坑から5世紀前半の土器が出土している〔高橋勉前掲〕。北割遺跡においても中・後期の土器が出土している〔小島・笛澤前掲〕。

後期では杉明遺跡・倉田遺跡・栗原遺跡・宮ノ本遺跡など新井市栗原周辺での遺跡集中が見られる。杉明遺跡では竪穴建物30基が検出され、大規模な集落の存在が推測されている〔高橋勉前掲、新井市教育委員会1996〕。上越市域でも山畠遺跡、一之口遺跡東地区で6~7世紀の竪穴建物が検出されている〔小島前掲、鈴木・春日ほか前掲〕。頸城東部古墳群周辺の唯一の集落跡に岡嶺遺跡がある。菅原古墳群と同一段丘状に立地し、同時期であることから古墳群との関連が注目される。

長野県側においても古墳時代の集落遺跡は少ないが、長野盆地では牛出古窯遺跡とがまん淵遺跡で弥生時代後期後半~古墳時代前期初頭の集落跡が検出された〔鶴田・中島ほか前掲〕。

飯山盆地では上野遺跡で北陸系の土器を伴った前期の竪穴建物と方形周溝墓が検出された〔常盤井・望月・高橋桂ほか1994〕。

本章は県教委・埋文事業団により既刊の一之口遺跡東地区〔高橋一功1994〕、大洞原C遺跡〔武田1997、星1997〕、裏山遺跡〔小池ほか前掲〕、黒田古墳群〔尾崎2002〕の報告書をもとに加筆・修正したものである。長野県側の遺跡については長野県飯山市教育委員会により既刊の上野遺跡〔小林前掲〕、北町遺跡II〔高橋桂・望月2001〕と長野県埋蔵文化財センター既刊の牛出遺跡ほか〔鶴田1998〕、貫ノ木遺跡ほか〔大竹2000〕を参考にした。街道については北国街道〔新潟県教育委員会1991・1993、長野県教育委員会1980〕、飯山道〔長野県教育委員会1982〕をもとに作図した。

## 第III章 層序と遺構

### 1 グリッドの設定

グリッドは日本平面直角座標第Ⅳ区（山陽地系）のX軸を主軸に設定した（第6図）。設定にあたっては、高速道路法線センター杭STA438+20 (X = 101847.881200, Y = -25075.462890) と STA439+00 (X = 101926.281890, Y = -25091.355770) を基準として座標計算を行った。グリッド主軸に対する磁針方位は西偏約7°、真北方向角は0°-10'-09"である。本報告書で示す北は座標のX軸方向を指す。

10m方眼を大グリッドとし、南北方向は南から算用数字を付し、東西方向は西からアルファベットを付して「19H」のように組み合わせて大グリッド名とした。各大グリッドを示す杭はグリッド南西隅に打設した。大グリッドを2m方眼に25分割したものを小グリッドとし、1~25の算用数字を付し、大グリッド表示に続けて「19H1」のように表記した（図版1）。

### 2 層 序

#### A 基 本 層 序（図版32）

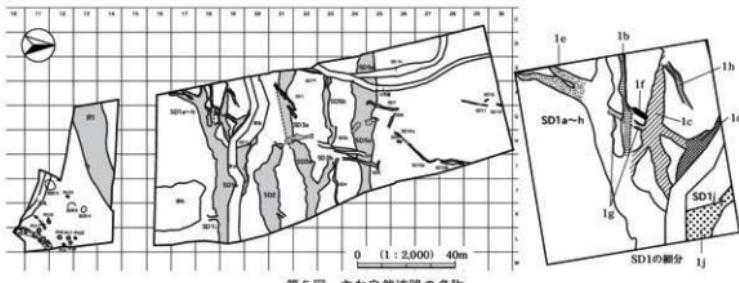
遺跡は妙高山東麓の標高423~427mの緩斜面に位置する。調査着手前の現況は山林および畠地であった。

基本的には上位から表土・黒色土（遺物包含層）・漸移層・地山（大田切川火砕流堆積物・遺構確認面）という堆積状況を示すが、自然流路の影響等で若干の変化がある。地山面には大田切川火砕流堆積物に含まれる大小の礫が多数表していたが、沢1周辺では礫は少なかった。なお、「94・'95の各調査区では層名が異なるので、詳細と各年度の対応関係を第7図に示す。

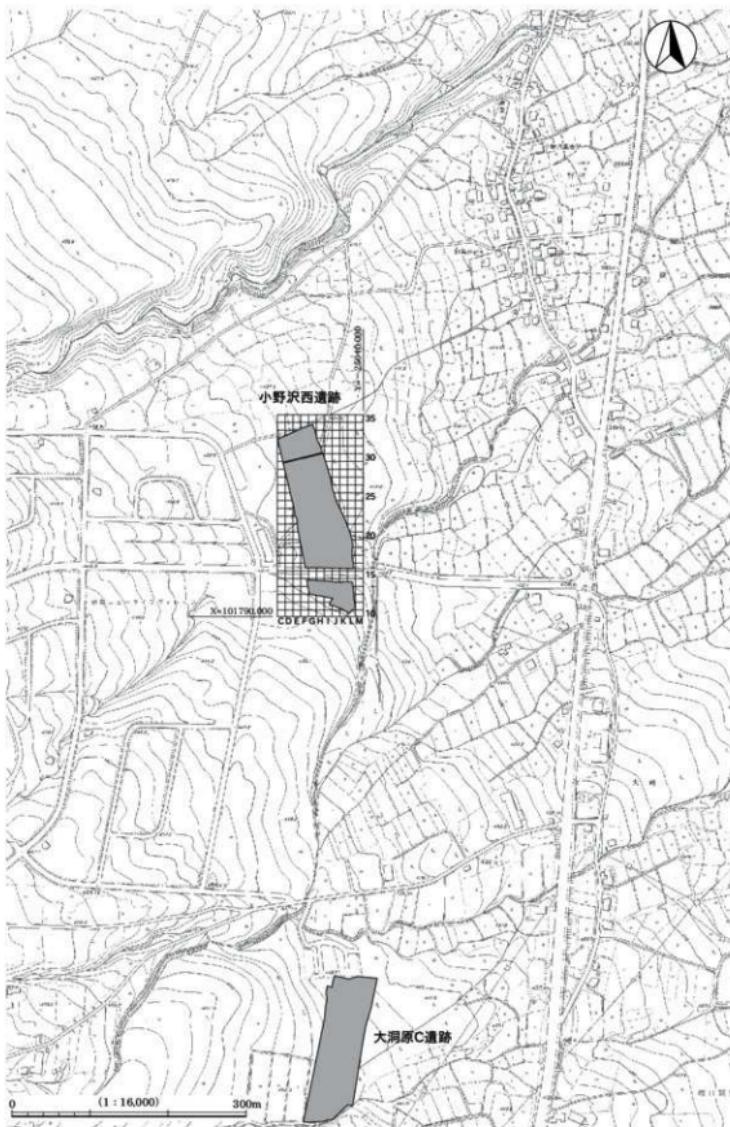
#### B 自 然 流 路（図版1~5・31~34）

##### (1) 概 要

調査区では複数の自然流路（沢1, SD1~9）が検出された（第5図）。幅10m前後の自然流路は地形の

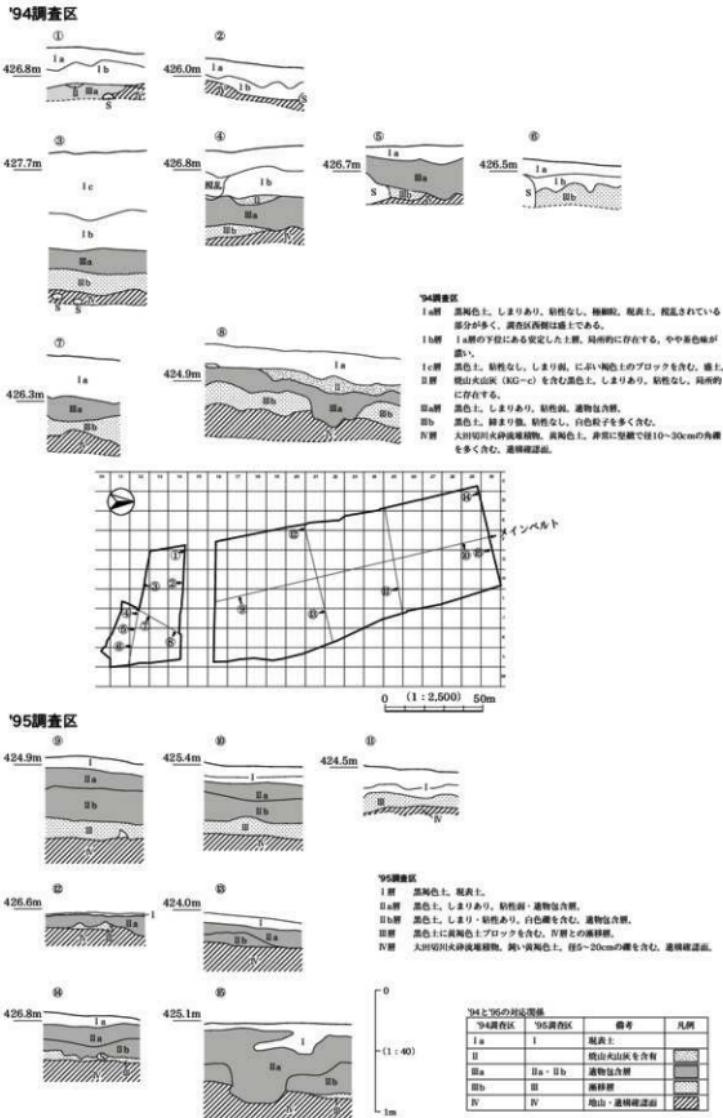


第5図 主な自然流路の名称



第6図 グリッド設定図(旧測地系に基づく)

[原図：妙高村都市計画図6 1:2,500 昭和58年測図]



第7図 基本層序

傾斜に従って調査区外の東西へ連続する。幅2mほどの自然流路の多くはほぼ南西一北東方向に走るが、地山面から浅いため全体を検出することはできなかった。調査区外に目を転じると、遺跡周辺の妙高山東麓裾にあたる当地域には現在でも西から東へと下る沢や河川が数多く見られる。当遺跡でも、「'94調査区の沢1」が検出された場所は調査時点でも草が生育する沢であり、地山から突き出た巨礫が頭を覗かせていた。「'95調査区のSD1」が検出された場所にはコンクリート製の用水路が敷設されていた。

「'94調査区の沢1」および、「'95調査区のSD1～3・5」では焼山火山灰（KG-c；第II章1参照）の二次堆積層が認められた（以下、焼山火山灰層と略す）が、これらの焼山火山灰層が同時期の所産かどうかは不明である。SD1～3・5の調査では、焼山火山灰層を目安にその上下を区別して遺物を取り上げ、併せてセクション図も作成したが、遺物の取り上げで記録した土層名（註記）とセクション図に記した土層番号は一致していない。

各説では出土遺物がある自然流路の概要と出土遺物の註記について説明する。遺物の註記とセクション図中の土層番号の対応関係が明らかなものについては、図版4・5の土層説明文文末尾に（ ）で対応する註記を示した。

## （2）各 説

### 沢1（図版2・4・32）

13Gから14Jにかけて流れる幅約10m、確認面からの深さ約1mの自然流路である。4層に火山灰層がある。8層から弥生時代中期～古墳時代の土器が出土したが、出土量は少ない。

### SD1（図版2・4・32・33）

17Fから19Lにかけて流れる幅約10m、深さ約1mの自然流路である。西側は複雑に枝分かれしている。なお、SD1と流路方向を同じくするコンクリート製用水路と、これを作るときに搅乱された部分により全体の3分の1程度が破壊されている。調査にあたってはSD1をa～jに細分し、この細分名称に基づいて遺物の取り上げと記録類の作成を行った（第5図）。出土遺物の註記は焼山火山灰層を指標として上を「灰上」「灰上黒」、下を「灰下」とした。このほかメインベルト東側では、焼山火山灰層より下の砂層から出土した遺物について「砂」「灰下砂」、その上の層を「砂上」とし、地山直上から出土したもの「地上」とした。

**SD1a** メインベルト東側では、SD1aの検出に至る前のII a層・II b層でも大量の土器が出土した。検出後は表土から70～80cmほどの深さまでのII a層・II b層、その下の砂層や砂層に挟まれた黒色土からも遺物が多く出土した。地山面から約1m掘り下げたが、湧水のため完掘できなかった。

メインベルト西側は比較的浅く、遺物量も少なかった。礫が非常に多く、SD1eでみられた小礫が底面に敷き詰められたような状態の部分も確認された。SD1a東側セクション中の焼山火山灰層より上で古墳時代の土師器が出土しているので、これを二次堆積層と考えた。

**SD1c** 東西方向に約25m流れ、東端は三股に分かれてSD1a・1dに合流する。南側の支流の底面では礫が敷き詰められたようになっていた。西端は非常に浅く、輪郭を捉えることはできなかった。

**SD1d** 大部分がコンクリート製用水路に破壊されており、詳細は不明。南側がSD1cと合流する。

**SD1e** 底面には小礫が敷き詰められたような状態で並んでいた。似たような状態はほかのSDでも確認されているが、一定の距離で確認されたのはSD1eのみである。小礫は径3～5cm程度でそろってい

るが、中には15～20cmほどの大きな礫も含まれている。

**SD1i** SD1aの南側に流れ込む幅約1.3m、長さ約4mの自然流路である。

**SD1j** SD1aの北側を並行して流れが、コンクリート製用水路が間を擾乱しており、SD1aとの関係は不明である。おそらくSD1aと同一流路であり、コンクリート製用水路のあたりに最深部があったと推定される。発掘途中で湧水があり、完掘できなかった。遺物は5層の砂層からの出土が多い。

#### SD2 (図版3・5・34)

21Hから21Lにかけて検出された幅約9m、深さ約90cmの流路である。遺物は流路際の肩部から底部の砂礫にかけて出土した。出土遺物の註記は火山灰層より上を「灰上」「灰上黒」「黒色灰上」とし、下を「灰下」「灰下黒」「灰下砂」とした。地山直上の層位については「地上砂」「地上」「地上黒」とした。流路際の肩部付近出土のものについては、「カタクロ」「カタ」とした。

#### SD3 (図版3・5・34)

21Eから22Kにかけて幅約5mにわたって検出された部分をSD3a、北側でこれに流れ込む部分をSD3bとした。

**SD3a** II区②では造構確認面まで掘り下げ、流路の範囲を確定した。その後、2m幅のトレンチを4mおきに設定して覆土を掘削した。遺物は焼山火山灰を含む1層から主に出土した。遺物の註記は火山灰層を指標に「灰上」「灰下」とした。21・22Hグリッドでは硬い砂層に石が詰められた状態の部分が確認されたため、これを「石敷き①」として調査を進めた。

II区⑤では、中央部が深く東西がやや浅くなっている、遺物は中央部の窪んだ所から西側にかけて多く出土した。21F3・4付近では径約3mの範囲に赤褐色と白色の火山灰が入り混じった堆積が見られたが、この火山灰中から遺物は出土しなかった。

**SD3b** 幅約4m、確認面からの深さ約30cmで、23I・JでSD3aの北岸に合流する。出土遺物僅少。

#### SD5 (図版3・5・34)

24Dから24Jにかけて幅約10mで延びるSD5aと、これに並行して23Eから23Hに幅約3mで延びるSD5b、南北方向に走りSD5aとSD5bを結ぶSD5cに細分される。遺物は焼山火山灰層より上位から出土し、「灰上」「灰上黒」と註記した。

**SD5a** II区②では輪郭を確定した後、幅2mのトレンチを4m間隔で設定し、覆土の掘削を行った。遺物出土範囲が限られていたので、遺物出土の可能性が低い24Hグリッドではトレンチを設定しなかった。24Iグリッドで南北方向に横切るSD6とSX2に切られるが、遺物が出土したのはこの周辺に限られていた。II区⑤では全面的に掘り上げたが、出土遺物はなかった。24FグリッドでSD14に切られる。

**SD5b** 尾根上を枝分かれることなく東西方向に延びる、幅約2～3.5m、深さ30～60cmの自然流路である。底に径10～30cmの礫が多く含まれる。礫は流されたり、投棄されたりしたものではなく、水流が地山の土砂を流した結果そこに残された、洗い出しの礫と考えられる。

### 3 遺構

地山上面を確認面として、ピット8基、溝5条が検出されたほか、性格不明のSXが2か所、小縫集中域が4か所検出された。

#### A ピット (図版7・36)

'94調査区において8基検出された。掘り形はいずれも円形の皿型を呈し、覆土は黒色土である。周囲には地山由来の巨縫が多数存在した。遺物が出土したのはPit8・13・19・22である。Pit8は覆土から古墳時代の甕の体部破片が1点出土したが、磨耗している。Pit13の表面からは古墳時代の甕体部片、Pit19・22では覆土から土師器細片が出土した。

#### B その他の遺構

##### (1) 溝 (図版3・5・7・36)

溝は'95調査区II③・④区で検出された。自然流路のない、比較的平坦な場所での検出である。構築時期はSD10～13が不明、SD14が近世である。

##### SD10a (図版3・5)

26Hから28Iにかけて途中緩やかに屈曲しながら連続する、幅約30cm、深さ約8cmの溝である。底面の凹凸が激しい。出土遺物はない。自然流路の可能性もあるが、覆土に自然流路には見られない地山の土がブロック状に混じっていることから、人為的に掘られたと判断した。

##### SD11 (図版3・5)

29F・Gにおいて南北方向に直線的に延びる幅約30cm、深さ約15cmの溝である。底面は比較的平坦で、壁面もしっかりしている。出土遺物はない。同方向に延びる溝としてSD13があるが、1.5mほど西にずれている。土地を区切る区画溝の可能性がある。

##### SD14 (図版3・7・36)

22Eから28Dにかけて検出された幅約1.7m、深さ約1mの溝である。検出当初は大きく弧を描く平面形から、古墳あるいは塚の周溝の可能性も視野に入れて調査を進めた。土層観察の結果、古墳あるいは塚の盛土がなく、古墳時代の包含層より上から掘り込まれていることが確認された。平面形も円形を描くものではなく25Eより南では直線的に延びることが明らかとなり、周溝の可能性は否定された。また、覆土から江戸時代後期の陶器や泥面子が出土したことから、構築時期は江戸時代以降と推定される。

##### (2) SX (図版3・5・34)

SX1・2が検出された。両者ともに自然流路上面で検出され、幅約1mの範囲に小石と土器片が混じった覆土が道状に連続する。土器の出土層位は、SX1が1層、SX2が1～3層である。底面には凹凸があり、深いところは約20cmである。SD1e底面にも似たような小縫の堆積が見られることから、非人為的

なもののが可能性が高いが、成因は不明である。

### (3) 小礫集中域（図版2・3・6・35・36）

'94調査区では「道状造構」、'95では「石敷」と呼称して調査を進めた場所である。

地山上面で、径約1～3cmの小礫が黒色土とともに敷き詰められたような状態で検出された。小礫と黒色土は非常に硬く固結しており、掘ると板状に割れた。'94小礫集中域1では2～5cmの珠洲焼製円盤や珠洲焼片（図版30-1～5）が出土した。'95小礫集中域1・2が自然流路の底面で検出されたことや、固結した土層を除去した下に土坑などが認められないことから非人為的なものである可能性が高いが、成因は不明である。

# 第IV章 遺物

## 1 概要

遺物の大半は自然流路である沢1・SD1～3・5と包含層から出土し、遺構から出土したものは僅少である。自然流路出土遺物の所属時代は縄文時代～古代までの幅があるが、出土層位が時代・時期を反映してはいなかった。以下の記載は時代ごとに項を分けて行い、その中で遺構・自然流路・包含層の順に記述を進める。

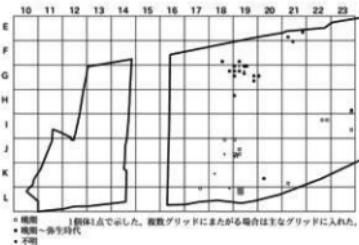
## 2 縄文時代 (図版8・9・37・38)

縄文時代の遺物には土器と石器がある。土器はおよそ44個体が出土し、晩期に属するもの17個体、晩期～弥生時代にかけてのもの19点、細片で時期不明のもの8個体に分類される。晩期～弥生時代にかけてとしたものの中には、縄文施文の弥生土器の可能性があるものも含まれる。この他に、一次調査トレンチ出土資料・表面採集資料がある。

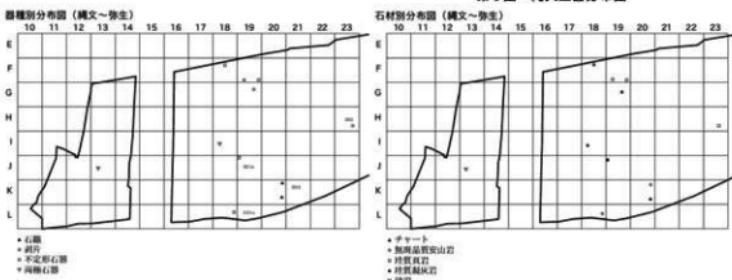
石器は所属時期の細分が困難だったため、縄文時代～弥生時代に属すると推定される石器をここで報告する。11点が出土し、石鏃2点、両極石器2点、不定形石器 [鈴木1996] 4点、剥片3点に分類される。この他に、表面採集の剥片・不定形石器各1点がある (第9図)。

### a) SD1

縄文時代晩期～弥生時代にかかる土器が出土した。1は波状口縁の突起部分で、口縁に沈線が引かれている。3は浮線網状文が施文される、晩期



第8図 縄文土器分布図



第9図 石器分布図

末葉水I式の浅鉢である。4は器面ミガキの後沈線が引かれ、沈線間に列点が施文されている。晩期前葉と考えここに置いたが、コの字重ね文が施文された弥生時代中期栗林式土器の可能性も残る。5～7は輪積み痕が明瞭に残る。5は佐野I式並行、6は水I式並行の粗製深鉢である。7は壺の可能性もあり、所属時期は縄文晩期末～弥生時代前期の時期幅を考えておきたい。8は浅く幅広い沈線が引かれる。

石器は不定形石器2点が出土した。1は石匙状の抉り部が作り出されているが、刃部の加工は見られない。図示していない1点は微細剥離が認められる。

#### b) SD2

晩期水I式の土器が出土した。9は口縁端部に突起がある。口縁部はミガキ、体部は条痕の調整後、沈線が斜位に施文される。10は口縁部に2本の幅広い沈線が引かれ、体部には細密条痕が施される。

石器は凹基無茎石鏟1点(2)がある。

#### c) SD3a

後期佐野II式あるいは水I式並行の土器と時期不明の細片が出土した。14は小型の粗製土器で口縁に2本の沈線が引かれる。15は口縁端部に突起がある。残存するのは5か所だが、配置から7単位の突起が付されていたと推定される。口縁部に補修孔があけられている。11～13は所属時期不明である。11は撫糸Rの付加条が施文される。12・13は縄文が施文される。13は弥生時代に属する可能性がある。

#### d) SX2

後期佐野I式並行の土器が出土した。16の浅鉢は、沈線で三叉文が施文される。17は口縁部の並行沈線間に刺突が施され、体部にかけて逆U字の沈線が引かれる。

石器は図化していないが、珪質頁岩製の剥片1点がある。

#### e) 包含層ほか

中期～晩期の土器がある。18・19は厚手の器壁に半截竹管文が施文される。ともに中期前葉の深沢式に属する。20・21は晩期水I式に属する。20は条痕地文に沈線が施文される。21は口縁端部に刺突が施され、突起状を呈している。残存するのは2か所であるが、角度から9単位と推定される。22は口縁端部に葺状の突起があり、突起を含めた口縁端部に沈線が引かれる。口縁部の文様は工字文的である。飛驒地方晩期後半のいわゆる阿弥陀堂式〔藤田・上嶋1993〕に類する土器である。

石器は石鏟1点(3)、両極石器2点(5)、不定形石器2点(4)、剥片1点が出土した。石材は石鏟がチャート、不定形石器が珪質頁岩2点、チャート1点、剥片が珪質頁岩である。

### 3 弥生時代中期～古墳時代(図版10～29・38～52)

#### A 土器の調整

土器の器面調整には、ハケメ調整・ヘラナデ調整・ヘラケズリ調整・ヘラミガキ調整・ナデ調整・ヨコナデ調整・タタキ調整などがあるが、以下の記述では「調整」を省略し、単に「ハケメ」・「ヘラミガキ」・「ナデ」などと表す。主な調整の内容は次の通りである。

ハケメ 板の小口面を使い土器の表面を調整するもので、器面には平行する条線が残される。

ヘラナデ 工具の幅のみ残り、ハケメのような条線は認められない。ハケメと同じ工具で使用頻度が少なく、木目の凹凸が明瞭でないもの、もしくは作業面を木目に平行する方向で切ったものを想定している〔春日1994〕。

ヘラケズリ 調整時に生じた砂礫の移動痕が明瞭に残るもの。

ヘラミガキ 幅の狭い工具で器面を磨いているもので、工具痕が明瞭に残るものと残らないものがある。工具痕が明瞭な場合はそれを図示し、それ以外はミガキの方向を矢印で示した。

ナデ 不定方向のナデ。

ヨコナデ 回転を用いるナデ。

## B 土器分類

弥生時代中期から古墳時代の土器については、弥生時代中期中頃、弥生時代中期後半、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期～後期の4時期に大別し、それぞれの時期ごとに分類を行う。土器分類は図示した個体をもとに行った。なお、時期については観察表・挿表中では便宜的に、「弥生時代中期中頃=区分0」、「弥生時代中期後半=区分1」、「弥生時代後期～古墳時代前期=区分2」、「古墳時代中期～後期=区分3」として表示した。

分類に先立ち、図示した遺物の抽出方法について説明する。遺物の抽出は、まず自然流路・遺構単位で行った。自然流路は範囲が広いこともあり、大グリッド単位で器種・器形の抽出を行った。次に包含層の大グリッド単位で抽出を行った。包含層のうち、自然流路にかかる部分については自然流路出土遺物で見られなかつた器種・器形のものを中心に選んだ。それ以外の大グリッドでは大グリッド単位で器種・器形の異なるものを抽出した。

記述にあたっては「壺形土器」「壺形土器」等の呼称を「壺」「壺」のように省略して用いる。土器の部位名称および分類図は第10～18図に示す。

### (1) 弥生時代中期

弥生時代中期の土器には中期中頃の条痕文系土器と中期後半の土器がある。中期後半の多くは栗林式土器である（第10図）。

#### a) 中期中頃

中期中頃の土器には、条痕文が施文された壺体部片がある。細分は行わない。概ね栗林式直前か栗林I式の段階である。262は条痕の下に点列が施文されることから栗林I～II（古）式まで下る。

#### b) 中期後半

中期後半の土器には壺・壺がある。

壺 壺は器形・文様等で7類に分類した。

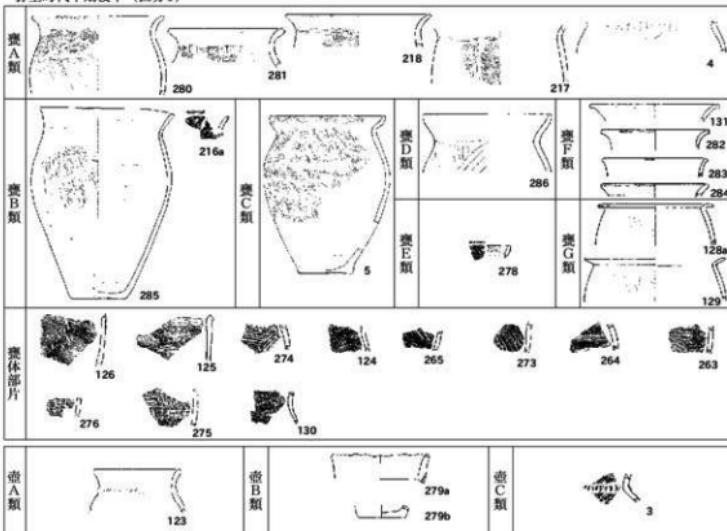
A類 口縁部が外反し、頭部がほとんどくびれない。口縁部は無文、口縁端部には縄文が施文される。頭部以下は櫛描文が施文される。

280頭部と281体部の櫛描波状文はコンバス文状を呈し、他の櫛描波状文とは施文方法が異なる。

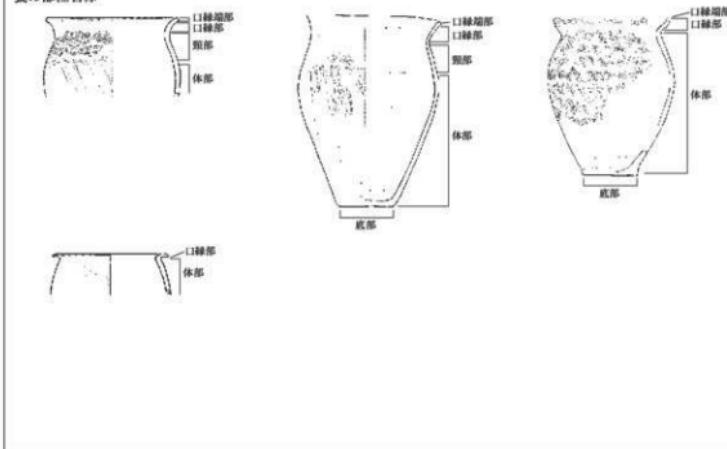
## 弥生時代中期中頃（区分0）



## 弥生時代中期後半（区分1）



## 表の部位名称



第10図 弥生時代中期の土器

217・218は一見すると同様の文様構成であるが、施文順序が異なる。218が始めに頸部の横走櫛描直線文を施文、その後体部に施文するのに対して、217では始めに体部に施文、最後に頸部の横走櫛描直線文を施文している。

**B 類** 口縁部が外反し、頸部がややくびれ胴部上半部に最大径をもち、直線的に底部に至る。口縁部は無文、頸部～体部上半部には櫛描文が施文される。

285は体部の単斜条痕の隙間に部分的に櫛描波状文がのぞき、単斜条痕より上位にある1か所のみ明瞭に確認できる。土器の正面観〔上田1995〕を意識している可能性がある。

**C 類** 口縁が短く外反して立ちあがる。5のみ確認された。

5は口縁部に2本組の篦描波状文、体部に櫛描波状文が施文される。体部の櫛描波状文は弥生時代後期の櫛描波状文と比較して施文単位が長い。

**D 類** 口縁部がくの字にやや長く緩やかに外反し、内湾気味になる。口縁端部に篦刻み、体部に複合鋸歯文が施文される。後期まで下る可能性がある。286のみ確認された。

**E 類** 口縁部が内湾する。縄文地文に沈線が施文される。壺の可能性もある。278のみ確認された。

**F 類** 口縁端部に縄文が施文されるが、全体の器形が不明なものを一括した。

**G 類** 口縁部が強く外反する、薄手で精緻な作りの甕。山陰系の甕の搬入品・模倣品。

128は胎土が緻密で雲母が少ない。焼成も良好である。胴部最大径から底部にかけて徐々に薄くなり、底部の薄さは特徴的である。口縁部の強い屈曲は模倣品では見られないことから搬入品と考えられる。

129は128に似るが口縁端部が丸く、口縁部のヨコナデがやや粗雑であることから模倣品と考えられる。体部片 文様には櫛描縦羽状文・直線文・簾状文・波状文等がある。275は甕の体部上半部の可能性がある。130は甕の頸部で半截竹管刺突列の上下に縄文が施文される。ここでは弥生中期に含めたが、所属時期の詳細は不明である。

**壺 壺は器形・文様で3類に分類した。**

**A 類** 小型広口壺で、頸部に横位沈線を這らし、間に縄文を施文する。

**B 類** 短頸壺で、口縁端部に大ぶりな刺突が行われる。

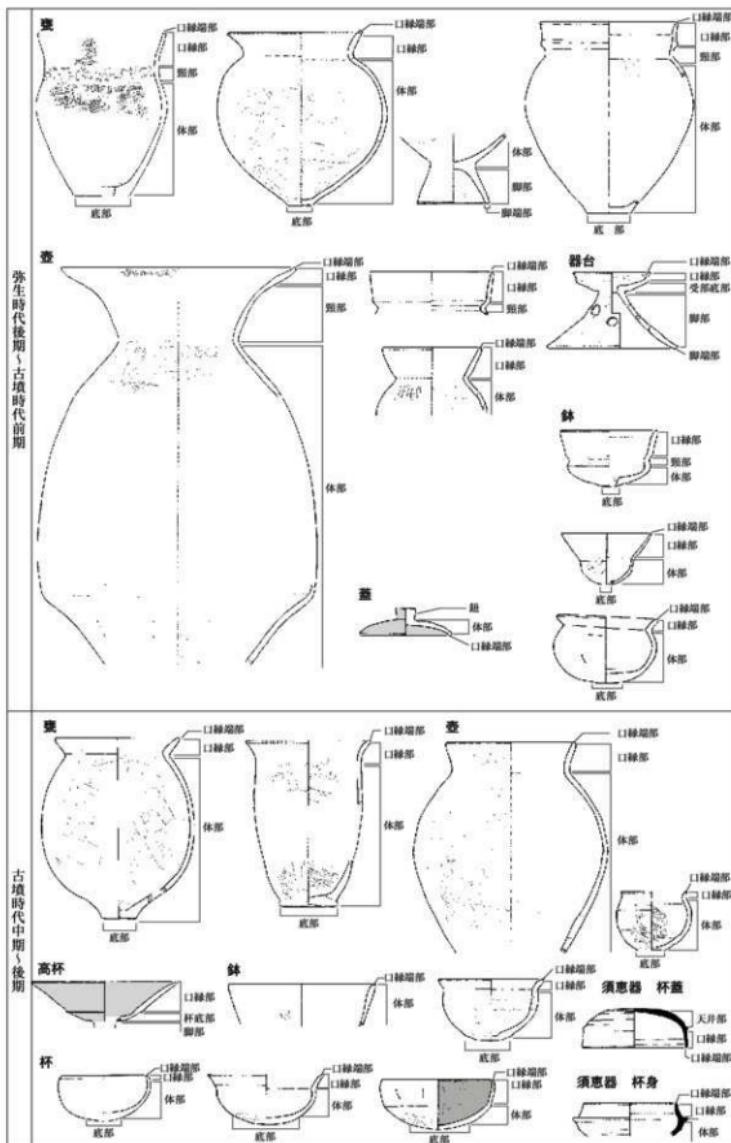
**C 類** 鋭く屈曲する頸部に隆帶が貼り付けられ、隆帶上にヘラ状工具による刺突が施される。弥生中期に含めたが、所属時期の詳細は不明である。

## (2) 弥生時代後期～古墳時代前期

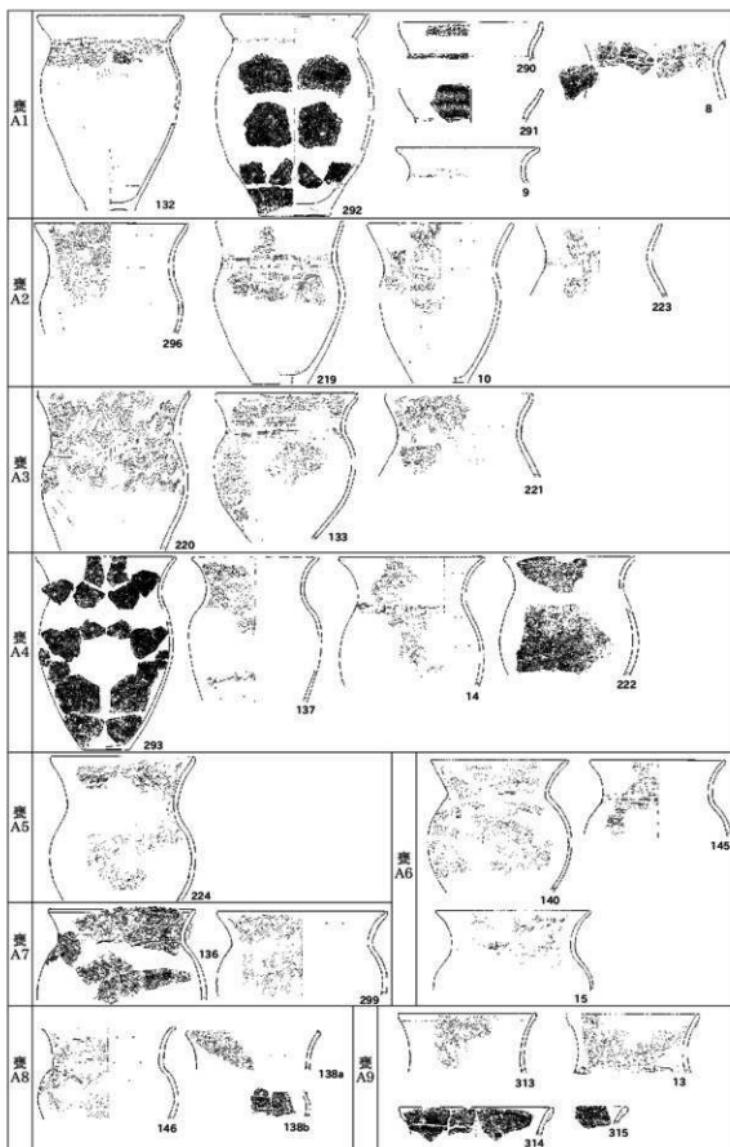
弥生時代後期～古墳時代前期の土器には甕・壺・器台・高杯・鉢・有孔鉢・蓋がある(第12～15図)。

以下に分類を示すが、各器種内での細分は全形のわかる個体が少ないと認め部分的な違いに着目して行った。このため全体として統一を欠いた分類となっていることをあらかじめ断っておく。また、破片の國化にあたっては、器形・法量とも十分検討しているが、小破片などは資料の制約上、正確さを欠く面もあるかもしれませんことを付け加えておく。

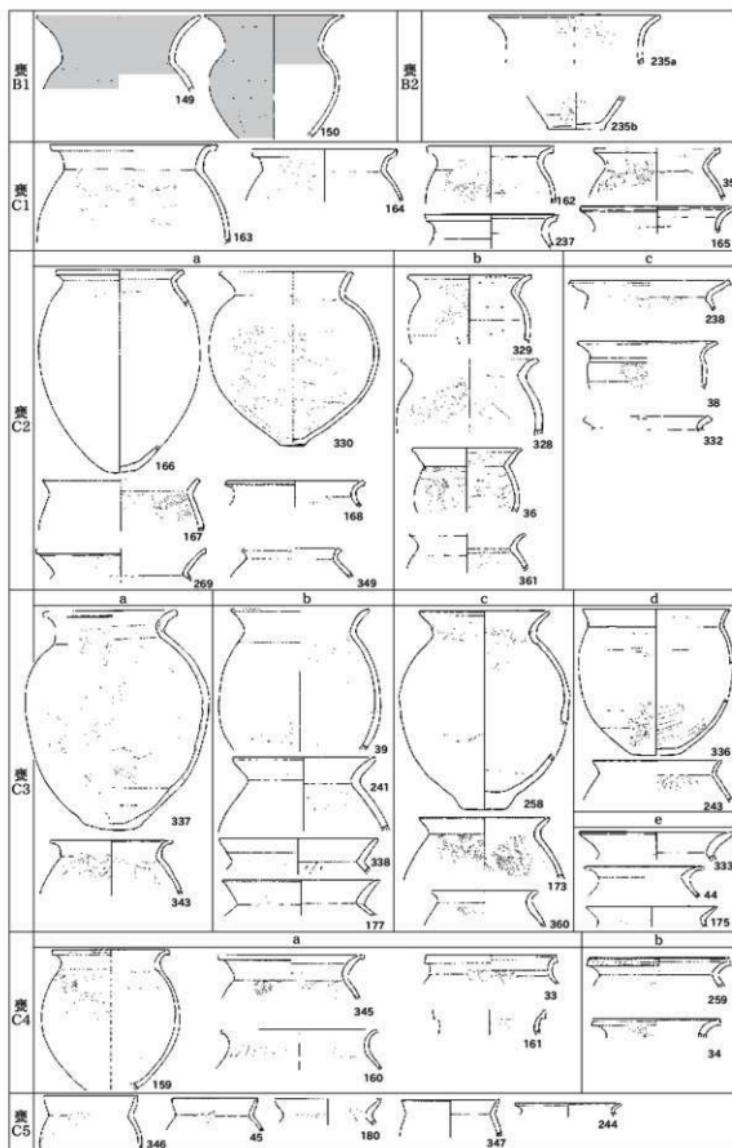
**甕** 12類に分類した。分類は形態上の系譜関係を重視して行ったが、全形がわかる資料が少ないこともあり、実際には口縁部の形態に主眼を置いた分類となっている。このため、系譜については必ずしも適切とは言えない面もある。各分類の比率は計量を行っていないため詳細なことは言えないが、口縁部破片数でいえばA・C類が多く、次いでD・G類が一定量存在し、B・E・F・H～K類は図示したもの



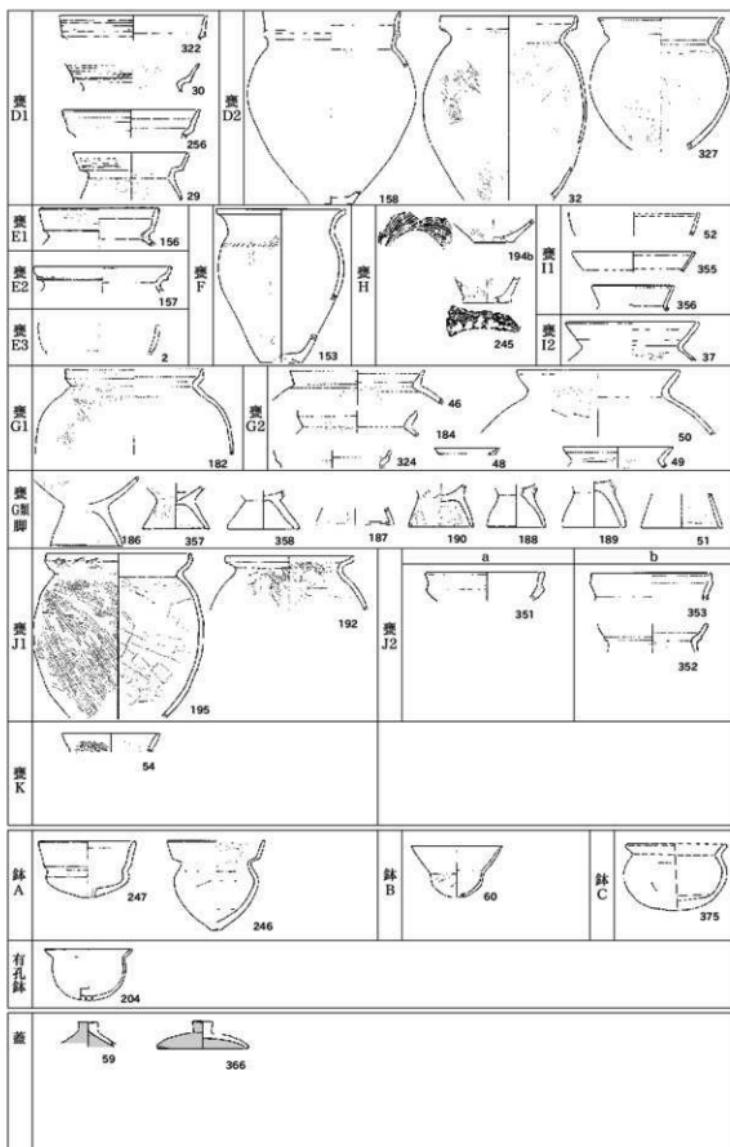
第11図 弥生時代後期～古墳時代の土器 各部名称



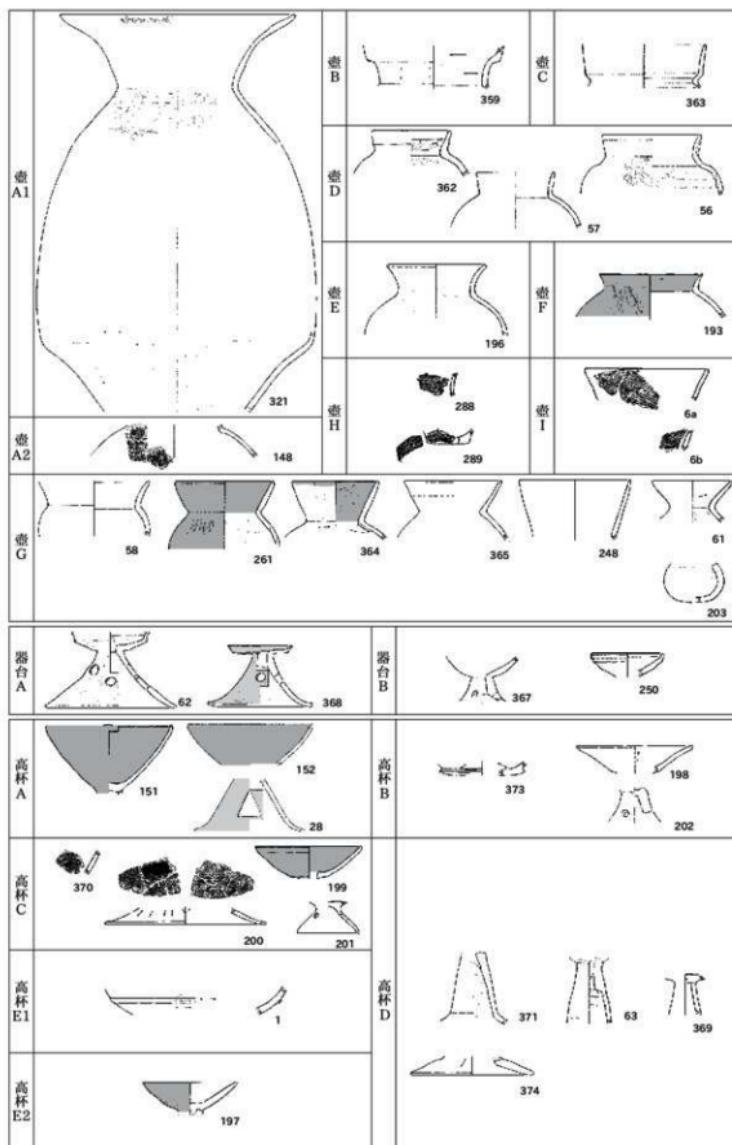
第12図 弥生時代後期～古墳時代前期（区分2）の土器（1）



第13図 弥生時代後期～古墳時代前期（区分2）の土器（2）



第14図 弥生時代後期～古墳時代前期（区分2）の土器（3）



第15図 弥生時代後期～古墳時代前期（区分2）の土器（4）

がほぼすべてである。

A類 箱清水式土器のうち、櫛描文が施文される平底の甕。基本的に、外面は頸部に櫛描簾状文、体部上半部に櫛描波状文が施文され、体部下半部に縱方向のミガキが行われる。内面調整はハケメのものもあるが、多くは最終的にミガキが行われる。器形で9細分した。

A1類 口縁部が内弯気味に聞く。口縁部は基本的に無文だが、櫛描波状文が施文されるものもある。

A2類 口縁部が伸長しつつ聞く。体部は上位に最大径をもち、体部の櫛描波状文は2～3段程度。

A3類 口縁部が伸長し、端部がつまみ上げられる。胴部は上位に最大径をもつ倒卵形となる。頸部・口縁部との境は不明瞭である。

A4類 口縁部が伸長しつつ外反する。胴部は上～中位に最大径をもつ。

A5類 口縁部が外反し、口縁端部は弱くつまみ上げられる。胴部は球胴化傾向を示し、頸部・口縁部の境が比較的明瞭となる。

A6類 口縁部が外反し、口縁端部が丸く収められる。胴部は球胴化する。

A7類 口縁部が外反し、口縁端部が面取りされる。胴部は球胴化する。

A8類 口縁部が伸長し、外反する。口縁端部は面取り後、施文される。胴部は球胴化し、体部との境が明瞭となる。

A9類 口縁部が伸長し、口縁端部が折り返される。口縁端部の折り返しは口縁部の櫛描波状文施文後に行われ、折り返しによって生じた口縁端部には櫛描波状文が施文されるのが基本である。

B類 箱清水式土器のうち、外面ミガキで仕上げられる無文のもの。赤彩の有無で2細分される。

B1類 口縁部が伸長・外反し、無文・赤彩のもの。

B2類 口縁部が外反し、無文・非赤彩のもの。

C類 口縁部が「く」字あるいは「コ」字を呈するもの。調整は口縁部がヨコナデ、体部内外面がハケメ・ヘラナデされる。口縁端部の形態差で5細分した。

C1類 口縁端部がつまみ上げられる。

C2類 口縁端部が面取りされる。C2類はさらに口縁形態で以下のように細分される。

C2a類 単純な「く」字あるいは「コ」字。

C2b類 口縁上部が若干外側に引き出される。

C2c類 強く外反。

C3類 口縁端部が丸く収められる。C3類は口縁形態で以下のように細分される。

C3a類 口縁上部が若干外側に引き出される。

C3b類 口縁部と体部との境が明瞭。

C3c類 口縁部と体部との境が不明瞭。

C3d類 短く立ち上がる。

C3e類 強く外反。

C4類 口縁端部を外側に垂下させ、正面から見ると有段口縁に見える。口縁形態で2細分される。

C4a類 口縁部が「コ」字を呈する。

C4b類 口縁部が「く」字を呈する。

C5類 口縁部が「く」字あるいは「コ」字を呈する小型の甕。

D類 北陸に通有な有段口縁の甕。胎土が白色を呈するものが多い。2細分した。

- D1類 口縁部に擬凹線が施されるもの。
- D2類 口縁部の調整がヨコナデのみのもの。
- E類 有段口縁でやや内弯気味に立ち上がるるもの。3細分した。
- E1類 口縁部外面にハケメが施される山陰系の甕。
- E2類 口縁部の調整がヨコナデのみのもの。
- E3類 有段部下端に列点刺突が行われるもの。
- F類 口縁部が外反し、体部上位に列点刺突が行われるもの。
- G類 台付甕。口縁部から脚部までが接合した個体は皆無であったが、短く外反する口縁部形態や強く張り出す胴部形態、ハケメのあり方などからみて台付甕と推定されるものをこれに分類した。2細分した。
- G1類 東海系のS字状口縁台付甕。
- G2類 S字状口縁台付甕に似るが、口縁部形態が明瞭な「S」字状を呈さないもの。
- H類 体部外面調整にタタキが行われるもの。ハケメも併用されるが、他の分類の甕にみられるハケメに比べて原体の幅が狭く、中の条線も細かい。
- I類 内弯気味の「く」字口縁のもの。
- I1類 口縁端部が玉縁状を呈する。所謂「布留甕」。
- I2類 口縁が玉縁状ではない、「布留系甕」。
- J類 口縁部が受け口状のもの。2細分した。
- J1類 近江系の受け口甕。体部や口縁部にハケメ原体による列点刺突が行われる。
- J2類 近江系以外の受け口甕。2細分される。
- J2a類 山陰系と推定される甕。口縁部外面下側に粘土が付加され厚みを増す。
- J2b類 系譜不明の受け口の甕。
- K類 外面を2本1組の範状あるいは丸棒状工具のもので調整するもの。
- 鉢 3類に分類した。
- A類 北陸系の有段口縁鉢。器面はミガキにより仕上げられる。浅いものと深いものがある。
- B類 半球形の体部に内弯気味に伸びる比較的長い口縁部がつく畿内系の小型丸底鉢。
- C類 口縁部が外反する丸底鉢。
- 有孔鉢 1点出土した。口縁部が外反する丸底鉢の底部中央に焼成前の穿孔が認められる。
- 蓋 つまみと天井部の境が明瞭なものと不明瞭なものがある。いずれも内外面ミガキ、赤彩されている。図示したものがすべてである。
- 壺 9分類した。G類以外は図示したものがほぼすべてである。
- A類 箱清水式の壺。器形で2細分される。
- A1類 口縁部が朝顔の花状に大きく発達し外反する太頸の壺で、胴最大径を下位にもち下膨れ状をなす。口縁部上端と肩部に櫛描文が施される。
- A2類 球胴化の進んだ壺で、肩部に櫛描文が施される。
- B類 長頸壺。口縁部が段をもち、頸部と明瞭に分かれる。
- C類 北陸系の有段口縁壺。
- D類 短頸壺。口縁部が短く直立し、球胴を呈する。調整は内外面にハケメを施すものと、内面に強く指頭圧痕が残るもの2者が認められる。

### 3. 弓生時代中期～古墳時代

E類 外反する比較的長い口縁部をもつ壺。

F類 短頸壺。口縁部が短く外反し、球胴を呈する。赤彩される。

G類 小型壺を一括した。球胴で、口縁部が外反し、赤彩されるものもある。

H類 天王山式の繩文施文の壺。

I類 十王台系の繩文施文の壺。

器 台 小型器台。2類に分類した。

A類 杯部の口縁部が短く外反し、皿状を呈する。

B類 杯部がA類に比べて深く、椀形を呈する。

高 杯 5類に分類した。

A類 中部高地型赤彩高杯【青木一男 1998】。全面にミガキ、赤彩が施される。

B類 北陸系の高杯。口縁部は杯底部との境に稜線をもち、外反して伸びる。

C類 東海系の高杯。櫛描文が施文されるものもある。

D類 巍内系の高杯。杯部は平坦な杯底部から直線的に伸びる口縁部がつく。脚部は直線的な上部が側部で屈曲して外側に聞く。

E類 系譜不明の高杯。2類に分類される。

E1類 杯屈曲部に貼り付けられた低い隆帶上に丸棒状工具側面圧痕が連続する。

E2類 杯部が椀形を呈する。杯部外面はハケメ後、口縁部にナデを行う。東北系の可能性がある。

### (3) 古墳時代中期～後期

古墳時代中期～後期の土器には上師器の甕・壺・高杯・鉢・杯、須恵器の杯蓋・杯身がある。甕・杯が多く、その他の器種は図示したものがほぼすべてである(第16～18図)。

#### 土 師 器

甕 形態・調整の違いで7分類した。

A類 口縁部が「く」字あるいは「コ」字を呈し、体部が張り出すもの。調整は口縁部がヨコナデ、体部内外面がハケメ・ヘラナデされる。口縁部の形状等で4細分した。

A1類 口縁部上半を外側へ引き出す。

A2類 口縁部と体部との境が明瞭。

A3類 口縁部と体部との境が不明瞭。

A4類 口縁部が強く外反する。

B類 口縁部が「く」字を呈し、体部が張らないもの。口縁端部の面取りの有無で2細分した。

B1類 口縁端部に面取りあり。

B2類 口縁端部に面取りなし。体部の張り方で2細分した。

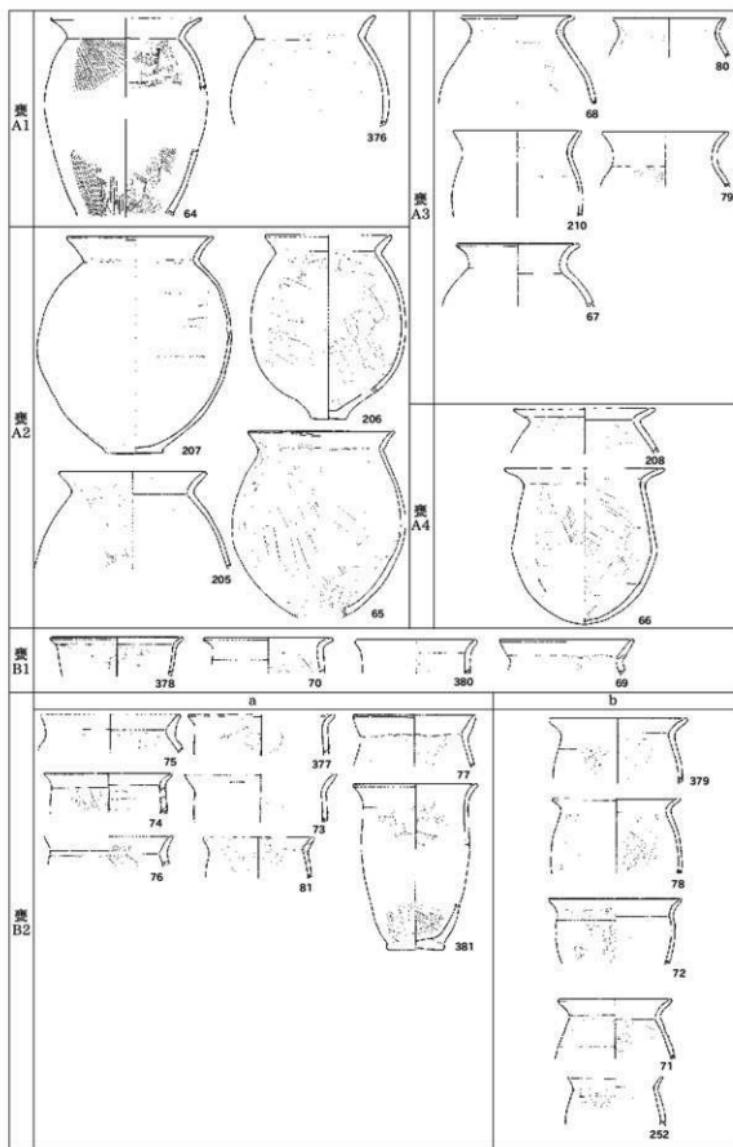
B2a類 体部が張らず、ほぼまっすぐに底部に至るもの。

B2b類 A類ほどではないが、やや体部が張るもの。

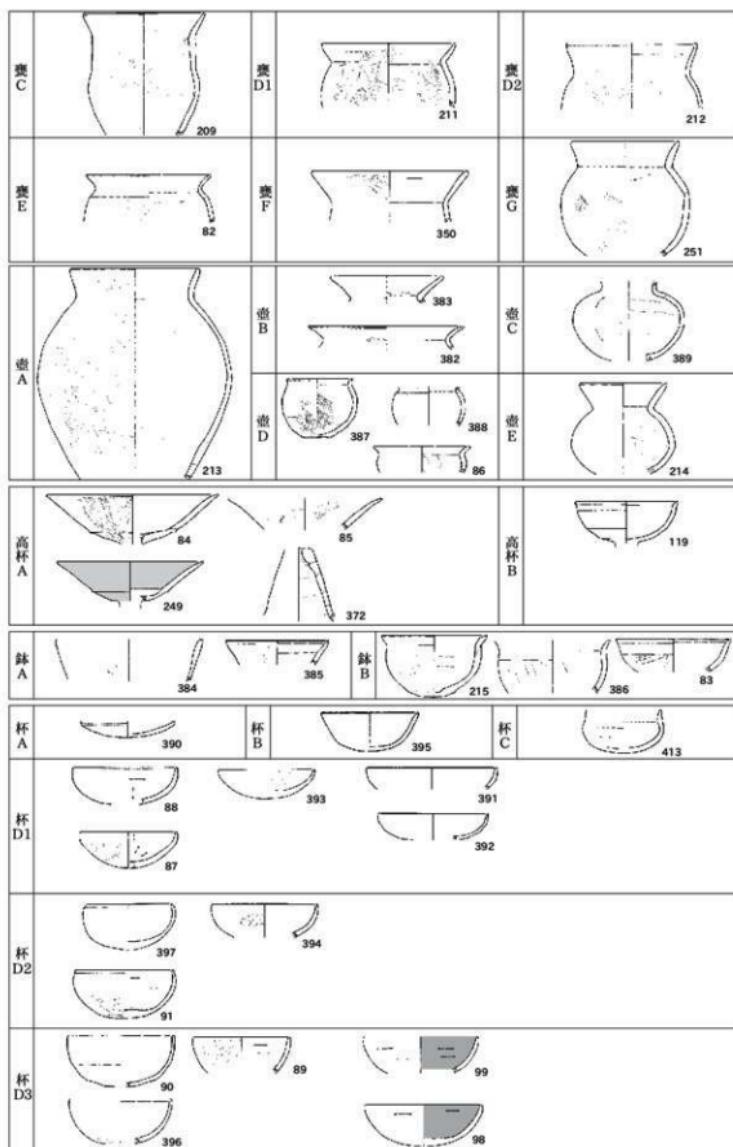
C類 長めの口縁部をもち、体部が張らないもの。

D類 口縁部が内湾気味のもの。2細分される。

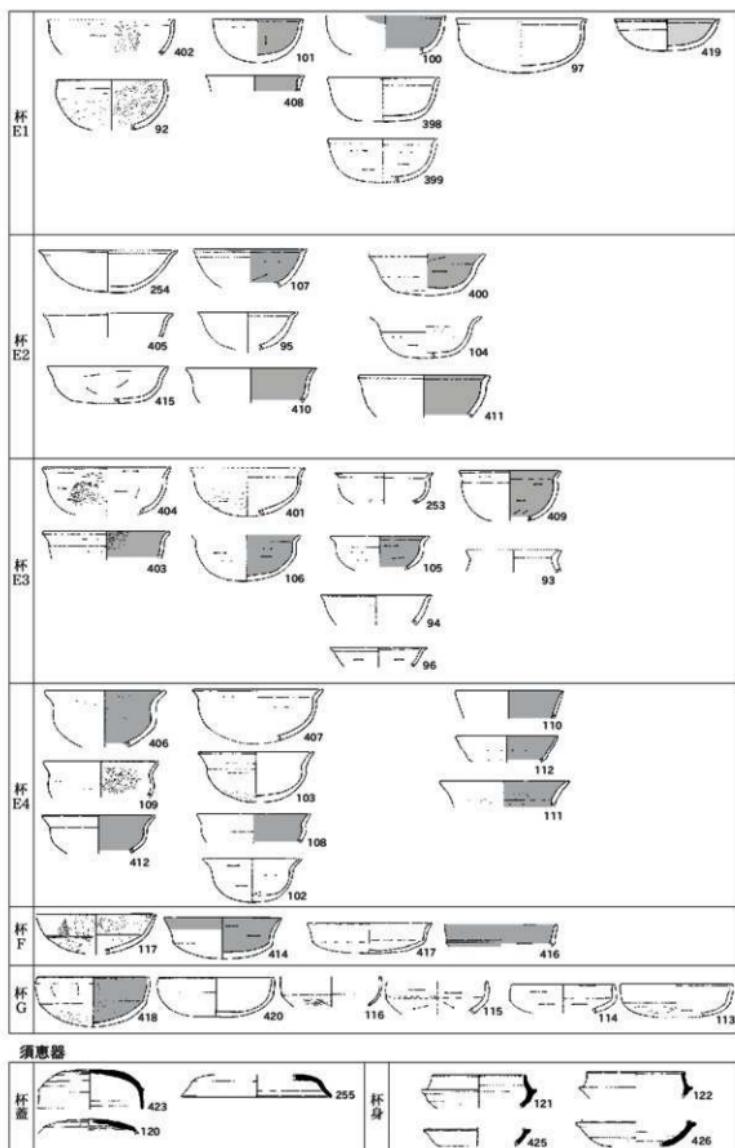
D1類 口縁部が短い。



第16図 古墳時代中期～後期（区分3）の土器（1）



第17図 古墳時代中期～後期（区分3）の土器（2）



第18回 古墳時代中期～後期（区分3）の土器（3）

D2類 口縁部が長く、口縁端部が丸く収められる。

E類 說く「く」字に外反する口縁部をもち、体部との境が明瞭。関東系と推定される。

F類 「く」字に伸長する口縁部をもち、内外面にミガキが行われる。東北系と推定される。

G類 小型・球胴の甕。

壺 器形で5分類した。

A類 口縁部が直立気味に開き、口縁端部が丸く収められる。

B類 口縁部が説く「く」字に開く。

C類 やや扁平な球胴形の体部をもつ。

D類 短頸壺。

E類 小型丸底壺。

高杯 器形で2分類した。

A類 複内系の高杯。杯部は平坦な杯底部から直線的に伸びる口縁部がつく。脚部は直線的な上半部が裾部で屈曲して外側に開く。

B類 内湾する体部に外側に屈曲する比較的短い口縁部が付くもの。

鉢 器形で2分類した。

A類 口縁部から体部にかけて直線的に開く。

B類 内湾気味の体部に外側に開く短い口縁部が付くもの。

杯 基本的に丸底で、器面にミガキが施される。底部にはミガキの前段階に行われたケズリの痕跡が残るものもあるが、輪台技法の痕跡が明瞭に認められるものはなかった。器形により7分類した。

A類 盆状のもの。

B類 体部から口縁部にかけて直線的に伸びるもの。

C類 半球形の体部に口縁部が直立して付くもの。

D類 体部が内湾気味のもの。口縁部形態で3細分した。

D1類 口縁部が直立するもの。

D2類 口縁部が内湾するもの。

D3類 口縁部と体部の境が不明瞭なもの。

E類 口縁部が外側に屈曲するもの。4細分した。

E1類 内湾気味の体部に短い口縁部が引き出される。

E2類 体部と口縁部の境が不明瞭なもの。

E3類 体部と口縁部の境が明瞭で、口縁部が短いもの。

E4類 体部と口縁部の境が明瞭で、口縁部が長いもの。

F類 須恵器杯蓋を模したもの。体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部が外側へ伸びる。

G類 須恵器杯身を模したもの。体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部が内湾する。

### 須恵器

杯蓋 体部と口縁部との境に稜をもつものと、扁平なものがある。

杯身 体部と口縁部との境に稜をもつ無台杯。

## C 各 説 (図版10~29・38~52)

SD1・SD2・SD3・SD5・沢1・SX1・SX2出土土器については時期幅があり、出土状況も決して良好とはいえない状況であったが、遺物分布にある程度の粗密があるようなので、参考までに弥生時代後期～古墳時代後期(区分2・3)の土器を対象として大グリッド単位の器種組成を示す(第2・4表)。

計量の方法は、口縁部破片の個体識別を行った。同一個体の破片が複数ある場合は1点として数えた。なお、弥生時代後期～古墳時代前期の甕Aについては、胎土・櫛描文原体によって個体の識別が比較的容易であったため、体部破片も1個体1点として数えた。そのため他のものより数が多くなる結果となっている。弥生時代後期～古墳時代前期の甕C・古墳時代中期～後期の甕Bは、口縁部の屈曲部が残存していないくとも調整からその可能性が高いものも含めたので、他の分類に属するものも混じっている可能性がある。ほかに、口縁部破片以外でも器種・個体の識別ができたものについては数に含めた。なお、口縁部破片以外の点数は( )として別記した。ここに示す数値はあくまでも器種・分類の有無や多寡を把握するためのもので、厳密な組成比として他の遺跡と比較するには問題があることを付記しておく。

上記組成表には、底部破片の数量も併記した(第3・5表)。時期が混在しているが、個体数の目安として掲載する。多くは甕の底部と考えているが、甕をはじめとするその他の器種もふくまれている可能性もある。底部破片のうち約4分の1以上が残っているものについては、底径を測りグラフ化した(第19・20図)。

個々の遺物の説明は基本的に観察表に記すとして、特記事項のあるものについて本文中で説明を加える。

### a) SD1

SD1a～e・SD1h～jから、弥生時代中期後半～古墳時代後期の土器が出た。自然流路出土のため水磨しているものも多く、18J・19H～Lグリッド出土土器で顕著であった。19I出土の体部片の多くは胎土中のチャートが表面に突出するほど水磨していた。その反面、水磨していない土器もあり、土器の埋没時期や過程に違いがあったと推定される。ただし、遺物の時期・出土層位と水磨の度合いに強い相関関係はみられないで、遺跡の上流にあった遺物貯蔵地が洪水等で何回か押し流され、ここに堆積したと考えられる。磨耗のないものについては直接投棄された可能性もある。遺物量が多かったのは19Jグリッドである。その中でも19J1～3・6に集中がみられ、特に19J1では顕著であった。

弥生時代中期(3～5)

4体部の縦羽状文は右回りの施文である。

弥生時代後期～古墳時代前期(1・2・6～63)

1は降帯の下に強いヨコナデを加え、降帯を際立たせている。2は口縁部下端に丸棒状工具による刺突が連続する。一部交差刺突のようになっているが意識的なものではない。口縁端部は磨耗のため破断面として図示したが、現存部分が口縁端部である可能性もある。6は大きく開く口縁部と縄文の直下に引かれた沈線から十王台系の甕と推定される。7は斜位回転の縄文のあり方から天王山式と推定される。10は口縁部の櫛描波状文施文後、口縁端部をヨコナデし、施文している。これに対して11は口縁端部の櫛描波状文施文後、口縁部に施文している。13は口縁端部に強いナデによる沈線が1条巡る。20は櫛描文原体の結束が緩いのか、条の間隔が広く、不規則である。28は三角形の透かし部分にも赤彩されている。33は付加状口縁である。37は器壁が薄く、口縁端部の面取りがきっちりしている。63脚部下端にはミ

ガキに伴う砂粒の移動跡が残る。

#### 古墳時代中期～後期（64～122）

65 外面のハケメは粗い。68 口縁部には体部へのヘラナデの末端部が凹みとして残る。81 の口縁端部にはごく浅い指押さえが連続する。82 は体部外面にケズリが行われるが、方向が上から下であり、ほかの甕とは逆方向である。口縁部と体部との間には稜線が明瞭にできている。これらの特徴から、上野地方の鬼高郡に見られる甕と推定される。87 は大きさの割に重量感のある土器である。91 は胎土が白色で表面の色調が赤橙色を呈する。他の杯とは異質である。96 は器壁が薄く堅緻である。97 は胎土が灰色、表面は橙色を呈する。103 は内面の稜線が明瞭で作りが丁寧である。杯F・G類（113～117）は、117 のように稜線が明瞭なものとそうでないものがある。高杯Bの119は一見すると杯E1に脚が付くように見えるが、杯底部となる円盤に口縁を維ぎ足しており、高杯Aの作りと共通する。須恵器杯121は明褐色を呈し特異である。

90・121はSD1aとSD2から出土した破片が接合したものである。

#### b) SD2

弥生時代中期後半～古墳時代後期の土器が出た。SD1と比較して、各時代・時期を通じて多系統の土器が出土している点、古墳時代中期～後期に杯が少ない点などに違いが認められる。また、水磨している土器もSD1と比べると少ない。

土器は20・21Iグリッド、20・21Jグリッドでそれぞれまとめて出土し、21I1・20I15・20J5グリッドに特に集中していた。水磨も少ないこともあり、投棄された可能性がある。

#### 弥生時代中期（123～131）

123は口縁端部が磨耗しているため、本来は図示した形状と若干異なるかもしれない。その場合でも口縁が長く伸びることはなさそうである。128・129は弥生時代中期甕G類としたものである。128は体部にヘラナデを行った後、縱方向に下から上にミガキを行う。口縁部は折り返しではなく別の粘土紐を接合し、最後に口縁部をきっちりヨコナデする。内面は縱方向のハケメのち、ミガキを行う。器面にはハケメによって生じた凹凸が残存する。底部は体部に蓋をするようにふさぎ、底部と体部の境に補強の粘土を貼り付けている。雲母が少なくかっちりした胎土で焼成は良好、そして作りの精緻さから、山陰から搬入品と考えられる。これに対し129は体部外面がミガキではなく下から上へのハケメで調整され、口縁部の作りも128ほどきっちりしていない。胎土は東海西部のものであることから、山陰系の土器が東海西部で模倣され、搬入された可能性がある。両者の出土地点は近接しており、共伴の可能性が高い。

#### 弥生時代後期～古墳時代前期（132～204）

153は体部上位にハケメ原体とは異なる角棒状工具による連続刺突が行われる。154は口縁部の立ち上がりが垂直に近いので、甕の可能性もある。156の口縁部ハケメは細かくはつきりしている。157の口縁部下端部は隆帶状になっているが、貼付けではなく、上下に強いヨコナデを行うことで作出されている。158・159・163・166の胎土はチャート繙が多い。159体部外面のハケメは非常に細かい。161の口縁部の垂加する部分は粘土が付加されている。162の胎土はやや白っぽく、円繙が少ない。内面のハケメは沈線状で明瞭である。163内面のハケメは外面のそれに比べて粗い。175口縁部直下には右回りでヘラ圧痕が連続する。182はS字甕C類【赤塚1986】に比定される。口縁部の圧痕は工具痕の可能性がある。体部のハケメは始めに右下から左上に、次に右上から左下に行い羽状とし、最後に横方向に行

う。体部内面のナデは下から上へ行われる。194は体部にタタキと細かいハケメが行われる。底部はドーナツ状である。192・195は器面が橙色を呈し、器壁が薄く軽い。196は外面口縁部に綫方向、体部に横方向のハケメが行われる。箱清水式壺の末期的なものの可能性がある。197は棒状の脚部が付く可能性が高い。同様の高杯は会津坂下町樋波台畠跡〔吉田1990〕に見られる。203は胎土に石英粒を多く含み全体にキラキラして見える。作りは器壁が厚く、粗雑である。200は櫛描横線文の間に二枚貝の刺突文が施文される。

#### 古墳時代中期～後期 (205～215)

205の胎土はチャートが目立つ。206は大きさの割に軽く器壁が薄い。ハケメは浅く、表面を軽くナデしている感じである。208は206と対照的に重量感のある上器である。口縁部内面は強いヨコナデにより段ができている。213の口縁端部は内面が丸く肥厚し、布留窯の口縁端部に似る。215はミガキも施されているが、粗雑な作りである。

#### c) SD3・SX1

SD3出土土器には水磨はほとんどみられなかった。SD3aとSX1は一部重複するため、それぞれから出土した土器が接合する例が複数みられた。

#### 弥生時代中期 (216～218)

216は弥生時代中期の甕で、口縁端部に縦文と刺突が行われ、口縁部無文、体部に綫・横の櫛描直線文、横方向の櫛描波状文、文様帶下端に刺突が連続し、体部下半ミガキとなる。

#### 弥生時代後期～古墳時代前期の土器 (219～248・250)

219底部には木の実圧痕と推定される円形や梢円形の3～7mmの凹みが点在する。224は他の甕A類の胎土に褐色が多いのに対して白っぽく、異質である。施文も頭部簾状文が水平にならないなど、作りが粗雑である。245体部下端にはハケメ原体によるとみられる連続刺突が巡る。

#### 古墳時代中期～後期 (249・251～255)

254は外面に黒斑がある。

#### d) SX2

#### 弥生時代後期～古墳時代前期 (256・257)

256は擬四線の1本1本の幅が広く、断面樋状を呈する。工具は不明である。

#### e) SD5

遺物量が少なく、時期幅も限定されている。

#### 弥生時代後期～古墳時代前期 (258～261)

258底部は輪台技法が用いられたのか、明瞭なドーナツ状を呈する。

#### f) 沢1

8層から少量の土器が出土した。時期は弥生時代中期を中心とし、古墳時代前期までのものがある。

#### 弥生時代中期 (262～265)

262は横羽状文の下端に列点が施される。

弥生時代後期～古墳時代前期（266～270）

270は外面が赤彩されている。

g) 包含層ほか

ここでは、二次調査包含層資料のほか、表土出土資料・一次調査出土資料・表面採集資料等について説明する。出土位置・層位は観察表に記す。

包含層出土土器は、自然流路の検出された18・19列で多く出土した。17Lグリッドでは被熱した土器がまとまって出土しており、時期も概ね古墳時代後期でまとまっている。検出はできなかつたが、遺構が存在した可能性がある。「94調査区ではJ～L列で土師器細片が出土した。

弥生時代中期（271～276・278～286）

274拓本上部の白丸に見える部分に崩痕がある。275は甕の体部上部破片を想定しているが、天地逆で下部の可能性も残る。280内のミガキは光沢を帯びるほど丁寧である。281口縁端部は磨耗しているため詳細は不明であるが、弱い凹凸があるので縄文が施文されていた可能性がある。281は胎土に白砂を多く含む。285体部の单斜条痕は左回りに施文されている。286は口径からみて台が付かない甕と推定される。口縁部はくの字にやや長く、緩やかに外反し、短く「く」の字に屈曲して終わる中期のものに比べて新しい様相と考えられる。口縁端部に縄文ではなくヘラ刻みが施されている点も新しい要素と捉えられる。胸部の複合鋸歯文は中期後半の特徴的な文様であるが、台付甕に主に施文されるもので、普通の甕の頭部下に施文される類例は少ない。後期前半吉田式期には波状文や单斜条痕と組み合わされて施文される例（287）はあるが、それをもって286を後期に位置付けられるか、という判断が難しいところである。

弥生時代後期～古墳時代前期（277・287～371・373～375）

292は体部下端がミガキ残され窪んでいる。292・293は小破片からの図上復元であるので、実際の器形と図示したものが若干異なる可能性があるので注意を要する。295は口縁端部に鏡状工具による刺突が行われている。297は口縁端部に強いヨコナデが施され、沈線状の凹みが1条這っている。299は口縁部の波状文施文後、口縁端部にナデを行う。304の胎土には径3mmまでの白色礫が多く含まれ、器面に水玉模様のように露出している。他にこのような胎土の土器はない。313は器壁が薄く、胎土がやや黄色味を帯びる。甕A類の胎土の多くが褐色なのに対して異質である。320は甕A類の体部上部破片と推定したが、弥生時代中期栗林式の斜格子文の可能性もある。323口縁の直立部分は粘土を付加することで作り出されている。326・327は器壁が薄い。329内面は非常に平滑である。中期の可能性がある。330底部はドーナツ状を呈し、側面から中央に粘土を寄せ集めるような調整がされている。341の口縁部には粗いハケメが残るが、一見するとタタキに似ている。

344外面のミガキの原体は幅3mmほどと細い。360の胎土には径7mmまでのチャート角礫が含まれる。他の土器に含まれるチャートは円～亜円礫であるので異質である。362は器壁が厚く、重量感のある土器である。366は胎土が白色を呈する。口縁部の一部にススと見られる黒色の付着物が認められる。370は内面に櫛描文が施文されている。東海地方の有段高杯と推定される。375は口縁部と体部の境にハケメの痕跡が認められる。内面は火はじけによるものか、粟粒状に剥落し、外面底部にはススが付着する。

古墳時代中期～後期（372・376～429）

376は内外面とも平滑に仕上げられる。378は胎土に金雲母が異常に多く、器面がキラキラ光って見

える。内面のハケメは水平に明瞭に施される。外面のハケメは内面と対照的にヘラナデに近い弱いハケメである。379は焼成が堅緻である。381は白色躍が多く含まれる。387底部には爪痕が点々と残る。396は胎土に大粒のチャートを多く含み、比較的粗雑な作りである。398は被熱のためか、表面が剥落している。400は体部中位に弱い屈曲部をもち、杯G類に近い。413は小型だが作りは杯F類に似る。414は内面のミガキが菱形の暗文風になっている。417は体部と口縁部との間に屈曲部があるが、外面では不明瞭である。内面はナデで磨かせることにより、屈曲部を際立たせている。418底部内面中央部は擂鉢状に窪んでいる。419は胎土が白色を呈し、外外面は赤彩される。杯で赤彩される例は他にない。420は屈曲部がやや不明瞭で、外面のミガキも418のように装飾的なものではない。400・419～422のように底部に「×」印があるものが散見される。

428は土製品としたが、何かの把手の可能性もあり、詳細や時期は不明である。

429は紡錘車で、側面に磨きの痕跡が矢羽状に残る。時期は不明である。

#### 4 古代・中世（図版30・52）

古代・中世の遺物は浅箱1箱に満たない程度の遺物量である。古代の遺物については〔坂井1984、春日1999〕の編年をもとに時期を記した。

##### a) '94小碟集中域1

2・2'層中の躍とともに、珠洲焼製円盤（1～3）やこれと同大の珠洲焼甕破片（4・5）が出土した。

##### b) SD1

6・7は9世紀中頃の須恵器長頸甕である。7の把手は板状のものが貼り付けられており、穿孔はされていない。8は須恵器甕の底部近くの破片を打ち欠いて成形後、砥石に転用されている。

##### c) SD2

9は砥石で、上面は筋理面である。10は珠洲焼の擂鉢である。鉗目の細かさから14世紀代と推定される。

##### d) SD3a

11の土師器無台杯は9世紀後半の所産である。

##### e) SD5a

12は土師器小皿で、11世紀前葉前後の所産である。このほか、図示していないが内面黒色処理された土師器無台杯がある。

##### f) 包含層ほか

13・14は須恵器である。14は8世紀後葉～9世紀初頭の所産である。15は10世紀前葉前後～11世紀前葉の所産である。

4. 古代·中世

SD1a 区分 2

序号	地名	1981		1982		1983		1984		1985		1986		1987		1988		1989		1990		1991		
		面积	人口																					
普 通 农 村 居 住 户 数 量 分 布 表	A	6.05	9.42	6.02	9.40	6.13	9.45	6.14	9.41	6.14	9.40	6.14	9.40	6.14	9.40	6.14	9.40	6.14	9.40	6.14	9.40	6.14	9.40	
	B	1																						
	C	7	19	4	14	13	36	14	40	14	36	14	36	14	36	14	36	14	36	14	36	14	36	
	D	1																						
	E	1																						
	F	1																						
	G	1																						
	H	1																						
	I	1																						
	J	1																						
高 峰 村 居 住 户 数 量 分 布 表	K	1																						
	L	1																						
	M	1																						
	N	1																						
	O	1																						
	P	1																						
	Q	1																						
	R	1																						
	S	1																						
	T	1																						
20	18	19.57	76.06	16.28	76.02	15.01	75.94	15.13	75.93	15.23	75.91	15.33	75.89	15.43	75.87	15.53	75.85	15.63	75.83	15.73	75.81	15.83	75.89	

SD1a 区分3

四

区分	初期	分離	ERC	20G	分離
争奪面倒 占據面倒 (4項2)	優	A	B	C	D
計			B	C	D
時期不明	優		1		1

EP1-1

区分	基準	分類	12月	累計
新生医療用 医療用	基準	A	1 (1)	(1)
古物商用 (医療用)	基準	D	1	(0)
高利	不明	C	2 (2)	(2)
計			4 (3)	(3)
時報用	その他(1)		2	(2)
計			2 (2)	(4)

卷之三

SD1h 部分2

區分	細種	分類	DDP	分類
野生種群 —古樹齡樹 (KSA)	喬木	A	溫(雷木) (2)	
森林			溫(雷木) (2)	

第2表 土器組成表(1)

SD1a

SD11 区分 2

SD1j 区分3

GB/T 14

区分	部種	分類	19G	20G	分類割合
	A	B (2)	3 (2)		
寄生輪網～ 占據輪網 (8.5分2)	C		2 (0)		
	D	1	1 (0)		
	E	1 (1)	1 (1)		
	F	0 (0)	1 (1)	2 (1)	

1000-1001

区群	頭脳	筋肉	1982	2001	分類
古墳中～後	B		2	2	
古墳(DF3)	D		2	2	
古	D		1	1	
計			5	4	1
時間不明	他		1	1	1
計			5	5	1

Treatment Group	Percentage (%)
SD1a	~95
SD1c	~2
SD1i	~1
SD1j	~10

第19図 底部骨組成図(1)

第3章 序列調節機制 (3)

SD2 部分2

SD2 四分三

SD3a 区分2

卷之二

区分	面積	分類	23E	23F	23G
海生帶類 — 水體類別 (区分2)	A	2 (2)		2 (2)	
	C	2	2	14 (10)	
	G		2 (2)	2 (2)	
	G	1 (1)		1 (1)	
計			138 (23)	4 (10)	16 (23)

第4表 土器組成表（2）

SD2

四

B-1006

Sd3a 区分3

5d5a 区分2

况1 区分2

区域	被检数	1.00	1.01	1.02	分界值
低风险区	阴	1	2	3	1
中高风险区	阴	2	3	4	2
(区分率)					
总		3	1	1	

区域	被检数	1.00	1.01	1.02	分界值
低风险区	阴	1	2	3	1
中高风险区	阴	2	3	4	2
(区分率)					
总		3	1	1	

卷之三

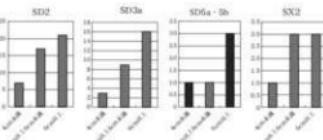
SD3B 区分3				SX1 区分3			
区分	想地	分類	DDI	区分	想地	分類	DDI
先生用廁所				内構中一廁所	D	1	
内構廁所	便器	便	1	内構中一廁所 (区分3)	E	2	2
(区分3)				計		3	
				計		3	
時刻不明その他(C)		1	1	時刻不明	便	0	0
計		1	1	計		0	0

### SX1 区分

5×2

SxZ 区27-3					
区分	前項	分類	上級	下級	合計
内臓中一 筋群 (14分3)	II	D	I	I	3
II			I	I	2

第4表 土器組成表（2）



第22圖 宿醉後醒來圖(2)

## 第V章 まとめ

### 1 弥生時代中期

弥生時代中期の土器には中頃（区分0）の条痕文土器と後半（区分1）の栗林式土器がある。

後半の壺Aの280・281は体部の櫛描波状文がコンバス文のような施文方法であり、中部高地型櫛描文の施文方法とは異なり、注意される。壺Dは器形・施文の点で中期的様相と後期的様相を併せもっており、位置付けについては検討の余地がある。

中期の土器の中で注目されるのは、山陰系<sup>1)</sup>とした壺G類である。逆L字を呈する口縁形態が、山陰地方の中期中葉とされている土居窪式〔長井1996〕の壺の特徴に似る。おそらく県内初出だと思われるが、搬入品と推定される128と模倣品と推定される129があり、いずれもSD2の20J5灰下砂から出土した。共伴の可能性が高い。129の胎土は東海地方西部の可能性があり、山陰から東海へ土器を持った人が移動し、そこで模倣品を作成し、さらに両者を持って小野沢西遺跡へ至る、という流入経路が思い浮かぶ。今後、中期における東海・山陰との関係を考える上で貴重な事例といえよう。

### 2 弥生時代後期～古墳時代

#### （1）出土土器の概要

土器の多くは自然流路（浜1・SD1・SD2・SD3・SD5）と包含層から出土し、所属時期は弥生時代後期～古墳時代後期までの幅がある。

小野沢西遺跡の所在する上越地方の古墳時代の編年案は川村氏によって示されている〔川村2000b〕（以下、川村編年と略す）。川村編年はそれまでの編年案〔坂井・川村1993、川村1988b、坂井ほか1987〕を基礎として、古墳時代を16段階に細分したものである。1～6段階の土器群の内容については籠澤正史氏によって変遷図が示されている〔籠澤正史2003〕。

弥生時代後期～古墳時代前期の編年については新潟シンポ編年〔田嶋1993〕を軸として、青木氏による長野盆地南部における編年案〔青木1998〕（以下、青木編年と略す）を併用する（第6表）。

出土土器の時期ごとの詳細な器種組成を知ることができないので、上記編年に対する細かな編年の位置付けは行わず、およその時期幅を示す。

#### （2）在地および北陸系の土器

##### 区分2

弥生時代後期からのものとして、有段口縁の壺D・E・鉢A・壺C、弥生時代からの形態を引き継ぐ壺F・壺Bがある。これらは川村編年1段階以前を中心として2あるいは3段階まで残存する可能性がある。

1) 器形・胎土・製作技法について赤澤徳明氏・久田正弘氏から御教示いただいた。

口縁が「く」あるいは「コ」字を呈する壺C類は川村編年1段階以前から前期全般にわたり継続するが、口縁部形態により継続期間に違いがみられる。口縁端部を摘み上げる壺C1・C4は5段階、面取りを行う壺C2は6段階までにはなくなると考えられる。

### 区分3

壺Aは長胴化が頗著ではないのであまり新しい段階まで残るとは考えがたく、概ね川村編年の11段階、下っても14段階までに位置付けられると推定される。壺Bは長胴化の進む12段階以降の所産であろう。

杯は8段階以降、内面黒色処理のものは遅くとも14段階までには出現する、ということから、杯D・Eを当該期の所産とし、中でも黒色処理のものは14段階以降とする。

須恵器は杯蓋(423)がTK47、杯身(425・426)がそれぞれTK10、TK47～MT15に比定されるこことから、概ね12～14段階に位置付けられる。426についてはもう少し新しい可能性もある。

## (3) 外来系の土器

### a) 中部高地系（信州系）

中部高地系とすることは区分2の壺A・B、壺A・高杯Aで、これらは箱清水式土器の範疇でとらえられる。長野県北部の千曲川・犀川流域を核として分布する栗林式・箱清水式という地域色の強い土器群は中部高地型柳描文系土器群と仮称されている〔青木前掲〕。この土器群の特徴である「中部高地型柳描文」とは、土器を左回りに回転させて文様は右回りに施文した結果、縦構成の文様帯を形成するものである〔佐原1959〕。施文方法は波状文を一回転させるのではなく、手の移動範囲で短く施文を行い、同一点から上下方向に文様を重ねるブロック充填形式である〔橋本裕行1986〕。

小野沢西遺跡出土の壺Aも基本的にはブロック充填形式で施文される。口縁部と体部の柳描波状文と頸部簾状文の施文順序は各種あるが、簾状文施文後に波状文を施文するもの（I類）主体から波状文施文後に簾状文を施文するもの（II類）主体へという時間的推移が仮説として挙げられている〔青木前掲〕。小野沢西遺跡では全形のわかる土器は多くはないが、推定されるものも含めれば、SD1でI類5点、II類2点、SD2でI類1点、II類4点、その他2点、SD3でI類5点、包含層でI類4点、II類1点である。

器形については成形技法の変化に起因する形態変化〔青木前掲〕のほか、体部形態の球胴化が指標とされている〔中島1999〕。壺AをA1～A9類に細分したが、A9類は別として、A1～A8類はおよそその順番で推移していくと推測する。青木編年との対応関係は、概ねA1類が1～2段階、A2・A3類が3～4段階、A4～A8類が5～6段階に相当すると考える。中でもA5～A8類は6段階の後半に対比できよう。ただ、A3類の133については、体部施文がかなり下の方までできているので、あるいはA5類のほうが適当かもしれない。A1類のうち口縁部無文の9・132・292は吉田式〔千野ほか2001〕の可能性もあるが、ほかの器種組成が判然としないので断定はできない。

壺Aの321は口縁部に波状文をもつ。これは折り返し口縁をもつ壺A9とあわせて「飯山型」〔笠澤浩1986〕と呼ばれるものにみられる特徴である。中部高地型柳描文系土器群の壺は、通常文様帶以外は赤彩ヘラミガキ手法によって精製されるが、321には赤彩は認められない。頸部と体部下位の屈曲部が明瞭なことから青木編年の5～6段階に位置付けられよう。

高杯Aは全面赤彩研磨されるもので、脚部には三角透し孔をもつ。三角透し孔は青木編年の4段階以降に出現し、5段階で定着、中部高地型柳描文系土器群の終焉とともに姿を消すという。

以上のように、小野沢西遺跡の壺A・B、壺A・高杯Aという中部高地型柳描文系土器群は、青木編年

の1～6段階の時期幅をもち、とくに5～6段階では甕（模描文・赤彩）・壺・高杯というセットが認められる。青木編年の1～6段階は新潟シンボ編年の1～4期に対応するが、箱清水式の系譜を引く甕を主体とする中野市がまん淵遺跡〔鶴田・中島ほか1997〕は新潟シンボ編年3～5期に位置付けられているので、一部は5期、川村編年1段階まで下るかもしれない。

これまでも上越地方では大洞原C遺跡〔三ツ井ほか1997〕、龍峰遺跡〔川村2000a〕、裏山遺跡〔小池ほか2000〕などで中部高地系土器が出土しているが、当遺跡ほどまとまった量が得られたことはない。

#### b) 東海系

区分2の甕G・高杯Cが東海系である。甕GのうちG1類としたものが広義のS字甕で、赤塚分類〔赤塚1986〕ではC類に分類される。器壁は薄いが、胎土は在地の甕と大差ないので搬入品の可能性は低い。S字甕は上越地方でも散見され、大洞原C遺跡〔三ツ井ほか前掲〕、龍峰遺跡〔川村1988a〕、横引遺跡〔立木（土橋）1996〕、新井市斐太遺跡群上ノ平24号住〔沼澤1994〕などに類例がある。S字甕C類は龍峰遺跡に1例あり、漆町編年8群あるいは9群に併行するとされている〔川村前掲〕ので、川村編年では4～5段階に位置付けられよう。

高杯Cのうち200・370はで有文で胎土が白色であり、在地の土器と異質なことから搬入品の可能性が高い。200は脚部が大きく外反するので、赤塚分類〔赤塚1990〕の高杯B類に相当する。この高杯の脚部に施文されるのは廻間編年II期である。370は赤塚分類の高杯A3類に相当する。この高杯の内面施文に、多条沈線に加え波状文が組み合わされるのは同じくII期である。よって、この2点に付いては川村編年1～2段階に対応させておく。

#### c) 近江系

区分2の甕J1類が近江系である。底部が残存しないので定かではないが、もし台付甕であれば東海系の可能性もある。J1類で器形がわかるものは少ないが、ハケメ原体による連続刺突がある体部片（55）は数点確認されている。裏山遺跡〔小池ほか前掲〕に類例がある。

#### d) 東北系

区分2の甕H・高杯E2、区分3の甕Fが東北系である。

甕Hは細片のため、器形・文様構成は判然としないが、斜移回転の特徴的な純文から弥生時代後期の天王山系土器と推定される。天王山系は近隣の遺跡では裏山遺跡〔小池ほか前掲〕のほか、長岡市横山遺跡3号住居跡〔駒形・岩崎1987〕などに類例がある。横山遺跡3号住居跡は新潟シンボ編年5期以前に位置付けられている。

高杯E2は外面ハケメの小型の杯部である。福島県会津坂下町穂渡台畠遺跡に同様の小型の受部で、中実柱状の脚部をもつ器台が少數ながら存在する。器面調整がミガキである点で相違があるが、参考になろう。山三賀II遺跡のI期〔坂井1989〕に位置付けられている〔吉田1990〕ので、川村編年では5段階に相当する。

甕Fは内外面にミガキが行われる。県内の類例は少なく、豊栄市松影A遺跡〔加藤2001〕に同様の甕2点がある。松影A遺跡の甕については青森県八戸市根城東溝地区出土資料〔宇部ほか1983〕を類例として挙げ、7世紀代に位置付けている。よって、川村編年16段階以降の可能性がある。

### e) 窯内系

区分2の甕H・甕I・鉢B・高杯D、区分3の高杯Aが窯内系である。

甕Hは底部付近の破片で全形を知ることはできないが、いずれも平底である。194ではドーナツ状になっているのを観察できる。タタキは右上がりで、これらは「弥生形（第五様式系）甕」〔寺沢ほか1986〕の特徴である。これに対して285のタタキは水平か若干左上がりである。左上がりのタタキは「庄内大和甕」〔寺沢ほか前掲〕の特徴であるが、内面調整や底部形態はこれと合致しない。庄内大和甕は大洞原C遺跡〔三ツ井ほか前掲〕に類例があり、庄内2式期に位置付けられている。これは新潟シンボ編年で概ね5段階に相当する。県内ではタタキの甕の類例として長岡市横山遺跡〔駒形・岩崎前掲〕、大潟町丸山遺跡〔小野・桑原1988〕、新潟市緒立C遺跡〔渡辺1994〕がある。ほかに近隣では中野市沢田鍋土遺跡〔鶴田・中島ほか前掲〕でも確認されている。

甕IのうちI1類としたのが「布留式甕」である。I2類は内窓気味のくの字口縁から「布留系甕」を想定しているが、全形がわからないので断定はできない。I1類は口縁形態が聞き気味のものや急角度で立ち上がるものがあるので、時期幅があると考えられる。細片なので時期の決定は困難だが、龍峰遺跡〔川村前掲〕、上越市津倉田遺跡〔川村・品田2003〕の類例から、川村編年4～6段階に位置付けておきたい。

### f) 山陰系

区分2の甕E1・甕J2である。E1類は、外反して聞く口縁部下端に鋭い稜をもつという特徴が、漆町遺跡〔田嶋1986〕の山陰系甕「變形土器B2」と共通する。漆町編年で8群まで存続する器形である。J2類は同じく「變形土器B3」に類似する。漆町編年で7～10群まで認められる。川村編年では、前者は4期まで、後者は同3～6期に対応すると考えられる。

### g) 関東系

区分2の甕I・区分3の甕E・杯F・杯Gである。

区分2の甕Iは口縁部破片だけだが、逆ハの字に聞く特徴的な形態から、弥生時代終末の十王台系と判断した。県内の報告例はおそらくこれが初例であろう。

区分3の甕Eの特徴は口縁部がくの字を呈し、体部外面調整がケズリの点にある。このような体部ケズリの甕は中期和泉式期の後半段階、概ねTK47併行期から見られるが〔坂口1987〕、口縁形態がきっちりしたくの字を呈するのは鬼高期に入つてからである。

杯F・杯Gも口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部が直立ないしは内傾して立ち上がるという、鬼高期に特徴的なものである。

よって、区分3の関東系は鬼高期、川村編年では概ね14段階以降に位置付けられる。ただし、鬼高期の初源については、須恵器模倣杯の出現をもって鬼高期のはじめとするかどうか見解の一一致を見ていないので〔坂口1987〕、もう少し遡る可能性もある。

## (4) おわりに

以上のように、小野沢西遺跡では弥生時代後期から古墳時代後期までの土器がほぼ継続的に認められる

が、当遺跡最大の特徴は各期を通じて外來系土器が存在することであろう。

弥生時代後期においては箱清水式土器がほぼ独占する形であり、何をもって外來系とするのか迷うような土器のあり方である。新潟シンボ編年5～6期では中野市沢田鍋上遺跡等において北陸系の土器と箱清水式土器が共存しているが、その前段階のがまん淵遺跡では箱清水式が主体である。がまん淵遺跡は新潟シンボ編年4期を中心とした時期に展開する高地性の防御的集落とされている。新潟県側の高地性集落としては裏山遺跡〔小池ほか前掲〕、斐太遺跡群〔駒井・吉田1962、流沢前掲ほか〕が著名である。裏山遺跡は新潟シンボ編年の2～3期、斐太遺跡群は同2～5期に位置付けられる。小野沢西遺跡に最も近い高地性集落は裏山遺跡とがまん淵遺跡であり、どちらも直線距離で25kmを測り、ちょうど中間地点にある。また、小野沢西遺跡はこれらの高地性集落と同じ北国街道沿いにあり、なおかつ飯山街道と北国街道の分岐点にも程近く、信州と越後を結ぶ要衝ともいえる立地である<sup>1)</sup>。裏山遺跡が終焉を迎へ、がまん淵遺跡が営まれ始める時期に北陸系の土器とともに箱清水式土器が一定量を占める土器群が残されているのは興味深い。なお、飯山街道の信州側入口である飯山盆地には中部高地型柳描文系土器群を多出する遺跡が密集しており、飯山街道沿いに土器が流入した可能性を考える一因として挙げられる。次の段階である川村編年1～3段階では、北陸系土器が信州に大量流入し、信州との関係は一方通行的という指摘があるが〔笠澤正史前掲〕、その前段階にはこれとは違った動きがあったことも憶測される。

古墳時代においても様々な地域の土器が流入する状況は続き、この場所が常に交通の要衝であったことを窺わせる。とくに川村編年1段階前後においては、それまでの中部高地系・北陸系に、東海系・近江系・東北系・畿内系が加わり、最も多彩な様相を示す。これまでのところ近くで古墳時代の集落は発見されていないが、これだけの遺物量を供給できる規模の集落が近くにあることは確実であろう。

上越市史 2000b	新潟シンボ 1993	北陸 (漆町)	須恵器	中部高地	畿内	東海	関東			
川村 1993	田嶋 1986	田辺 1981	青木 1998	米田 1992	赤塚 1990	小林 1996				
1	1		1				山中式 後期			
2	2		2～3							
(+)										
3	3		4～6			越前 I				
4	4				庄内 I					
1	5	5			庄内 II		越前 II			
2	6	6			庄内 III					
3	7	7			庄内 IV					
4	8	8			布留 I		越前 III			
5	9	9			布留 II					
6	10	10			布留 III		松戸式 前期			
7		11			布留 IV					
8			TK73							
9			TK216							
10			ON46 TK208							
11			TK23							
12			TK47							
13			MT15							
14			TK10							
15			MT85							
16			TK43							

表中の文献と【滝沢1999；坂口1987；坂井1989】を参考に作成

第6表 編年対応表

1) 越後から信濃へ通じるルートについては現国道18号・292号のルートが想定される。これについては川村浩司氏・金子拓男氏の指摘がある〔川村1996〕。

## 要 約

- 1 小野沢西遺跡は新潟県南西部の中頸城郡妙高村大字関山字大峯・小野沢西ほかに所在し、妙高山東麓の緩斜面に位置する。標高は425m前後であり、現況は山林および畠地であった。
- 2 調査は上信越自動車道の建設に伴い、平成5年から7年の3か年に実施した。二次調査面積は総計13,870m<sup>2</sup>である。遺跡は上信越自動車道用地内にとどまらず、周辺に広がっていると考えられる。
- 3 調査の結果、縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中世・近世の遺物が発見された。土器が大半を占め、石器などは僅少である。遺構は少なく、遺物の大半は包含層と自然流路から出土した。
- 4 検出されたのは自然流路10条とピット8基、溝5条などがあるが、集落が営まれた場所ではないようである。
- 5 自然流路から縄文時代晩期～古墳時代後期および古代・中世の遺物が出土したが、時代・時期によって出土地点・層位が明確に分離できる状況ではなかった。弥生時代中期～古墳時代後期までほぼ連続する時期の土器が認められるのが特徴である。
- 6 縄文土器の多くは晩期水式の時期に属する。飛騨地方のいわゆる阿弥陀堂式の破片があるのは注目される。
- 7 弥生時代中期の土器には、中頃の条痕文土器と後半の栗林式土器がある。ほかに山陰地方からの搬入品と推定される土器がある。
- 8 弥生時代後半～古墳時代にかけては、在地および北陸系の土器を主体としつつも、中部高地系（信州系）・東海系・近江系・東北系・畿内系・山陰系・関東系など多地域の土器が見られる。とくに弥生時代後半～古墳時代前半では中部高地型櫛描文系土器群がまとまって出土した。信州との国境近くに立地し、北国街道・飯山街道が至近を通過する当遺跡の立地と相俟って、土器の流入経路を考える上で貴重な資料である。

## 引 用 文 献

- 赤塚次郎 1986 「『S字甕』観書'85」『財團法人 愛知県埋蔵文化財センター 年報 昭和60年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1990 「V1 陶圓式土器」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 朝間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 青木一男 1998 「第4章 第1節 中部高地型櫛描文系土器群の理解」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5－長野市内 その3－ 松原遺跡 弥生・總論 6 弥生後期・古墳前期』日本道路公団・長野県教育委員会・(財)長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター
- 新井市教育委員会 1996 『栗原遺跡第10次発掘調査経過現地説明会資料』(パンフレット)
- 飯坂盛泰他 2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第95集 上信越自動車道関係発掘調査報告書VI 上中島遺跡・野林遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 上田典男 1995 「栗林式土器研究の位置視点－松原遺跡の整理作業から－」『長野県埋蔵文化財センター紀要4』

- (財)長野県埋蔵文化財センター  
宇部則保<sup>はづか</sup> 1983 『史跡根城発掘調査報告書V』青森県八戸市教育委員会
- 大竹憲昭 2000 『第1章 第3節 遺跡周辺の環境』『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書48 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15—信濃町内 その1—貫ノ木遺跡・西岡A遺跡 旧石器時代』日本道路公團・長野県教育委員会・(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
- 尾崎高宏 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第111集 上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅷ 黑田古墳群』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野 昭・桑原陽一 1988 『新潟県中頃城郡大潟町 丸山遺跡発掘調査報告書』大潟町教育委員会
- 加藤 学・荒川隆史 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 上信越自動車道関係発掘調査報告書V 和泉A遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2001 『第VII章 2.B. 東北系の土師器』『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第106集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書I 松影A遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1994 『第IV章 4.B. 古墳時代後期の遺物』『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 北陸自動車道関係発掘調査報告書 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 『第4章 第2節 土器編年と地域性』『新潟県の考古学』新潟県考古学会 古志書院
- 金子拓男・高橋 保・秦 繁治<sup>はるじ</sup> 1980 『水科古墳群発掘調査報告書』三和村教育委員会
- 川村浩司 1988a 「新潟県龍峰遺跡の外來系土師器3例」『新潟考古学談話会会報』第1号 新潟考古学談話会
- 川村浩司 1988b 「越後の古墳時代中後期の土器について」『新潟考古学談話会会報』第1号 新潟考古学談話会
- 川村浩司 1996 「弥生後期における北信濃と北陸』『考古学と遺跡の保護』甘粕健先生追憶記念論集刊行会
- 川村浩司 2000a 「第III章 弥生時代～室町時代の遺物」『龍峰遺跡発掘調査報告書II 遺物編』中郷村教育委員会
- 川村浩司 2000b 「上越市の古墳時代の土器様相－関川右岸下流域を中心に－」『上越市史研究』第5号 上越市
- 川村浩司・品田高志 2003 「第4章 第2節 5 津倉田遺跡」『上越市史』上越市史編さん委員会
- 小池義人 1998 「下馬場遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成9年度
- 小池義人<sup>よしと</sup> 2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第96集 裏山遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小島幸雄 1979 『岩本地區遺跡群発掘調査報告書』上越市教育委員会
- 小島幸雄 1989 『下馬場古窯跡群確認調査報告書』上越市教育委員会
- 小島幸雄 1991 『中島廻り遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会
- 小島幸雄・菅澤正史 1995 『北割遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会
- 小島幸雄・中西聰<sup>ひか</sup> 1996 『前田遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会
- 小林三郎 1996 『関東地方の古墳時代の土器』『日本土器事典』雄山閣
- 小林新治 1994 「第2章 遺跡の位置と環境」『飯山市埋蔵文化財調査報告書 第36集 上野遺跡IV』飯山市教育委員会
- 駒井和愛・吉田章一郎 1962 『斐太』慶友社
- 駒形敏朗・岩崎 均 1987 『横山遺跡』長岡市教育委員会
- 小山正忠・竹原秀雄 1994 『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社
- 坂井秀弥 1984 『第VI章 1 今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について』『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第35集 上新バイパス関係遺跡発掘調査報告I 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育

委員会

- 坂井秀弥 1989 「第VII章 1 古墳時代の土器と遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集 新新バイパス関係遺跡発掘調査報告書 山三賀II遺跡』新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
- 坂井秀弥・川村浩司 1993 「古墳出現期における越後の土器様相」「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」研究者グループ（研究者代表 甘粕健）
- 坂井秀弥・川村浩司・田中靖・本間桂吉 1987 「越後における古式須恵器と若干の問題」（千曲川水系古代文化研究所）1987所収）
- 坂口一 1987 「群馬県における古墳時代中期の土器の編年－共伴関係による土器形式組列の検討－」『研究紀要－4－』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤慎・高橋勉 2000 『平成11年度 新井市道路確認調査報告書 上寺遺跡・般音平古墳群・西保1号墳・田中前2号墳』新井市教育委員会
- 佐藤慎 2002 『斐太歴史の里調査報告書 第1集 斐太歴史の里確認調査概要報告書 観音平1号墳・4号墳 矢代山地区』斐太歴史の里調査団・新井市教育委員会
- 兼澤浩 1986 『箱清水式土器の文化圏と小地域』『歴史手帳』14巻2号 通巻148号 名著出版
- 兼澤正史 2003 「越後における庄内～布留式併行期の土器様相－頸城郡を中心として－」『庄内式土器研究26－庄内式併行期の土器生産とその動き－越の国を中心とした庄内式併行期の土器様相』庄内式土器研究会
- 兼澤正史・小島幸雄 1999 『新潟県上越市上千原地区ほ場整備事業関連発掘調査報告書 津倉田遺跡』上越市教育委員会
- 佐原真 1959 「弥生式土器製作技法に関する二三の考察－櫛描文と回転台をめぐって－」『私たちの考古学』5-4
- 上越市教育委員会 1993 『子安遺跡』『新潟県上越市市内調査確認概要報告書』
- 上越市教育委員会 2002 『吹上遺跡発掘調査概要報告書』上越市教育委員会
- 鈴木俊成 1996 「第VII章 3 石器」『新潟県新潟県埋蔵文化財調査報告書 第72集 関越自動車道編之内インター千エンジ関連発掘調査報告書 清水上遺跡II』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成・春日真実 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 北陸自動車道関係発掘調査報告書 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 閔孝一・中島庄一 1994 『（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19 猿道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路 一長野県中野市内一 荘林遺跡・七瀬遺跡』長野県・長野県道路公社・（財）長野県埋蔵文化財センター
- 高橋一功 1994 「遺跡の位置と環境」『北陸自動車道関係発掘調査報告書 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋桂・望月静雄 2001 「第I章 遺跡の位置と歴史的環境」『飯山市埋蔵文化財調査報告書 第63集 北町遺跡II』飯山市教育委員会
- 高橋勉 1985a 『昭和59年度 新井市遺跡確認調査報告書一上々田遺跡・高柳宮ノ本遺跡一』新井市教育委員会
- 高橋勉 1985b 『月岡遺跡範囲確認緊急調査報告書』新井市教育委員会
- 高橋勉 1989 『杉明遺跡発掘調査報告書』新井市教育委員会

- 高橋 勉 1993 『杉明遺跡発掘調査報告書』 新井市教育委員会
- 滝沢規朗 1994 「新井市斐太遺跡群の出土土器について」『新潟考古』第5号 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 1999 「第3章 第3節 集落」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会・古志書院
- 武田孝昭 1995 「平成7年度の発掘成果 小野沢西遺跡」『埋文にいがた』No.13 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 武田孝昭 1996 「小野沢西遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成7年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 武田孝昭 1997 「第II章 1. 地理的環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第85集 上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅱ 大洞原C遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡』I 石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1993 「北陸南西部の古墳確立期前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 田辯昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 千野 浩<sup>かず</sup> 2001 『長野市の埋蔵文化財 第97集 長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ』 長野市教育委員会
- 親跡 高・野村忠司編 2000 『龍峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ 遺物編』 中郷村教育委員会
- 立木(土橋)由理子 1996 「横引遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第74集 上信越自動車道関係発掘調査報告書 I 横引遺跡・龍峰遺跡・柳平遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鶴田典昭 1998 「第1章 第3節 遺跡周辺の環境」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書28 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14—中野市内その3、豊田村内一生出遺跡、並山遺跡、風呂屋遺跡、対面所遺跡、飛山遺跡、大谷池遺跡、八号堤遺跡』日本道路公团名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 鶴田典昭<sup>ほか</sup> 1998 『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書28 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14—中野市内その3、豊田村内一生出遺跡、並山遺跡、風呂屋遺跡、対面所遺跡、飛山遺跡、大谷池遺跡、八号堤遺跡』日本道路公团名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 鶴田典昭、中島英子<sup>ほか</sup> 1997 『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書24 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13—小布施町内・中野市内その1、その2—飯田古屋敷遺跡、玄照寺跡、がまん潤遺跡、沢田鍋上遺跡、清水山窯跡、池田窯窯跡、牛出古窯遺跡』日本道路公团名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 寺沢薰<sup>ほか</sup> 1986 『矢部遺跡—国道24号線横原バイパス建設に伴う遺跡調査報告(Ⅱ)—奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊』奈良県教育委員会
- 常盤井智行・望月静雄・高橋桂<sup>ほか</sup> 1994 『飯山市埋蔵文化財調査報告書 第36集 上野遺跡Ⅳ』飯山市教育委員会
- 土橋由理子 1995 「柳平遺跡・小野沢西遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成6年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土橋由理子 2003 「報告書作成中の遺跡 小野沢西遺跡」『埋文にいがた』No.44 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 長井數秋 1996 「土居窯式土器」「日本土器事典」雄山閣
- 中島英子 2000 「第11章 大平B遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書49 上信越自動車道埋蔵文化

- 化財発掘調査報告書 16 一信濃町内 その2—星光山荘 A・星光山荘 B・西岡 A・貫ノ木・上ノ原・大久保南・東裏・裏ノ山・針ノ木・大平 B・日向林 A・日向林 B・七ツ栗・普光田遺跡  
続文時代～近世 日本道路公團・長野県教育委員会・(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
- 中島庄一 1999 「飯山・中野地方における弥生中期後半から後期の編年について」『1998年度長野県考古学会冬季大会発表資料 99 シンポジウム長野県の弥生土器編年 発表要旨』長野県考古学会弥生部会
- 長野県教育委員会 1980 『歴史の道調査報告書 III—北国街道—』
- 長野県教育委員会 1982 『歴史の道調査報告書 X—飯山道—』
- 新潟県教育委員会 1991 『新潟県歴史の道調査報告書 第二集 北国街道 I』
- 新潟県教育委員会 1993 『新潟県歴史の道調査報告書 第五集 北国街道 II』
- 橋本博文 2002 「第3章3 (7)まとめ」『斐太歴史の里調査報告書 第1集 斐太歴史の里確認調査概要報告書 観音平1号墳・4号墳 矢代山地区』斐太歴史の里調査団・新井市教育委員会
- 橋本裕行 1986 『奈良地区遺跡群Ⅰ 発掘調査報告書No.11 地点 受地だいやま遺跡 上巻』奈良地区遺跡調査団
- 早津賢二 1985 『妙高火山群—その地質と活動史—』第一法規出版
- 早津賢二 1994 「新潟県焼山火山の活動と年代—歴史時代のマグマ噴火を中心として—」『地学雑誌』Vol.103, №2 (931)
- 早津賢二・新井房夫 1985 『妙高火山群テフラ地域のテフラ層』『妙高火山群—その地質と活動史—』第一法規出版
- 藤田英博・上鶴善治 1993 「第5章 第1節 阿弥陀堂遺跡出土の土器について」『岐阜県文化財保護センター調査報告書 第18集 阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 星奈津子 1997 「第二章 2. 歴史的環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第85集 上信越自動車道関係発掘調査報告書II 大洞原C遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 三ツ井朋子 1997 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第85集 上信越自動車道関係発掘調査報告書II 大洞原C遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 吉川俊久 2001 「三和村大野古墳群の調査」『新潟県考古学会第13回大会研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 吉田博行 1990 『会津坂下町文化財調査報告書 第17集 福島県営会津南部ほ場整備事業 若宮地区遺跡発掘調査報告書』会津坂下町教育委員会
- 米田敏峯 1992 「畿内における前半期古墳の土器年代についての予察」『考古学論集』4 考古学を学ぶ会
- 渡辺ますみ 1994 『緒立C遺跡発掘調査報告書』黒崎町教育委員会

「おまえは、おまえの本領を出さないといけない。おまえの本領の場合は、僕がおまえの本領を出さないといけない。大、萬葉、文選がお読みかない。」（）付は説明

卷之三

亦生—古墳時代土器觀察表 (1)

備考											
種類	学名	通称	原産地	分類	固有種	法基準	法基準	性状	上	色	測量
1 SD101 190.2	伊	グリット	日本	イソ	1/18	1/18	1/18	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
2 SD111 200.51	伊	イソ	日本	イソ	—	1/12	1/12	大	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
3 SD114 130.4	伊	イソ	日本	イソ	—	1/16	1/16	小	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
4 SD116 190.31	伊	イソ	日本	イソ	1/14	1/14	1/14	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
5 SD119 130.7	伊	イソ	日本	イソ	1/14	1/14	1/14	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
6a SD120 100.1	伊	イソ	日本	イソ	1/6	1/6	1/6	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
6b —	伊	イソ	日本	イソ	1/6	1/6	1/6	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
7 SD120 100.12	伊	イソ	日本	イソ	2/6	2/6	2/6	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
8 SD124 100.5	伊	イソ	日本	イソ	1/18	1/18	1/18	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
9 SD126 100.20	伊	イソ	日本	イソ	2/6	2/6	1/8	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
10 SD128 100.1	伊	イソ	日本	イソ	1/6	1/6	1/6	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
11 SD129 100.17	伊	イソ	日本	イソ	1/7	1/7	1/7	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
12 SD134 100.22	伊	イソ	日本	イソ	1/7	1/7	1/7	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
13 SD136 100.2	伊	イソ	日本	イソ	1/6	1/6	1/6	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
14 SD138 100.1	伊	イソ	日本	イソ	1/9	1/9	1/7	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
15 SD140 100.19	伊	イソ	日本	イソ	1/6	1/6	1/6	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
16 SD141 200.22	伊	イソ	日本	イソ	1/5	1/5	1/6	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
17 SD141 100.25	伊	イソ	日本	イソ	1/8	1/8	1/8	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
18 SD146 100.1	伊	イソ	日本	イソ	—	1/7	1/7	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
19 SD147 100.5 - 7	伊	イソ	日本	イソ	1/6*	1/6*	1/6	大	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
20 SD150 100.23	伊	イソ	日本	イソ	—	1/5	1/5	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
21 SD151 100.16	伊	イソ	日本	イソ	—	1/8	1/8	小	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
22 SD151 200.24	伊	イソ	日本	イソ	—	1/7	1/7	なし	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm
23 SD151 200.51	伊	イソ	日本	イソ	—	1/5	1/5	小	黄褐色	外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 1.3cm 内: 1.2cm

## 発行～古墳時代土器翻訳表(2)

発行	通名	タリット	原 位	区分	面相	全幅	幅高	高さ	底径	底厚	内 面	外 面	型
24	SD1	23B22	砂	2	黒	A	6	—	内：圓・凹 外：扁	1.5合	内：右引彫文・口 外：縦文・側：彫文(左・下)	細底鉢 88.0cm	
25	SD1b	1865	—	2	黒	A	6	—	内：扁	外：7.5	外：縦文・側：彫文(左・下)	細底鉢 77.5cm	
26	SD1b	1865	—	2	黒	A	6	—	内：扁	外：7.5	外：縦文・側：彫文(左・下)	細底鉢 77.5cm	
27	SD1a	19642	II	2	油灰	A	6~8	1/2	底：13.5	底：15.36	内：圓・凹 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
28	SD1a	18120	IIb	2	油灰	A	7	—	内：圓・凹 外：縦文・側：彫文	内：圓・凹 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm	内：丸
29	SD1a	1938	II	2	黒	D1	[1~6]	1/10	[1] : 14.2	[1] : 2.36	内：圓・凹 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
30	SD1c	19657	IIa	2	黒	D1	[1~6]	1/12	[1] : 16.6	[1] : 3.36	内：圓・凹 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
31	SD1j	20211	砂	2	黒	E2	[1~6]	1/10	[1] : 17.2	[1] : 4.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
32	SD1a	18810	II	2	黒	D2	[1~6]	1/3	[1] : 16.8	[1] : 22.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
33	SD1a	19122	不明	2	黒	C4a	II	1/18	[1] : 16.0	[1] : 2.36	内：圓・凹 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
34	SD1a	19123	砂	2	黒	C4b	[1~6]	1/10	[1] : 16.6	[1] : 4.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
35	SD1a	1931	尾上Ⅱ	2	黒	C1	[1~6]	1/5	[1] : 15.6	[1] : 13.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
36	SD1a	19316	II	2	黒	C2b	[1~6]	1/6	[1] : 13.0	[1] : 3.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
37	SD1a	19316	K.F	2	黒	D2	[1~6]	1/6	[1] : 15.8	[1] : 7.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
38	SD1a	19642	砂	2	黒	C2c	[1~6]	1/12	[1] : 17.0	[1] : 3.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
39	SD1a	1967	砂	2	黒	C3b	[1~6]	1/2	[1] : 17.0	[1] : 18.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
40	SD1a	1931	尾上・クロ	2	黒	C3b	[1~6]	1/12	[1] : 13.8	[1] : 3.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
41	SD1a	19641-11	砂	2	黒	C3b	[1~6]	1/4	[1] : 16.3	[1] : 8.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
42	SD1a	19616	II	2	黒	C3c	[1~6]	1/8	[1] : 16.8	[1] : 5.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
43	SD1a	18610	II	2	黒	C3a	[1~6]	1/6	[1] : 16.6	[1] : 2.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
44	SD1a	19313	砂	2	黒	C3c	[1~6]	1/16	[1] : 14.0	[1] : 2.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
45	SD1a	18610	IIb	2	黒	C3	[1~6]	1/4	[1] : 10.3	[1] : 13.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
46	SD1d	19620	底下	2	黒	G3	[1~6]	1/8	[1] : 16.3	[1] : 1.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
47	SD1a	1911	II	2	黒	G2	II	1/12	[1] : 13.4	[1] : 3.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
48	SD1a	188120	IIb	2	黒	G2	II	1/12	[1] : 12.9	[1] : 3.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
49	SD1a	1931	尾上・クロ	2	黒	G2	[1~6]	1/7	[1] : 13.4	[1] : 5.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm
50	SD1a	1936	II	2	黒	G2	[1~6]	1/10	[1] : 20.0	[1] : 4.36	内：縦文・側：彫文 外：縦文・側：彫文	内：丸	内底板 107.0cm

番号	通名	タリック	層位	区分	断面	分類	形状	底形	底径	高さ	底厚	内径	外径	色	調	付物	付物	内面	外面	性状	備考	
51	S01a	10316	II	2. 楕	G	腹	II	口	1.36	(1: 16.0)	1.75	底：11.26	外：7.5									
52	S01a	10625	IIa	2. 楕	K	腹	II	口	1.36	(1: 16.0)	1.75	底：11.26	外：7.5									
53	S01a	10317	灰土	2. 楕	K	腹	II	口	—	—	—	底：11.26	外：7.5									
54	S01a	10318	II	2. 楕	K	腹	II	口	1.12	(1: 12.0)	1.26	底：11.26	外：7.5									
55	S01a	10917	IIb	2. 楕	J1	体	—	—	—	—	—	底：11.26	外：7.5									
56	S01a	101.7	砂	2. 楕	D	口～腹	I	口	1.09	(1: 12.0)	1.26	底：11.26	外：7.5									
57	S01a	10819・9	IIb	2. 楕	D	口～腹	I	口	1.03	(1: 12.0)	1.26	底：11.26	外：7.5									
58	S01a	10913	砂	2. 楕	G	口～腹	I	口	1.12	(1: 13.6)	1.36	底：11.26	外：7.5									
59	S01j	20312	砂	2. 楕	G	口～腹	I	口	1.26	(1: 13.6)	1.36	底：11.26	外：7.5									
60	S01j	203121	砂	2. 楕	H	口～腹	I	口	1.26	(1: 13.6)	1.36	底：11.26	外：7.5									
61	S01a	10813	II	2. 楕	G	口～腹	I	口	1.01	(1: 10.0)	1.01	底：11.26	外：7.5									
62	S01a	10916・17・ IIa・IIb	2. 楕	口～腹	A	口～腹	I	口	1.03	(1: 13.6)	1.36	底：11.26	外：7.5									
63	S01a	10520	II	2. 楕	D	腹	II	口	1.06	(1: 13.6)	1.36	底：11.26	外：7.5									
64	S01a	101.1	II	3. 楕	A1	口～腹	I	口	1.03	(1: 18.6)	1.6	底：11.26	外：7.5									
65	S01a	10912	砂	3. 楕	A2	口～腹	I	口	1.23	(1: 18.0)	1.6	底：11.26	外：7.5									
66	S01j	10915	砂	3. 楕	A4	口～腹	I	口	1.05	(1: 13.6)	1.36	底：11.26	外：7.5									
67	S01a	10818	IIb	3. 楕	A3	口～腹	I	口	1.18	(1: 14.8)	1.36	底：11.26	外：7.5									
68	S01a	101.6	IIc・IIP	3. 楕	A3	口～腹	I	口	1.38	(1: 13.6)	1.36	底：11.26	外：7.5									
69	S01a	10911	IIc・F4P	3. 楕	B1	口～腹	I	口	1.12	(1: 16.5)	1.36	底：11.26	外：7.5									
70	S01a	10915	砂	3. 楕	B1	口～腹	I	口	1.04	(1: 15.6)	1.36	底：11.26	外：7.5									
71	S01a	10912	砂	3. 楕	B2b	口～腹	I	口	1.09	(1: 13.8)	1.36	底：11.26	外：7.5									
72	S01a	101.7	砂	3. 楕	B2b	口～腹	I	口	1.12	(1: 16.2)	1.36	底：11.26	外：7.5									
73	S01a	10912	砂	3. 楕	B2a	口～腹	I	口	1.18	(1: 18.0)	1.36	底：11.26	外：7.5									
74	S01a	10911	砂上クロ	3. 楕	B2a	口～腹	I	口	1.09	(1: 15.8)	1.36	底：11.26	外：7.5									
75	S01a	10906	II	3. 楕	B2a	口～腹	I	口	1.17	(1: 17.0)	1.36	底：11.26	外：7.5									
76	S01a	10912	砂上クロ	3. 楕	B2a	口～腹	I	口	1.14	(1: 15.6)	1.36	底：11.26	外：7.5									

## 発生～古墳時代土器翻訳表(4)

発行 年	遺物名	タリック	層位	区分	断面	全幅	高さ	底径	底形	施用	施用 (法文)	内面	外 面	備考
77	SD1a	10922	砂	3. 窓	B2a	10~18	1/10	1.150	1/4~1.26	なし	手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー	
78	SD1a	10915	砂	3. 窓	B2b	17~46	1/3	1.156	1/14~1.26	なし	手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー	
79	SD1a	10916・17	B	3. 窓	A3	1~46	1/4	1.150	1/9~26	なし	手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー	
80	SD1a	10916・21	B	3. 窓	A3	1~46	1/4	1.158	1/9~26	小 手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー		
81	SD1a	10916	Bb	3. 窓	B2a	1~46	1/7	1.153	1/6~26	なし	手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー	
82	SD1a	10916・17	Bb	3. 窓	E	1~46	1/7	1.153	1/2~26	なし	手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー	
83	SD1a	10921	B	3. 窓	B	1~46	1/9	1.142	1/4~26	なし	手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー	
84	SD1a	10916	B	3. 窓	A	1~46	1/6	1/4	1/25~36	小 手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー		
85	SD1a	10921	B	3. 窓	A	1~46	1/6	1/15	1/1~176	なし	手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー	
86	SD1a	10914	RyF9	3. 窓	D	1~46	1/12	1/1	1/3~36	小 手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー		
87	SD1a	10912	B	3. 窓	D	1~46	1/1	1/20	1/31~36	小 手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー		
88	SD1a	10921	B	3. 窓	F	1~46	1/10	1/156	1/4~26	小 手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー		
89	SD1a	10921	Bb	3. 窓	D	1~46	1/7	1/11~19	1/5~26	小 手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー		
90	SD1a	10912・12	Bb	3. 窓	D3	1~46	1/3	1/13~20	1/4~26	小 手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー		
91	SD1a	10911・16	B	3. 窓	D2	1~46	1/2	1/13~20	1/18~36	小 手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー		
92	SD1a	10911・3~7	B	3. 窓	F9P9	3~46	1/3	1/13~18	1/10~26	なし	手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー	
93	SD1a	10911	R上B	3. 窓	E3	1~46	1/15	1/11~15	1/3~26	なし	手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー	
94	SD1a	10916	B	3. 窓	E3	1~46	1/4	1/13~17	1/8~26	なし	手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー	
95	SD1a	10911	Bb	3. 窓	E2	1~46	1/5	1/13~14	1/4~26	大 手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー		
96	SD1a	10918	Bb	3. 窓	E3	1~46	1/7	1/11~18	1/5~26	なし	手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー	
97	SD1a	10915	B	3. 窓	E1	1~46	1/2	1/15~8	1/22~36	大 手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー		
98	SD1a	10917	Bb	3. 窓	D3	1~46	1/2	1/1~14	1/3~36	小 手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー		
99	SD1a	10917	Bb	3. 窓	D3	1~46	1/5	1/1~18	1/7~36	なし	手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー	
100	SD1a	10911	Bb	3. 窓	E1	1~46	1/20	1/1~14	1/3~26	なし	手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー	
101	SD1a	10914・15~7	B	3. 窓	E3	1~46	1/3	1/1~11	1/27~36	小 手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー		
102	SD1a	10911	RyF9	3. 窓	E4	1~46	1/3	1/1~11	1/5~26	なし	手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー	
103	SD1a	10912~12	B	3. 窓	E4	1~46	3~4	1/1~14	1/18~36	小 手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー		
104	SD1a	10917	Bb	3. 窓	E2	1~46	1/4	1/1~15	1/9~36	なし	手縫い縫合(縫い目)	内: 黄・白 外: 黄・白	口: ハイドロカーナー 外: ハイドロカーナー	

番号	通名	タリツ	層位	区分	断面	全幅	幅高比	高さ	底径	底形	上	色	調	付物	内面	外	色	備考
105 SD1a	13B16	IIf	3	H	E3	1.30~1.35	1.16	[1: 6.36]	小	扁圓		内：黒褐色	外：白	子テ→ミガキ	子テ→ミガキ	子テ→ミガキ	子テ→ミガキ	
106 SD1a	13H14+15+	ab	3	H	E3	1.30~1.45	3.4	[1: 11.32]	小	底膨張扁圓		内：黒褐色	外：黄褐色	子テ→ミガキ	子テ→ミガキ	子テ→ミガキ	子テ→ミガキ	
107 SD1a	13D6+11	K+L9	3	H	E2	1.30~1.48	1.12	[1: 1.40]	1.35	なし		内：黒褐色	外：黄褐色	ハラク→ミガキ	ハラク→ミガキ	ハラク→ミガキ	ハラク→ミガキ	
108 SD1a	13D7	K+	3	H	E4	1.30~1.48	1.20	[1: 1.43]	1.26	なし		内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
109 SD1j	20H11	g	3	H	E4	1.30~1.48	1.04	[1: 8.36]	1.40	なし		内：黒褐色	外：棕	ミコナデ	ミコナデ	ミコナデ	ミコナデ	
110 SD1j	20H12	g	3	H	E4	1.30	1.18	[1: 1.30]	2.06	小	底膨張	内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
111 SD1j	20H21	g	3	H	E4	1.30~1.48	1.18	[1: 1.66]	2.06	なし		内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
112 SD1j	20H21	g	3	H	E4	1.30~1.48	1.10	[1: 1.54]	2.06	なし		内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
113 SD1a	13H25	IIa	3	H	G	1.30~1.48*	1.44	[1: 1.35]	9.26	なし		内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
114 SD1a	13H22	II	3	H	G	1.30~1.48	1.44	[1: 1.35]	1.36	中	美	内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
115 SD1a	13H16	II	3	H	G	1.30~1.48	1.19	[1: 1.20]	2.06	なし		内：棕	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
116 SD1a	13D1	II	3	H	G	1.30~1.48*	1.19	[1: 1.20]	4.36	なし		内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
117 SD1a	13D6+11+12	K+L9	3	H	F	1.30~1.48*	1.05	[1: 1.46]	8.26	なし		内：棕	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
118 SD1a	13H20	IIb	3	H	F	1.30~1.48*	1.05	[1: 1.46]	1.05	なし		内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
119 SD1a	13H15+17+21	K+L9	3	H	F	1.30~1.48*	1.21	[1: 1.26]	1.26	なし		内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
120 SD1a	13D1	K+L9	3	H	F	1.30~1.48*	1.05	[1: 1.46]	1.05	なし		内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
121 SD1a	13D2+2+7+	II	3	H	F	1.30~1.48*	1.05	[1: 1.07]	1.36	なし		内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
122 SD1a	13H14	IIb	3	H	F	1.30~1.48*	1.08	[1: 1.13]	1.36	なし		内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
123 SD2	20D10	K+F4b	1	H	A	1.30	1.05	[1: 1.62]	3.06	なし		内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
124 SD2	20E20	地土F4b	1	H	A	1.30	1.05	[1: 1.62]	3.06	なし		内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
125 SD2	21E22	地土B	1	H	A	1.30	—	—	—	—		内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
126 SD2	21K2	地土B	1	H	A	1.30	—	—	—	—		内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
127 SD2	20E20	地土F4b	0	H	A	1.30	—	—	—	—		内：黒褐色	外：棕	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
128 SD2	20A15	K+L9	1	H	G	1.30~1.48*	1.16	[1: 1.25]	3.06	なし		内：黒褐色	外：白	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
129 SD2	20A+5	K+F4b	1	H	G	1.30~1.48*	1.16	[1: 1.74]	1.26	なし		内：黒褐色	外：白	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
130 SD2	20A+5	K+F4b	1	H	G	1.30~1.48*	1.10	[1: 1.68]	1.26	なし		内：黒褐色	外：白	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
131 SD2	21J22	地土B	1	H	F	1.30	1.10	[1: 1.68]	1.26	なし		内：黒褐色	外：白	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	

第六章 古代賦役制度

## 発生～古墳時代土器翻訳表(7)

番号	通称名	グリッド	層位	区分	断面	分類	種別	形状	底形	目	色	質	付跡	内面		外面		備考					
														底形	(底面)	外	内						
153	S3/2	2/111	基上 K.F	2	奥	P	[1]~[8]	1/5	[1] : 15.8	[1] : 10.36	A	[1] : 16.5	内：浅鉢 外：直筒 底：斜面	外：浅鉢 内：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 10.36	[1] : 16.5	[1] : 16.5	[1] : 10.36	[1] : 16.5		
154	S3/2	2/117	カタクロ	2	奥	D1	[1]	1/3	[1] : 16.4	[1] : 12.36	A	[1] : 16.5	内：浅鉢 外：直筒 底：斜面	外：浅鉢 内：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 12.36	[1] : 16.4	[1] : 16.5	[1] : 12.36	[1] : 16.4		
155	S3/2	2/1122	基下部	2	奥	D1	[1]	1/10	[1] : 14.0	[1] : 4.36	A	[1] : 16.5	内：浅鉢 外：直筒 底：斜面	外：浅鉢 内：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 4.36	[1] : 14.0	[1] : 16.5	[1] : 4.36	[1] : 16.5		
156	S3/2	2/111	基下部	2	奥	E1	[1]~[8]	1/6	[1] : 14.8	[1] : 6.36	A	[1] : 16.5	内：浅鉢 外：直筒 底：斜面	外：浅鉢 内：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 6.36	[1] : 14.8	[1] : 16.5	[1] : 6.36	[1] : 16.5		
157	S3/2	2/2015	K.F	2	奥	F4P	[1]	1/2	[1]	1/6	[1] : 17.0	[1] : 6.36	中：直筒 底：斜面	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 6.36	[1] : 17.0	[1] : 16.5	[1] : 6.36	[1] : 16.5		
158	S3/2	2/2010	K.F	2	奥	F4P	[1]	1/2	[1]~[8]	1/5	[1] : 16.9	[1] : 17.36	A	[1] : 16.5	内：浅鉢 外：直筒 底：斜面	外：浅鉢 内：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 17.36	[1] : 16.9	[1] : 16.5	[1] : 17.36	[1] : 16.5
159	S3/2	2/1122-21	基下部	2	奥	G1	[1]	1/2	[1]~[8]	1/4	[1] : 14.3	[1] : 13.36	中：直筒 底：斜面	内：浅鉢 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 13.36	[1] : 14.3	[1] : 16.5	[1] : 13.36	[1] : 16.5		
160	S3/2	2/2015	K.F	2	奥	G4P	[1]	1/2	[1]~[8]	1/2	[1] : 19.0	[1] : 18.36	A	[1] : 16.5	内：直筒 外：直筒 底：斜面	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 18.36	[1] : 19.0	[1] : 16.5	[1] : 18.36	[1] : 16.5
161	S3/2	2/2014	K.F	2	奥	G4P	[1]	1/2	[1]~[8]	1/7	[1] : 14.0	[1] : 5.36	中：直筒 底：斜面	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 5.36	[1] : 14.0	[1] : 16.5	[1] : 5.36	[1] : 16.5		
162	S3/2	2/2025	K.F	2	奥	H1	[1]	1/2	[1]~[8]	1/4	[1] : 15.4	[1] : 6.36	中：直筒 底：斜面	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 6.36	[1] : 15.4	[1] : 16.5	[1] : 6.36	[1] : 16.5		
163	S3/2	2/2020	K.F	2	奥	H1	[1]	1/2	[1]~[8]	1/8	[1] : 20.5	[1] : 9.36	中：直筒 底：斜面	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 9.36	[1] : 20.5	[1] : 16.5	[1] : 9.36	[1] : 16.5		
164	S3/2	2/2015	K.F	2	奥	H4P	[1]	1/2	[1]~[8]	1/4	[1] : 17.8	[1] : 17.8	中：直筒 底：斜面	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 17.8	[1] : 17.8	[1] : 16.5	[1] : 17.8	[1] : 16.5		
165	S3/2	2/111	基上	2	奥	C2b	[1]	1/2	[1]~[8]	1/3	[1] : 18.8	[1] : 5.36	无角	内：直筒 外：直筒 底：斜面	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 5.36	[1] : 18.8	[1] : 16.5	[1] : 5.36	[1] : 16.5	
166	S3/2	2/117	カタクロ	2	奥	C2b	[1]	1/2	[1]~[8]	1/3	[1] : 11.5	[1] : 10.36	中：直筒 底：斜面	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 10.36	[1] : 11.5	[1] : 16.5	[1] : 10.36	[1] : 16.5		
167	S3/2	2/2015	K.F	2	奥	C2b	[1]	1/2	[1]~[8]	1/6	[1] : 18.6	[1] : 6.36	中：直筒 底：斜面	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 6.36	[1] : 18.6	[1] : 16.5	[1] : 6.36	[1] : 16.5		
168	S3/2	2/2015	K.F	2	奥	C2b	[1]	1/2	[1]~[8]	1/7	[1] : 16.6	[1] : 11.36	中：直筒 底：斜面	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 11.36	[1] : 16.6	[1] : 16.5	[1] : 11.36	[1] : 16.5		
169	S3/2	2/2010	K.F	2	奥	C2b	[1]	1/2	[1]~[8]	1/3	[1] : 14.5	[1] : 10.36	A	[1] : 16.5	内：直筒 外：直筒 底：斜面	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 10.36	[1] : 14.5	[1] : 16.5	[1] : 10.36	[1] : 16.5
170	S3/2	2/2014	K.F	2	奥	C3	[1]	1/3	[1]~[8]	1/3	[1] : 17.26	[1] : 13.0	中：直筒 底：斜面	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 13.0	[1] : 17.26	[1] : 16.5	[1] : 13.0	[1] : 16.5		
171	S3/2	2/1K16	K.F	2	奥	C3c	[1]	1/2	[1]~[8]	1/4	[1] : 16.5	[1] : 10.36	中：直筒 底：斜面	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 10.36	[1] : 16.5	[1] : 16.5	[1] : 10.36	[1] : 16.5		
172	S3/2	2/216	K.F	2	奥	C3b	[1]	1/2	[1]~[8]	1/9	[1] : 19.4	[1] : 4.36	小：直筒	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 4.36	[1] : 19.4	[1] : 16.5	[1] : 4.36	[1] : 16.5		
173	S3/2	2/216	K.F	2	奥	C3c	[1]	1/2	[1]~[8]	1/5	[1] : 16.0	[1] : 7.36	大：直筒	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 7.36	[1] : 16.0	[1] : 16.5	[1] : 7.36	[1] : 16.5		
174	S3/2	2/1H22	基下部	2	奥	C3b	[1]	1/2	[1]~[8]	1/4	[1] : 13.8	[1] : 9.36	中：直筒 底：斜面	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 9.36	[1] : 13.8	[1] : 16.5	[1] : 9.36	[1] : 16.5		
175	S3/2	2/2116	K.F	2	奥	C3e	[1]	1/6	[1]~[8]	1/9	[1] : 15.9	[1] : 4.36	中：直筒 底：斜面	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 4.36	[1] : 15.9	[1] : 16.5	[1] : 4.36	[1] : 16.5		
176	S3/2	2/2015	K.F	2	奥	C3f	[1]	1/2	[1]~[8]	1/12	[1] : 16.0	[1] : 3.26	中：直筒	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 3.26	[1] : 16.0	[1] : 16.5	[1] : 3.26	[1] : 16.5		
177	S3/2	2/2015-10	K.F	2	奥	C3g	[1]	1/2	[1]~[8]	1/5	[1] : 10.0	[1] : 8.36	中：直筒	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 8.36	[1] : 10.0	[1] : 16.5	[1] : 8.36	[1] : 16.5		
178	S3/2	2/2015	K.F	2	奥	C3h	[1]	1/2	[1]~[8]	1/7	[1] : 15.4	[1] : 24.36	中：直筒	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 24.36	[1] : 15.4	[1] : 16.5	[1] : 24.36	[1] : 16.5		
179	S3/2	2/2015	基上	2	奥	C3i	[1]	1/10	[1]~[8]	1/10	[1] : 16.0	[1] : 4.36	中：直筒	内：直筒 外：直筒 底：斜面	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	口：ナメ 底：ヘタチ底 側：無凹縫	[1] : 4.36	[1] : 16.0	[1] : 16.5	[1] : 4.36	[1] : 16.5		

種名	学名	通称	タリット	固有名	分類	部位	別名	法則	法則	特徴	地上	植物	葉		花		果		根		
													葉	花	葉	花	葉	花	葉	花	
180. S022 2010.08.07	K. F. 89	2. 梅	C5	口~8°	3/3	[1: 1.3: 0]	[1: 19: 36]	小葉	葉子	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	
181. S022 2015.08.07	K. F. 89	2. 梅	C6c	口~8°	1/20	[1: 1.4: 0]	[1: 2: 26]	小葉	葉子	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	
182. S022 2015.08.07	K. F. 89	2. 梅	G1	口~8°	1/4	[1: 1.7: 0]	[1: 20: 36]	小葉	葉子	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	
183. S022 2015.08.07	K. F. 89	2. 梅	G2	口~8°	1/20	[1: 1.9: 0]	[1: 1: 36]	小葉	葉子	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	
184. S022 2015.08.07	K. F. 89	2. 梅	G2	口~8°	1/12	[1: 1.4: 0]	[1: 13: 36]	小葉	葉子	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	
185. S022 2016.08.07	K. F.	2. 梅	G2	口~8°	1/10	[1: 1.2: 0]	[1: 3: 36]	小葉	葉子	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	
186. S022 2010.08.14	K. F. 89	2. 梅	G	休~9°	1/2	底	8.6	底	29.76	小葉	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]
187. S022 2011.08.07	K. F. 89	2. 梅	G	休~9°	1/2	底	9.24	底	29.76	小葉	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]
188. S022 2015.08.07	K. F. 89	2. 梅	G	休~9°	1/5	底	7.0	底	23.76	小葉	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]
189. S022 2015.08.07	K. F. 89	2. 梅	G	休~9°	1/3	底	7.6	底	23.76	大葉	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]
190. S022 2015.08.07	K. F. 89	2. 梅	G	休~9°	1/1	底	8.0	底	36.26	大葉	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]
191. S022 2015.08.07	K. F. 89	2. 梅	G	休~9°	2/3	底	8.6	底	19.36	大葉	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]
192. S022 2015.08.07	K. F. 89	2. 梅	J1	口~8°	2/3	[1: 1.5: 6]	[1: 24: 26]	小葉	葉子	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	
193. S022 2015.08.07	K. F. 89	2. 梅	F	口~8°	1/6	[1: 1.5: 6]	[1: 8: 36]	小葉	葉子	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	
194. S022 2017.08.07	K. F. 89	2. 梅	H	—	—	—	—	—	—	小葉	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]
194b. S022 2011.08.07	K. F.	2. 梅	H	休~9°	1/1	底	4.5	底	36.26	小葉	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]
195. S022 2014.08.07	K. F. 89	2. 梅	J1	口~8°	1/7	[1: 1.7: 5]	[1: 5: 36]	小葉	葉子	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	
196. S022 2010.08.15	K. F. 89	2. 梅	E	口~8°	1/8	[1: 1.1: 9]	[1: 25: 36]	大葉	葉子	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	
197. S022 2010.08.15	K. F.	2. 梅	E2	休~9°	4/5	底	11.5	底	16.36	大葉	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]
198. S022 2015.08.07	K. F. 89	2. 梅	B	休~9°	1/1	底	12.0	底	14.1	小葉	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]
199. S022 2019.08.07	K. F. 89	2. 梅	C	休~9°	1/6	[1: 1.3: 0]	[1: 15: 36]	中葉	葉子	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	
200. S022 2015.08.07	K. F. 89	2. 梅	C	休~9°	1/9	底	19.8	底	4.36	小葉	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]
201. S022 2013.08.07	K. F.	2. 梅	C	休~9°	1/3	底	7.6	底	12.36	大葉	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]
202. S022 2015.08.07	K. F. 89	2. 梅	B	休~9°	1/1	底	12.0	底	14.1	小葉	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]
203. S022 2010.08.15	K. F. 89	2. 梅	G	休~9°	1/2	底	8.6	底	15.36	小葉	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]
204. S022 2011.08.07	K. F. 89	2. 梅	E	休~9°	1/4	[1: 10: 8]	[1: 14: 36]	小葉	葉子	葉子	外	スヌ	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	[1: 1.3: 27: 7]	[1: 1.3: 27: 4]	

番号	通名	タリツル	單位	区分	分類	形質	分類	形質	分類	形質	分類	形質	外観	
N <sub>0</sub>														
205 S02	204.6・9・ 205.	R.K.F	3	變	A2	口～4°	1/6	(1: 17.9	(1: 27.36	大	手取平 身	内：灰白色 外：浅黄色	口：ハラク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
206 S02	205.5	R.K.F	3	變	A2	口～4°	1/3	(1: 15.4	(1: 12.26	なし	直角底 身	内：灰白色 外：浅黄色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
207 S02	206.11	R.K.F	3	變	A2	口～4°	1/3	(1: 17.8	(1: 31.36	なし	直角底 身	内：灰白色 外：灰白色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
208 S02	206.2	R.K.F	3	變	A4	口～4°	1/3	(1: 17.5	(1: 25.36	なし	直角底 身	内：灰白色 外：浅黄色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
209 S02	206.5	R.K.F	3	變	C	口～4°	1/7	(1: 13.8	(1: 12.26	なし	直角底 身	内：灰白色 外：浅黄色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
210 S02	207.1	R.K.F	3	變	A3	口～4°	1/3	(1: 15.5	(1: 19.36	大	手取平 身	内：灰白色 外：浅黄色	口：ハラク 外：ヘラチス	
211 S02	207.5	R.K.F	3	變	D1	口～4°	1/3	(1: 16.5	(1: 8.26	小	直角底 身	内：灰白色 外：灰白色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
212 S02	208.2	R.K.F	3	變	D2	口～4°	1/7	(1: 15.8	(1: 6.26	小	直角底 身	内：灰白色 外：灰白色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
213 S02	208.5	R.K.F	3	直	A	口～4°	1/2	(1: 15.7	(1: 33.36	なし	直角底 身	内：灰白色 外：灰白色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
214 S02	209.2	R.K.F	3	直	E	口～4°	1/3	(1: 10.6	(1: 6.26	小	直角 身	内：灰白色 外：灰白色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
215 S02	209.22.23	R.K.F	3	直	H	口～4°	1/2	(1: 13.0	(1: 8.26	なし	直角 身	内：灰白色 外：灰白色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
216 S03.6	210.2	R.K.L. ～H	1	變	B	口～4°	—			大	直角 身	内：灰白色 外：灰白色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
217 S03.6	210.23	R.K.F	1	變	A	体	1/8			小	直角 身	内：灰白色 外：灰白色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
218 S04	210.75	—	1	變	A	口～4°	1/8	(1: 17.6	(1: 5.26	なし	直角 身	内：灰白色 外：灰白色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
219 S04a	210.7	R.K.F	2	變	A2	口～4°	1/3	(1: 15.3	(1: 20.26	なし	直角底 身	内：灰白色 外：灰白色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
220 S03.6	210.79	R.K.L. ～H	2	變	A3	口～4°	3/4	(1: 14.6	(1: 24.36	小	直角底 身	内：灰白色 外：灰白色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
221 S03.6	210.11	R.K.F	2	變	A3	口～4°	1/5	(1: 15.0	(1: 9.26	なし	直角底 身	内：灰白色 外：灰白色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
222 S03.6	210.24	R.K.F	2	變	A4	口	1/5	(1: 16.0	(1: 5.26	なし	直角 身	内：灰白色 外：灰白色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	
223 S03.6	210.4	R.K.F	2	變	A2	口～4°	1/6	(1: 15.5	(1: 6.26	なし	直角 身	内：灰白色 外：灰白色	口：ヨウサク 外：ヘラチス 外：ヘラチス	

## 発行～古墳時代土器翻訳表(10)

番号	通名	タリック	層位	区分	断面	分類	種別	形状	底形	内形	外形	色	質	付物	備考			
															法面	法面		
224	SD3a	21F1-7 R.L. R.L.	R.F.	2	變	A5	[1]~[8] 1/4	[1 : 17.4	[1 : 10.36	大	底扁平	内：浅腹 外：浅腹	外：灰	1.7年	[1 : 11.1~11.1]	縫合部：8~9cm 縫合部：縫合部(1.1~1.7cm)		
225	SS1	21F13	—	2	變	A	[1]~	—	小	底	内：浅腹 外：深腹	内：灰 外：灰	なし	1.7年	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)		
226	SD3a	21F3	R.F.	2	變	A	[1]	—	なし	底	内：浅腹 外：深腹	内：灰 外：灰	なし	1.7年	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)		
227	SD3a	21G10	R.L.	2	變	A	[1]	—	小	底	内：浅腹 外：深腹	内：灰 外：灰	なし	1.7年	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)		
228	SD3a	21G3	R.L.	2	變	A	[1]	—	小	底	内：浅腹 外：深腹	内：灰 外：灰	なし	1.7年	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)		
229	SD3a	21F19	R.F.	2	變	A	[1]~[8] 1/6	—	なし	底	内：浅腹 外：深腹	内：灰 外：灰	なし	1.7年	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)		
230	SD3a	21E24	R.F.	2	變	A	[1]	—	なし	底	内：浅腹 外：深腹	内：灰 外：灰	なし	1.7年	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)		
231	SD3a	21E23	R.L.	2	變	A5	[1]	—	なし	底	内：浅腹 外：深腹	内：灰 外：灰	なし	1.7年	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)		
232	SD3a	21G4	R.L.	2	變	A	[1]~[8] 1/6	[1 : 16.0	[1 : 1.36	中	(16)底丸出	内：浅 外：灰	[1 : 2.0] 外：灰	なし	[1 : 1.1~1.1]	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)	
233	SD3a	21G8	R.F.	2	變	A	[1]~	—	なし	底	内：浅腹 外：深腹	内：灰 外：灰	なし	1.7年	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)		
234a	SS1	21G10	—	2	變	A	[1]~	—	大	底	内：浅腹 外：深腹	内：灰 外：灰	なし	1.7年	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)		
234b	SS1	21G10	R.F.	2	變	A	[1]~[8] 1/6*	—	大	底	内：浅腹 外：深腹	内：灰 外：灰	なし	1.7年	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)		
235a	SD3a	21H7	—	2	變	E2	[1]~	[1 : 21.0	[1 : 16.36	中	(16)底丸出	内：浅 外：灰	[1 : 2.0] 外：灰	なし	[1 : 1.1~1.1]	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)	
235b	SD3a	21H8	R.F.	2	變	A	[1]~[8] 1/6	[1 : 21.0	[1 : 16.36	中	(16)底丸出	内：浅 外：灰	[1 : 2.0] 外：灰	なし	[1 : 1.1~1.1]	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)	
236	SD3a	21H7-12	R.F.	2	變	B2	[1]~[8] 1/10	[1 : 7.0	[1 : 16.36	なし	底丸出	内：浅 外：灰	[1 : 2.0] 外：灰	なし	[1 : 1.1~1.1]	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)	
236	SD3a	21F23	R.F.	2	變	D1	[1]	—	大	底	内：浅腹 外：深腹	内：灰 外：灰	なし	1.7年	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)		
237	SD3a	21E19	R.L.	2	變	C1	[1]~	[1 : 27.36	[1 : 27.36	中	なし 底丸出	内：浅腹 外：深腹	なし	1.7年	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)		
238	SD3a	21F9	R.L.	2	變	C2c	[1]~[8] 1/8	[1 : 18.1	[1 : 19.4	[1 : 2.36	なし 底丸出	内：浅腹 外：深腹	なし	1.7年	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)		
239	SD3a	22E16	R.L.	2	變	C2a	[1]~[8] 1/8	[1 : 20.0	[1 : 17.0	[1 : 2.36	小	底丸出	内：浅腹 外：深腹	なし	1.7年	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)	
240	SD3a	21F7	R.F.	2	變	C2b	[1]~[8] 1/4	[1 : 16.0	[1 : 11.36	小	底丸出	内：浅腹 外：深腹	[1 : 2.0] 外：灰	なし	[1 : 1.1~1.1]	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)	
241	SD3a	21F18	R.L.	2	變	C5	[1]~[8] 1/6	[1 : 17.6	[1 : 18.36	なし	底丸出	内：浅腹 外：深腹	[1 : 1.8~2.0] 外：灰	なし	[1 : 1.1~1.1]	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)	
242	SD3a	21G3-4-10	R.L.	2	變	C3d	[1]~[8] 1/6	[1 : 12.8	[1 : 2.36	なし	底丸出	内：浅腹 外：深腹	[1 : 2.0] 外：灰	なし	[1 : 1.1~1.1]	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)	
243	SD3a	21E15	R.L.	2	變	C3d	[1]~[8] 1/4	[1 : 15.6	[1 : 2.36	小	底丸出	内：浅腹 外：深腹	[1 : 2.0] 外：灰	なし	[1 : 1.1~1.1]	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)	
244	SD3a	21G25	R.L.	2	變	C5	[1]	[1 : 15	[1 : 15.0	[1 : 3.05	なし	底丸出	内：浅腹 外：深腹	[1 : 2.0] 外：灰	なし	[1 : 1.1~1.1]	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)
245	SD3a	21G9	R.L.	2	變	H	[1]~[8] 1/6	[1 : 15.0	[1 : 15.36	なし	底丸出	内：浅腹 外：深腹	[1 : 2.0] 外：灰	なし	[1 : 1.1~1.1]	縫合部	縫合部(1.1~1.7cm)	

## 発生～古墳時代土器翻訳表(11)

番号	通名	タリック	原位	区分	断面	分類	相名	性状(法縫)	性状(法縫)	性状(法縫)	性状(法縫)	性状(法縫)	性状(法縫)	性状(法縫)	内・外・色・質			備考
															外:素	外:素	内:素	
246	S033a	21E22	R上	2	B	A	口～A'	1/2	(1 : 12.0	(1 : 10.36	なし	白	白	内: 染	外: 黄～褐	外: 黄～褐	内: 灰	(国: 集丸)
247	S033a	21F13	R上	2	B	A	口～A'	1/2	(1 : 11.6	(1 : 17.36	なし	白	白	内: 染	外: 黄～褐	外: 黄～褐	内: 灰	(国: 集丸)
248	S033a	21F18	R上	2	B	G	口	1/7	(1 : 13.6	(1 : 5.36	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
249	S033a	21F20	R上	2	B	G	口	1/2	(1 : 18.2	(1 : 16.36	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
250	S033a	21F23	R上	3	高杯	A	K'	1/2	(1 : 9.26	(1 : 9.8	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
251	S033a	21F27	R上	2	高台	B	K	1/4	(1 : 11.8	(1 : 10.36	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
252	S033a	21F31	R上	3	壇	G	口	1/2	(1 : 13.1	(1 : 5.36	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
253	S033a	21F32	R上	3	壇	G	口	1/2	(1 : 12.0	(1 : 7.36	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
254	S033a	21E20	R上	3	壇	E2	口	1/2	(1 : 10.36	(1 : 10.36	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
255	S033a	21E26	R上	—	—	—	—	—	(1 : 5.36	(1 : 5.36	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
256	S032	21E21	—	2	壇	D1	D1	1/20	(1 : 16.6	(1 : 7.36	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
257	S032	21E22	—	2	壇	C2a	口～B	1/12	(1 : 14.0	(1 : 3.36	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
258	S036a	21F27	R上	2	壇	C3c	口～A'	1/4	(1 : 15.0	(1 : 15.36	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
259	S036b	21F2	R上	2	壇	C4b	口～A'	1/12	(1 : 17.1	(1 : 3.36	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
260	S036b	21E32	R上	2	壇	C5b	口～A'	1/10	(1 : 14.0	(1 : 11.36	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
261	S036a	21E32	R上	2	壇	G	口	1/2	(1 : 12.0	(1 : 12.36	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
262	R1	13C13	8	0	甕	体	—	—	(1 : 1.6	(1 : 1.6	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
263	R1	13C13	8	1	甕	体	—	—	(1 : 1.6	(1 : 1.6	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
264	R1	13C27	8	1	甕	体	—	—	(1 : 1.6	(1 : 1.6	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
265	R1	13C22	8	1	甕	G	口	—	(1 : 1.6	(1 : 1.6	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
266	R1	13C28	8	2	甕	A	体	—	(1 : 1.6	(1 : 1.6	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
267	R1	13C22	8	2	甕	A	体	—	(1 : 1.6	(1 : 1.6	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
268	R1	13C13	8	2	甕	C2b	口～A'	1/10	(1 : 14.0	(1 : 3.36	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
269	R1	13C22	8	2	甕	C2b	口～A'	1/18	(1 : 21.0	(1 : 6.36	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)
270	R1	13C22	8	2	甕	A	体	—	(1 : 6.4	(1 : 6.4	なし	白	白	内: 染	外: 染	外: 染	内: 灰	(国: 集丸)



番号	通名	タリツル	層位	区分	断面	分類	輪郭	底形	内径	外径	高さ	形状	付物		参考		
													内	外	参考		
297	—	18F13	II	2	甕	A	口	外：直、内：斜	1.8	1.14.0	11 : 5.36	小：直腹直内角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.3.30	輪形底	
298	—	18F14	IIa	2	甕	A	口	外：直、内：斜	1.9	1.14.0	11 : 4.36	なし：直角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.3.30	輪形底	
299	—	17F11	II	2	甕	A7	口～脚	外：直、内：斜	1.6	1.21.0	11 : 8.36	小：直腹直内角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.3.30	輪形底	
300	—	18F13	IIa	2	甕	A	口～脚	外：直、内：斜	1.7	1.14.0	11 : 8.36	小：直腹直内角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.3.30	輪形底	
301	—	18G5	IIa	2	甕	A	口	外：直、内：斜	1.0	1.10	11 : 1.64	11 : 4.36	なし：直	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.3.30	輪形底
302	—	18F13	IIa	2	甕	A	口	外：直、内：斜	1.2	1.22.0	11 : 3.36	小：直腹直内角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	
303	—	18F13	IIa	2	甕	A	口	外：直、内：斜	1.0	1.10	11 : 20.4	11 : 4.36	なし：直角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底
304	—	18H25	I	2	甕	A	口～脚	外：直、内：斜	1.8	1.18	11 : 19.6	11 : 6.36	大：直腹直内角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底
305	—	18H16	IIb	2	甕	A	口	—	—	—	—	なし：直	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	
306	—	18G4	II	2	甕	A	口	—	—	—	—	なし：直	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	
307	—	18F15	IIb	2	甕	A	口	外：直、内：斜	1.9	1.18.0	11 : 4.36	なし：直角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	
308	—	20F16	IIa	2	甕	A	口	外：直、内：斜	1.9	1.15.8	11 : 4.36	なし：直角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	
309	—	18F10	IIa	2	甕	A	口	外：直、内：斜	1.5	—	—	なし：直	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	
310	—	18F23	IIa	2	甕	A	口～脚	外：直、内：斜	1.0	1.10	11 : 18.4	11 : 1.36	なし：直	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底
311	—	18F4	II	2	甕	A	口	外：直、内：斜	1.2	1.12	11 : 15.4	11 : 3.36	なし：直	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底
312	—	18F13	IIa	2	甕	A	口	外：直、内：斜	1.3	1.13	11 : 17.0	11 : 2.36	小：直腹直内角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底
313	—	18F14	IIa	2	甕	A5	口～脚	外：直、内：斜	1.7	1.17.0	11 : 5.36	小：直腹直内角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	
314	—	18F17	IIa	2	甕	A9	口	外：直、内：斜	1.5	1.11.6	11 : 7.36	中：直	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	
315	—	20F11	IIb	2	甕	A9	口	—	—	—	—	大：直	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	
316	—	21F15	地上	2	甕	A	体	—	—	—	—	なし：直角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	
317	—	20F16	IIb	2	甕	A	体	—	—	—	—	なし：直角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	
318	—	18G7	IIb	2	甕	A	口～脚	外：直、内：斜	1.0	—	—	なし：直角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	
319	—	18H11・16	IIa	2	甕	A	口	外：直、内：斜	1.0	—	—	なし：直角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	
320	—	18L3	II	2	甕	A	体	—	—	—	—	なし：直角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	
321	—	18S7・16	IIa	2	甕	A3	C7 体	外：直、内：斜	1.0	1.10	11 : 28.6	11 : 4.36	小：直腹直内角部	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底
322	—	18L20	I	2	甕	D1	口	外：直、内：斜	1.36	1.18.0	11 : 7.36	中：直	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	
323	—	18F18	IIa	2	甕	D2	口	外：直、内：斜	1.8	1.18	11 : 2.36	なし：直	内：直、外：直	外：直、内：斜	1.74.1.2.20	輪形底	

番号	通名	タリット	層位	区分	断面	分類	形状	底形	底径	高さ	底径/高さ(底径)	底面	外見	色	質	付跡	内面		底面		備考	
																	内:底	外:底	内:底	外:底		
324	—	2-323	地上	2	甕	G2	口	1/18	1.1-14.4	13 : 2.36	小・丸	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
325	—	180115	Bn	2	甕	D2	口	1/18~1/7	1.1-15.6	13 : 16.26	な・丸・平底(印)	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
326	—	180116	Bn	2	甕	D2	口	1/18~1/5	1.1-15.9	13 : 8.36	小・丸	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
327	—	1-6120	B	2	甕	D2	口	1/18~1/6	1.1-14.5	13 : 17.36	小・丸・平底(印)	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
328	—	1-60512・13	地上	2	甕	C2b	口	1/18~1/6	1.1-17.0	13 : 7.36	中・丸・平底	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
329	—	2-3819	地上	2	甕	C2b	口	1/18~1/6	1.1-15.0	13 : 7.36	な・丸・平底	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
330	—	1-611・6	Bn	2	甕	C2b	口	1/18~1/3	1.1-16.0	13 : 21.26	小・丸・平底(乳角)	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
331	—	1-711・7	1	甕	C2b	口	1/18~1/4	1.1-17.5	13 : 11.36	な・丸・平底(乳角)	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—		
332	—	1-610・10	Bn	2	甕	C2c	口	1/18~1/3	1.1-16.0	13 : 7.36	な・丸・平底(乳角)	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
333	—	1-60325	カクタノ	2	甕	C2c	口	1/18~1/3	1.1-15.0	13 : 5.36	な・丸・平底(乳角)	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
334	—	1-7112	B	2	甕	C2b	口	1/15	1.1-14.0	13 : 2.36	小・丸・平底	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
335	—	1-60115・6・11	Bn	2	甕	C2b	口	1/18~1/2	1.1-17.0	13 : 16.36	小・丸・平底	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	(印:上部)	
336	—	1-604・8	B	2	甕	C3d	口	1/18~1/3	1.1-16.0	13 : 10.0	13 : 2.36	な・丸・平底	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—
337	—	1-611・2	Bn	2	甕	C2b	口	1/18~1/2	1.1-15.8	13 : 32.26	な・丸・平底(乳角)	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
338	—	1-7115	1	2	甕	C2b	口	1/18~1/6	1.1-20.0	13 : 2.36	な・丸・平底	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
339	—	1-7116	B	2	甕	C2b	口	1/18~1/4	1.1-18.0	13 : 1.36	な・丸・平底(乳角)	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
340	—	2-0211	Bn	2	甕	C3d	口	1/18~1/5	1.1-15.6	13 : 7.36	な・丸・平底	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
341	—	1-7830	カクタノ	2	甕	C	口	1/10	1.1-18.0	13 : 2.36	な・丸・平底(乳角)	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
342	—	1-6101	Bn	2	甕	C2b	口	1/18~1/6	1.1-15.7	13 : 8.36	な・丸・平底(乳角)	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
343	—	1-7175	Bn	2	甕	C2b	口	1/18~1/6	1.1-18.0	13 : 1.36	な・丸・平底	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
344	—	1-60K16・21・22	B	2	甕	C2b	口	1/18~1/6	1.1-15.8	13 : 9.36	な・丸・平底	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
345	—	2-0261	Bn	2	甕	C4a	口	1/18~1/6	1.1-18.0	13 : 5.36	な・丸・平底	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
346	—	1-80116	Bn	2	甕	C5	口	1/18~1/6	1.1-18.0	13 : 9.36	な・丸・平底(印)	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
347	—	1-4724	Bn	2	甕	C5	口	1/18~1/6	1.1-12.0	13 : 21.26	大・丸・平底	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
348	—	1-6321	Bn	2	甕	C3d	口	1/18~1/6	1.1-10.0	13 : 4.36	大・丸・平底	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
349	—	1-6458	Bn	2	甕	C2b	口	1/18~1/7	1.1-12.4	13 : 5.36	大・丸・平底	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	
350	—	1-7177	I	3	甕	F	口	1/10	1.1-11.0	13 : 17.36	中・丸・平底(腹大)	内:底	外:底	白	砂	漆付	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	内:ヨコナラ	外:ヨコナラ	—	

弥生～古墳時代土器觀察表 (15)

## 発生～古墳時代土器翻訳表(16)

番号	通称名	器形	層位	K分	断面	分類	断面	断面	断面	色	施用	施用	外觀	備考	
379	—	130125	カクラン	3 黒	B20	[1~4*	1/7	[1 : 17.0	[1 : 5.36	なし	無	内：明治窯 (SYK) 外：明治窯 (SYK)	口：ヨコナフ 体：スラブ	口：ヨコナフ 体：スラブ	
380	—	95514K	灰土	3 黒	D11	[1~4*	1/10	[1 : 14.6	[1 : 4.76	無	内：黒 外：無	内：ヨコナフ 外：ヨコナフ (ヘタラテ)	口：ヨコナフ 体：スラブ	口：ヨコナフ 体：スラブ	
381	—	16613	日	3 黒	H20	[1~4*	1/4	[1 : 14.9	[1 : 10.36	大	横や斜め 体～底：斜面 底～足：灰白	口：横 体～底：斜面 底～足：灰白	口：ヨコナフ 体：ハサク 底：ナラ	口：ヨコナフ 体：ハサク 底：ナラ	
382	—	23025	地上	3 灰	H	[1~4*	1/5	[1 : 12.0	[1 : 3.36	小	横や斜め 内：灰 外：灰	内：灰 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
383	—	18625	日	3 灰	B	[1~4*	1/3	[1 : 13.5	[1 : 14.36	小	横 内：灰 外：灰	内：横 外：横	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
384	—	17511	日	3 灰	A	[1~4*	1/2	[1 : 18.0	[1 : 3.26	大	横 内：灰 外：灰	内：横 外：横	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
385	—	1717	1	3 黑	A	[1	1/10	[1 : 12.5	[1 : 4.36	大	横或直 内：灰 外：灰	内：横 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
386	—	1986	日	3 黑	B	[1~4*	1/4	[1 : 14.2	[1 : 17.36	小	横や斜め 内：灰 外：灰	内：横 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
387	—	—	灰土	3 灰	D	[1~4*	4/5	[1 : 8.0	[1 : 7.36	なし	横或直 内：灰 外：横	内：横 外：横	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
388	—	186120	日	3 灰	D	体	1/5	なし	なし	なし	横或直 内：灰 外：横	内：横 外：横	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
389	—	18615・19	日	3 灰	C	6*	1/2	なし	なし	無	内：横或直 外：灰	内：横 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
390	—	12217	■■■	3 灰	H	A	[1~4*	1/2	[1 : 11.6	[1 : 8.26	大	横或直 内：灰 外：灰	内：横 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ
391	—	17179	1	3 灰	H	D1	[1~4*	1/12	[1 : 16.0	[1 : 3.26	中	横 内：灰 外：灰	内：横或直 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ
392	—	1778	日	3 灰	H	D1	[1~4*	1/2	[1 : 13.5	[1 : 16.26	大	横 内：灰 外：灰	内：横或直 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ
393	—	1981	日	3 灰	H	D1	[1~4*	1/4	[1 : 12.0	[1 : 3.26	小	横 内：灰 外：灰	内：横 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ
394	—	1986	日	3 灰	D2	[1~4*	1/12	[1 : 15.0	[1 : 4.36	小	横 内：灰 外：灰	内：横 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
395	—	1801・6	日	3 灰	H	[1~4*	1/4	[1 : 11.5	[1 : 15.30	中	横や斜め 内：灰 外：灰	内：横や斜め 内：灰 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
396	—	186120	日	3 灰	D3	[1~4*	1/2	[1 : 12.5	[1 : 29.36	小	横や斜め 内：灰 外：灰	内：横や斜め 内：灰 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
397	—	181010	日	3 灰	D2	[1~4*	1/4	[1 : 10.5	[1 : 2.26	中	横や斜め 内：灰 外：灰	内：横や斜め 内：灰 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
398	—	17174	日	3 灰	E1	[1~4*	1/2	[1 : 13.5	[1 : 8.26	大	横或直 内：灰 外：灰	内：横或直 内：灰 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
399	—	1986	日	3 灰	E1	[1~4*	1/5	[1 : 13.3	[1 : 7.36	なし	横や斜め 内：灰 外：灰	内：横や斜め 内：灰 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
400	—	188119	日	3 灰	E2	[1~4*	1/2	[1 : 14.2	[1 : 4.36	なし	横や斜め 内：灰 外：灰	内：横 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
401	—	1626・14	日	3 灰	E2	[1~4*	1/3	[1 : 13.9	[1 : 5.36	小	横や斜め 内：灰 外：灰	内：横 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
402	—	11K5	■■■	3 灰	E1	[1~4*	1/20	[1 : 15.6	[1 : 2.26	中	横 内：灰 外：灰	内：横 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
403	—	11235	■■■	3 灰	E2	[1	1/20	[1 : 15.6	[1 : 2.26	なし	横或直 内：灰 外：灰	内：横或直 内：灰 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
404	—	1382	■■■	3 灰	E3	[1~4*	1/5	[1 : 16.6	[1 : 7.36	なし	横や斜め 内：灰 外：灰	内：横 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
405	—	1717	1	3 灰	E2	[1~4*	1/20	[1 : 16.0	[1 : 2.26	中	横や斜め 内：灰 外：灰	内：横 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	
406	—	1981	日	3 灰	E4	[1~4*	1/4	[1 : 16.0	[1 : 7.36	小	横や斜め 内：灰 外：灰	内：横 外：灰	口：ヨコナフ 体：ナラ	口：ヨコナフ 体：ナラ	

弥生～古墳時代土器觀察表 (17)

番号 No.	通称名	アリツドリ	原形	区分	測定	既存の標示(保存年)	測定年	既存物		付形容	色調	表面物	内面	外面	備考
								長(3.7) 幅(2.6)	高(4.6) 幅(4.5)				内: 黒 外: 黄褐色	内: 黒 外: 黄褐色	
1	「古小窓切目」	—	2	中形	直筒切目切	—	—	小: 黒白砂	—	なし	無文且つ鉢底	—	—	—	平行タガ子目
2	「古小窓切目」	—	2・2'	中形	直筒切目切	—	—	小: 黒 高: 4.6 幅: 4.5	内: 黒 外: 黄褐色	なし	ロクロナゲ	—	—	—	無規則
3	「古小窓切目」	—	2・2'	中形	直筒切目切	—	—	小: 黒 高: 3.3 幅: 2.9	内: 黒 外: 黄褐色	なし	無紋且つ鉢底	—	—	—	無規則
4	「古小窓切目」	—	2	中形	要	体	—	小: 黒白砂	内: 黒 外: 黄褐色	なし	無スラブ・鉢底	—	—	—	平行タガ子目
5	「古小窓切目」	—	2	中形	要	体	—	小: 黒 高: 3.0 幅: 2.9	内: 黒 外: 黄褐色	なし	ロクロナゲ	—	—	—	無規則
6	S01a	18721	—	平底	直筒切目切	13	1.7	小: 黒 高: 3.0 幅: 2.9	内: 黒 外: 黄褐色	なし	無スラブ・鉢底	—	—	—	無規則
7	S01e	17711	日	平底	直筒切目切	—	1/3	小: 黒 高: 3.0 幅: 2.9	内: 黒 外: 黄褐色	なし	ロクロナゲ	—	—	—	無規則
8	S01n	18722	—	平底	直筒切目切	—	—	小: 黒 高: 3.0 幅: 2.9	内: 黒 外: 黄褐色	なし	ロクロナゲ	—	—	—	無規則
10	S02	23111	底上	中形	直筒切目切	体	—	小: 黒 高: 3.0 幅: 2.9	内: 黒 外: 黄褐色	なし	ロクロナゲ	—	—	—	無規則
11	S03a	22220	クロ	平	直筒切目	13~45°	1/6	小: 黒 高: 6.2 幅: 5.5	内: 黒 外: 黄褐色	なし	ロクロナゲ	—	—	—	無規則
12	S06a	24619	—	平	小窓	底	5.7	小: 黒 高: 3.8 幅: 3.2	内: 黒 外: 黄褐色	なし	ロクロナゲ	—	—	—	無規則
13	—	21K11	底上	平底	直筒切目	—	—	大: 黒 小: 黒 高: 3.0 幅: 2.8	内: 黒 外: 黄褐色	なし	当て墨跡(青銅鏡)	—	—	—	無規則
14	—	16510	日	平底	直筒切目	13	1.36	小: 黒 高: 3.0 幅: 2.9	内: 黒 外: 黄褐色	なし	ロクロナゲ	—	—	—	無規則
15	—	19612	日n	平	小窓	13~45°	1/6	小: 黒 高: 5.4 幅: 5.0	内: 黒 外: 黄褐色	なし	ロクロナゲ	—	—	—	無規則
16	—	16615	日n	中形	直筒切目	—	—	小: 黒 高: 3.0 幅: 2.9	内: 黒 外: 黄褐色	なし	ヨコナゲ	—	—	—	無規則

## 石器觀察表

番号 No.	通称名	アリツドリ	解	位	寸法	形	大きさ (mm)	幅 (mm)	高 (mm)	底 (mm)	壁 (mm)	底 (mm)	壁 (mm)	底 (mm)	壁 (mm)	底 (mm)
國文1	S01a	1931	底上	直筒	不規則	鉢	47.15	31.25	10.70	23.60	1.84	無	—	—	骨出シリ	石器か?
國文2	S02	2065	18.1.16	直筒	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石器か?
國文3	—	20129	底	直筒	—	—	22.95	16.35	3.05	—	—	—	—	—	—	石器か?
國文4	—	19129	底a	直筒	—	—	43.10	41.15	8.05	11.10	1.01	ナメー	—	—	—	石器か?
國文5	—	13.11.2	直筒	直筒	—	—	4.00	4.50	0.93	11.33	4.97	—	—	—	—	石器か?
小標1	—	19017	底b	直筒	—	—	37.00	31.00	12.00	21.60	0.82	—	—	—	—	石器か?
小標2	—	2013	底上	直筒	—	—	74.80	36.10	20.25	60.80	—	—	—	—	—	石器か?

# 図 版

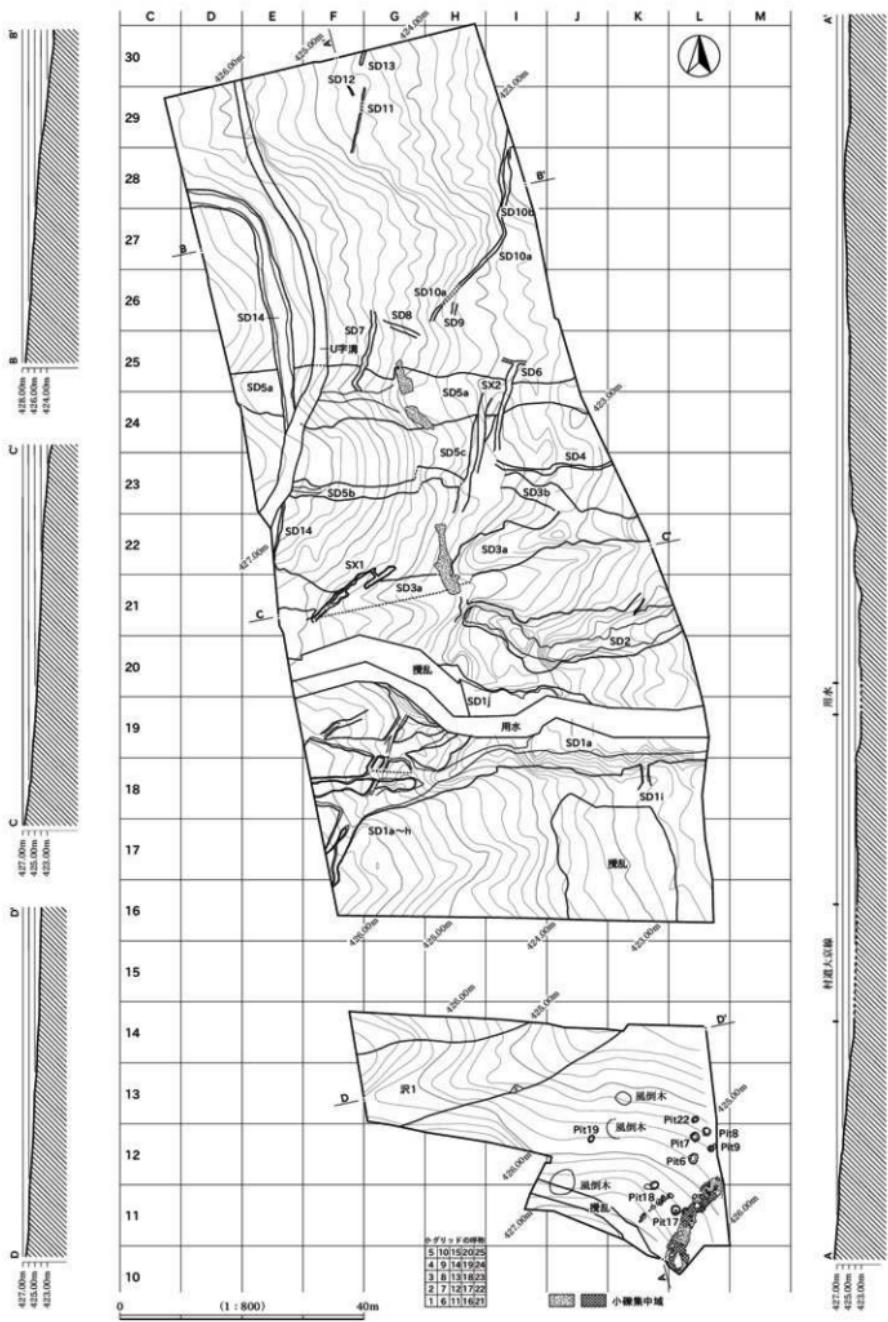
## 凡 例

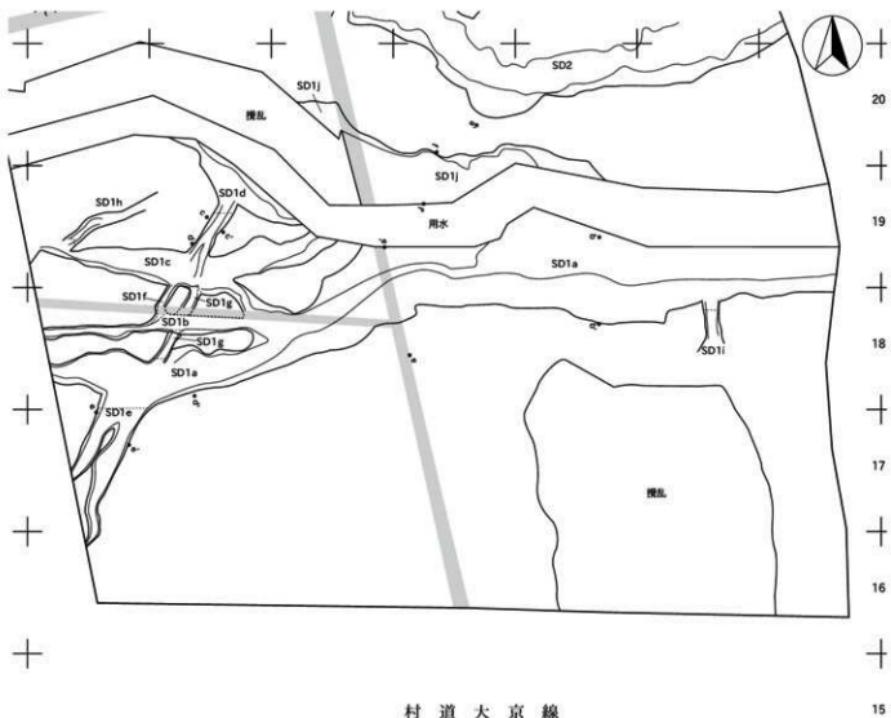
- 1 土器図版の網掛け凡例

■ 赤 彩

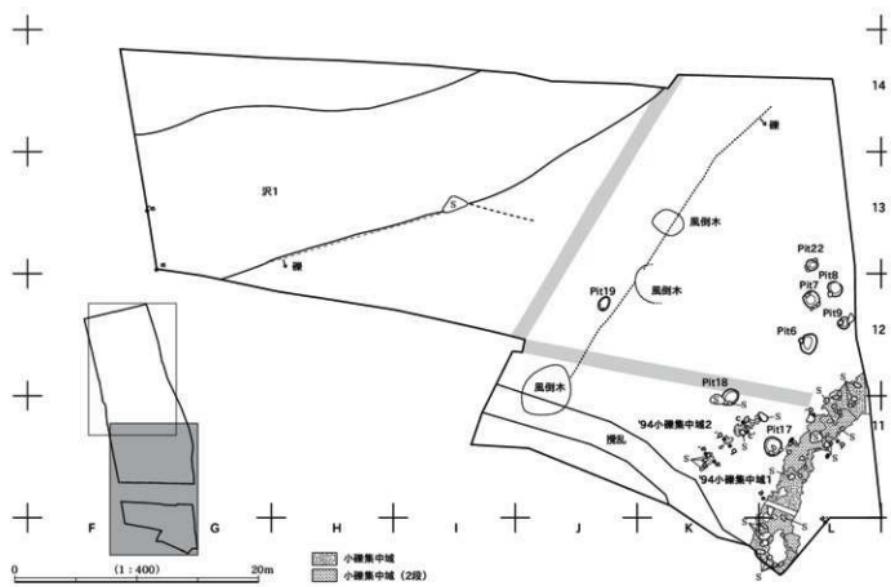
■ 黒色処理

- 2 須恵器の断面図は黒塗りした。
- 3 土器拓本は、断面図の左側に外面、右側に内面を配した。
- 4 須恵器・珠洲焼の拓本は、断面図の左側に内面、右側に外面を配した。



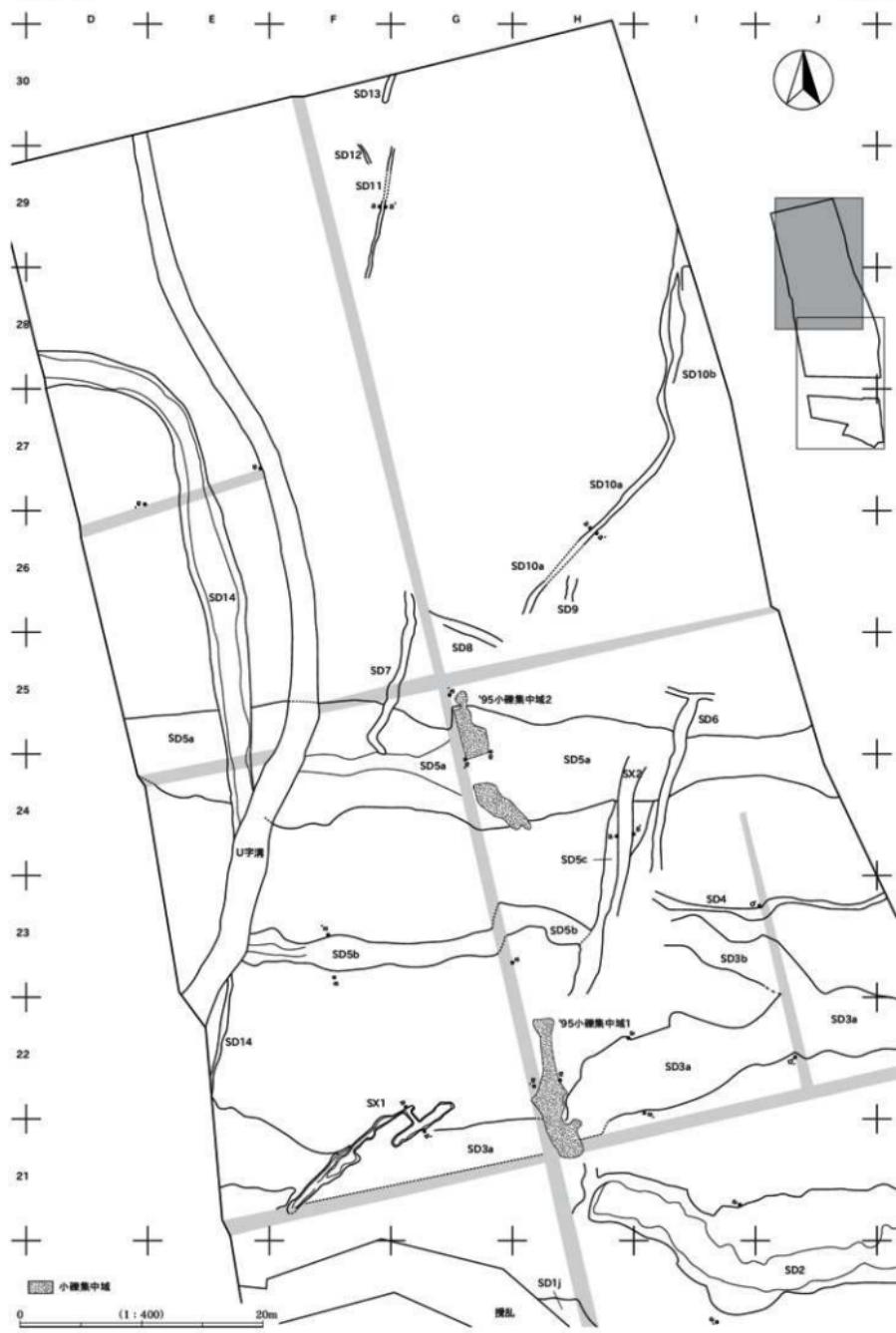


村道大京線



分割図(2)

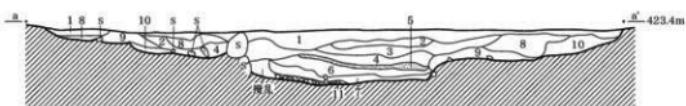
図版3





### 個別圖(2)

SD2



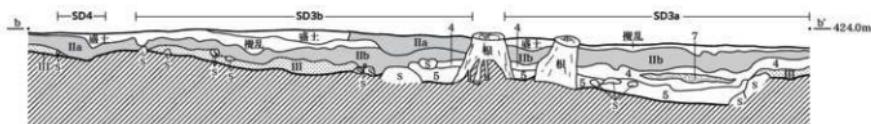
SD2	1周	黒褐色土。しまりや、粘性や多く。白色潤を少量含む。	7周	高色の砂礫。径10mm位の礫を60%程含む。
2周	黒褐色土。しまりや多く、粘性弱。白色潤を多量に含む。	8周	高色土。	
3周	黒褐色土。しまりや多く、粘性弱。白色潤を多量に含む。	9周	高色土。しまりや多く、粘性や多く。白色潤を少量含む。	
4周	黒褐色土。しまりや多く、粘性弱。白色潤を多量に含む。	10周	明高色土。しまりや多く。粗粒で(後2周)の礫を少含む。	
5周	明褐色土。粘性弱。難燃の樹木灰山灰土。	11周	100mm程の潤がびり重なっている。	
6周	褐色土。粘性弱。水分多く含む。			
7周				

(5層を指標に、その上を「灰上」、その下を「灰下」。7層は「砂」)

SD3a

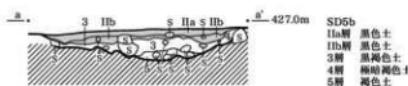


SD3a		
III層	明褐色土	しまり強。褐色土混入。地山漸移層。
I層	暗褐色土	しまり・粘性やや有。圓い。白色譚を少量含む。
		焼山火山灰を含む。(灰)
2層	黒色土	しまりやや有。粘性無。白色譚を含む。
3層	墨褐色土	しまり・粘性大。白色譚を含む。

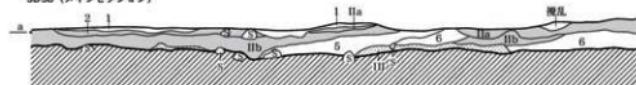


SD3a・SD3b・SD4  
 H1a 黒兩色 しまり、黏性やや有。白色澤を少量含む。  
 H1b 黒兩色 しまり、粘性やや有。白色澤を含む。  
 1番 黒い兩色 しまり強。粘性無。黑色澤が混じる。  
 4番 黒兩色 しまり、粘性強。白色澤を少量含む。  
 5番 黒土色 しまり強。粘性無。白色澤を多量含む。  
 7番 黑灰兩色 しまり、粘性強。黑色澤(水苔色)が混じる。

SD5b



SD5b (メインアクション)



ISSN 1470-8924



SD11 3' 424.9m



SD11  
1層 黒色土 しまり有、粘性やや有、地山の土を含む。

SD10a  
1層 黒色土 しまり：粘性無、旗山の小ブロックを含む

細胞生物学上、重要な「原生」

87



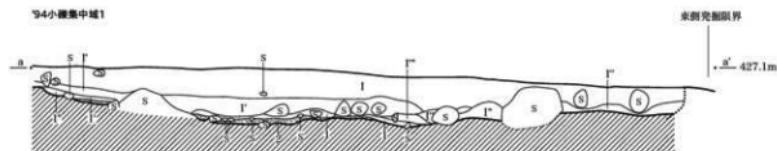
SX1	暗褐色砂質土	径30~50mmの礫が約90%混入。
1解	灰褐色砂質土	しまり、粘性やや有。
2解	暗褐色土	しまり無。粘性やや有。橙色土が混入。
3解	暗褐色土	しまり無。粘性やや有。橙色土が混入。
4解	黑褐色土	しまり、粘性やや有。
5解	暗褐色砂質土	しまり、粘性やや有。

ex

**SX2**  
 1層 径15~25mmの小砂利が敷き詰められたようになっている。  
 2層 調い褐色砂  
 3層 灰褐色砂質土  
 4層 黒褐色土 しまり無。粘性や有。

SD2 · SD3 · SD5      0      (1 : 80)      4m  
 SD10<sub>a</sub> · SD11 · SY1 · SY2      0      (1 : 40)      2m

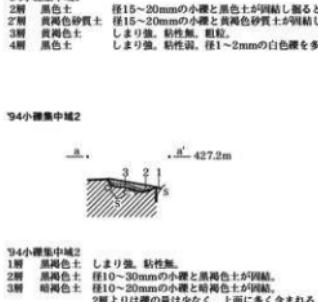
'94小裸集中域1



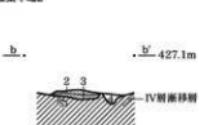
'94小裸集中域1



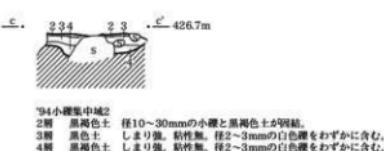
'94小裸集中域1



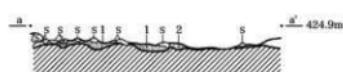
'94小裸集中域2



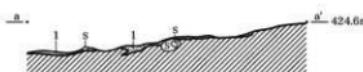
'94小裸集中域2



'95小裸集中域1



'95小裸集中域2



小裸集中域

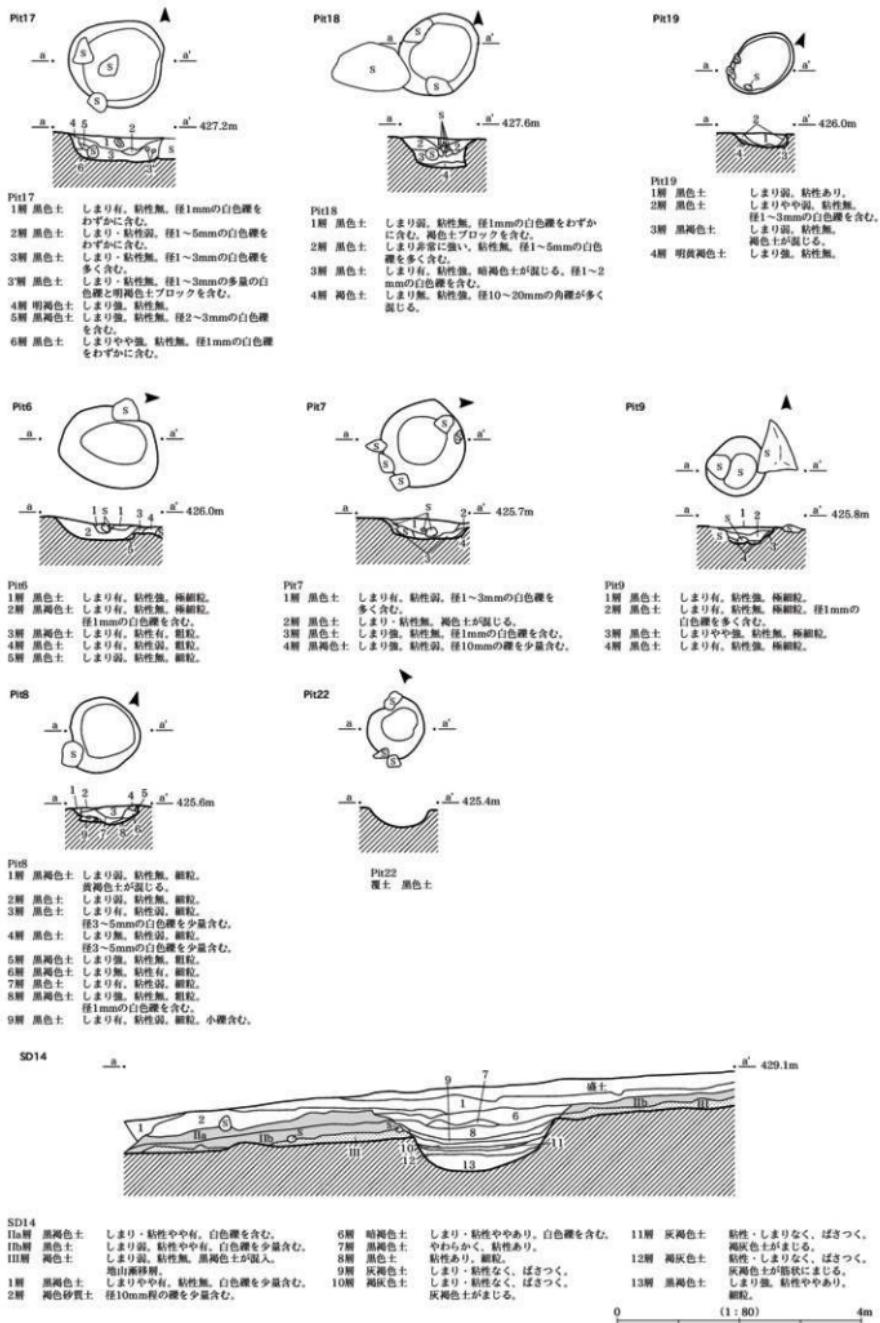
小裸集中域 (2段)

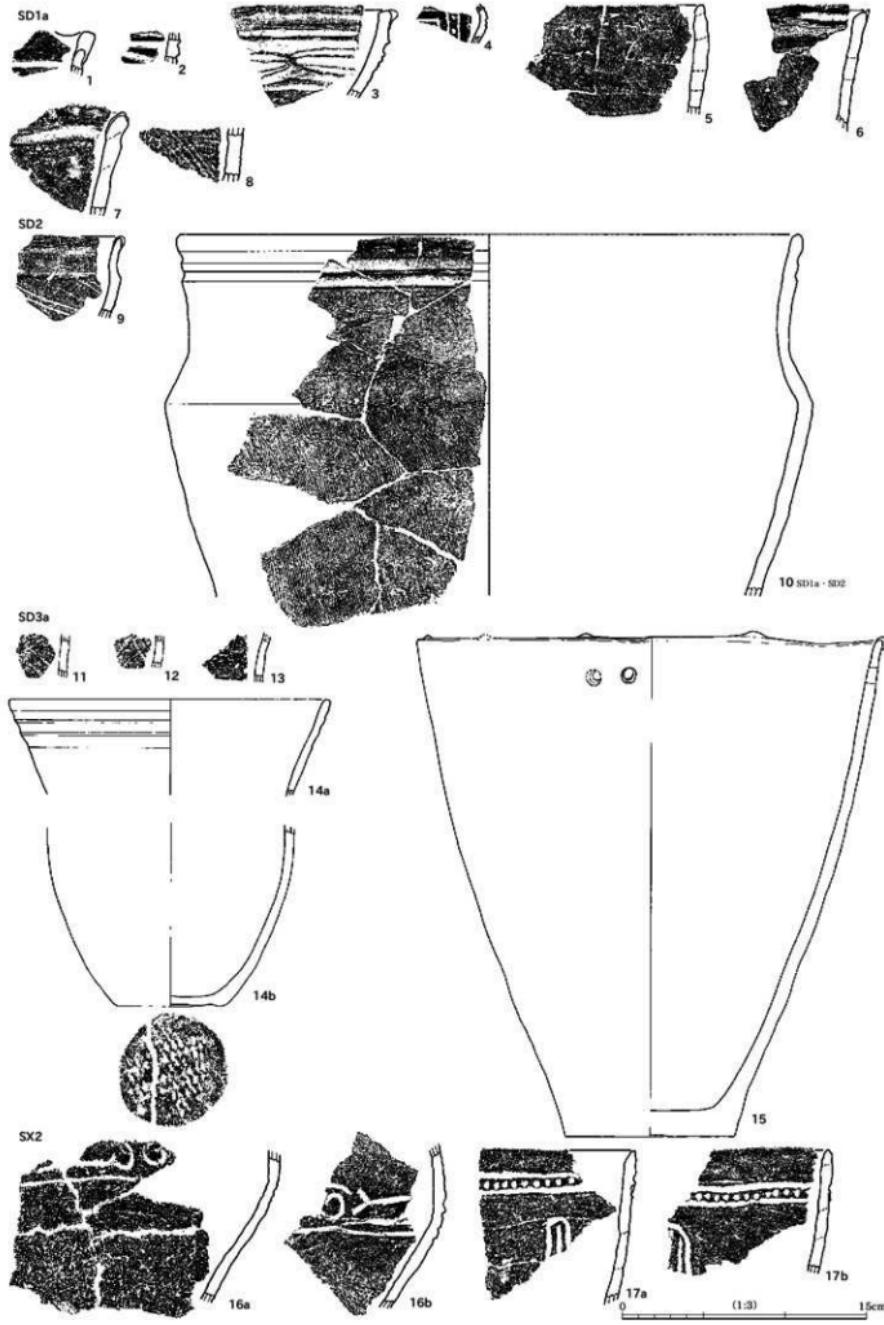
0

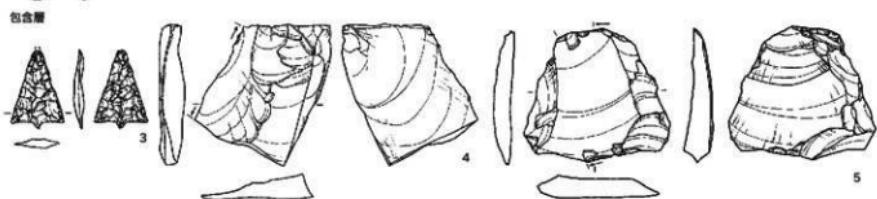
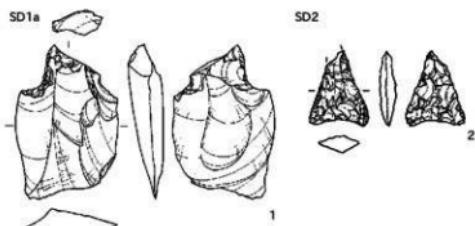
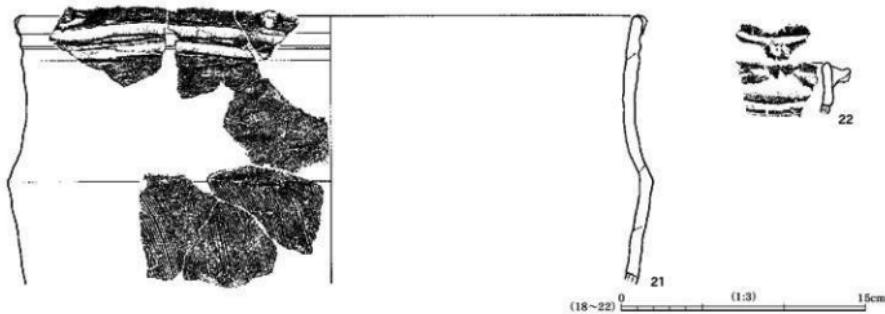
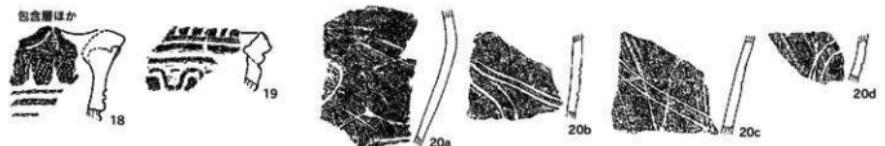
(1 : 40)

2m

個別図 (4)



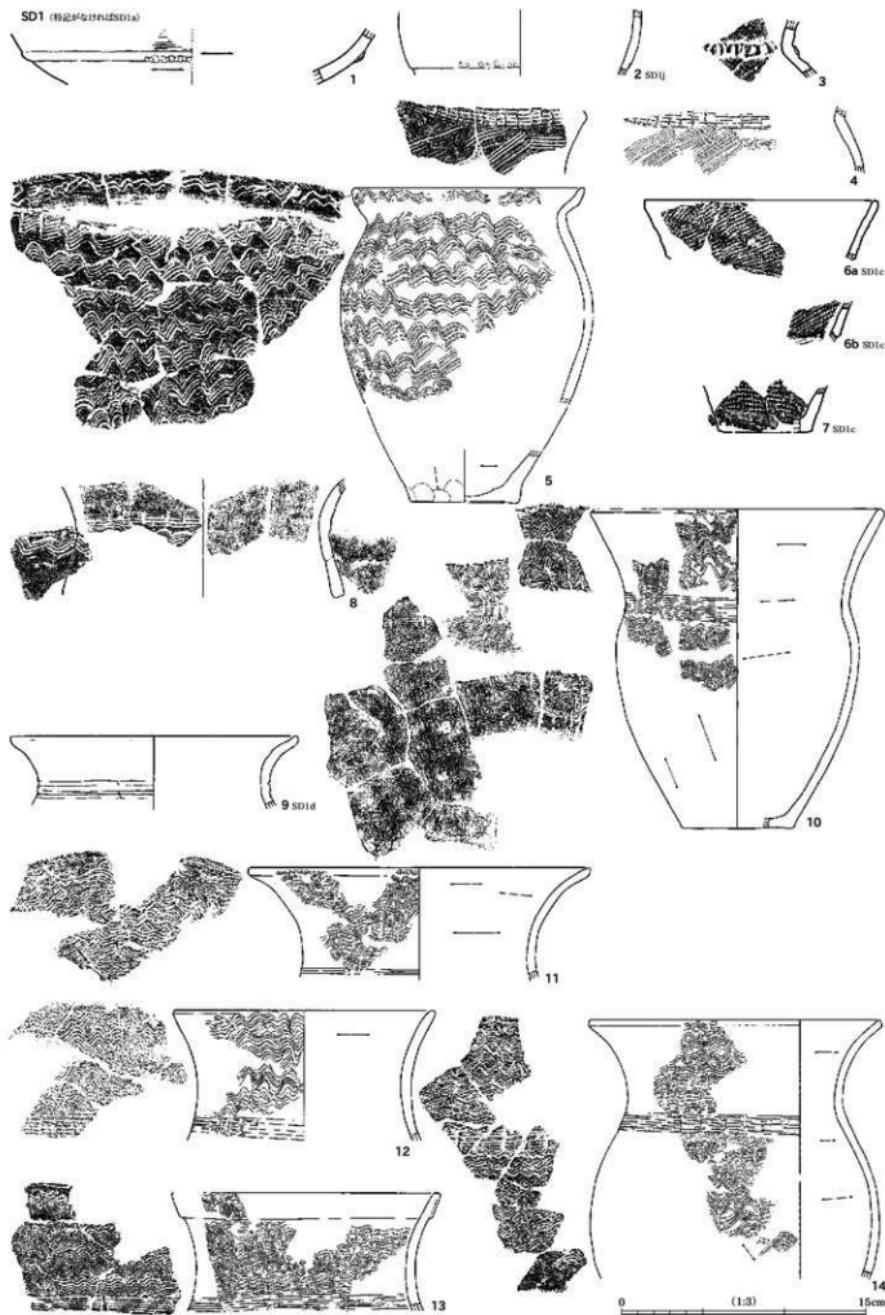


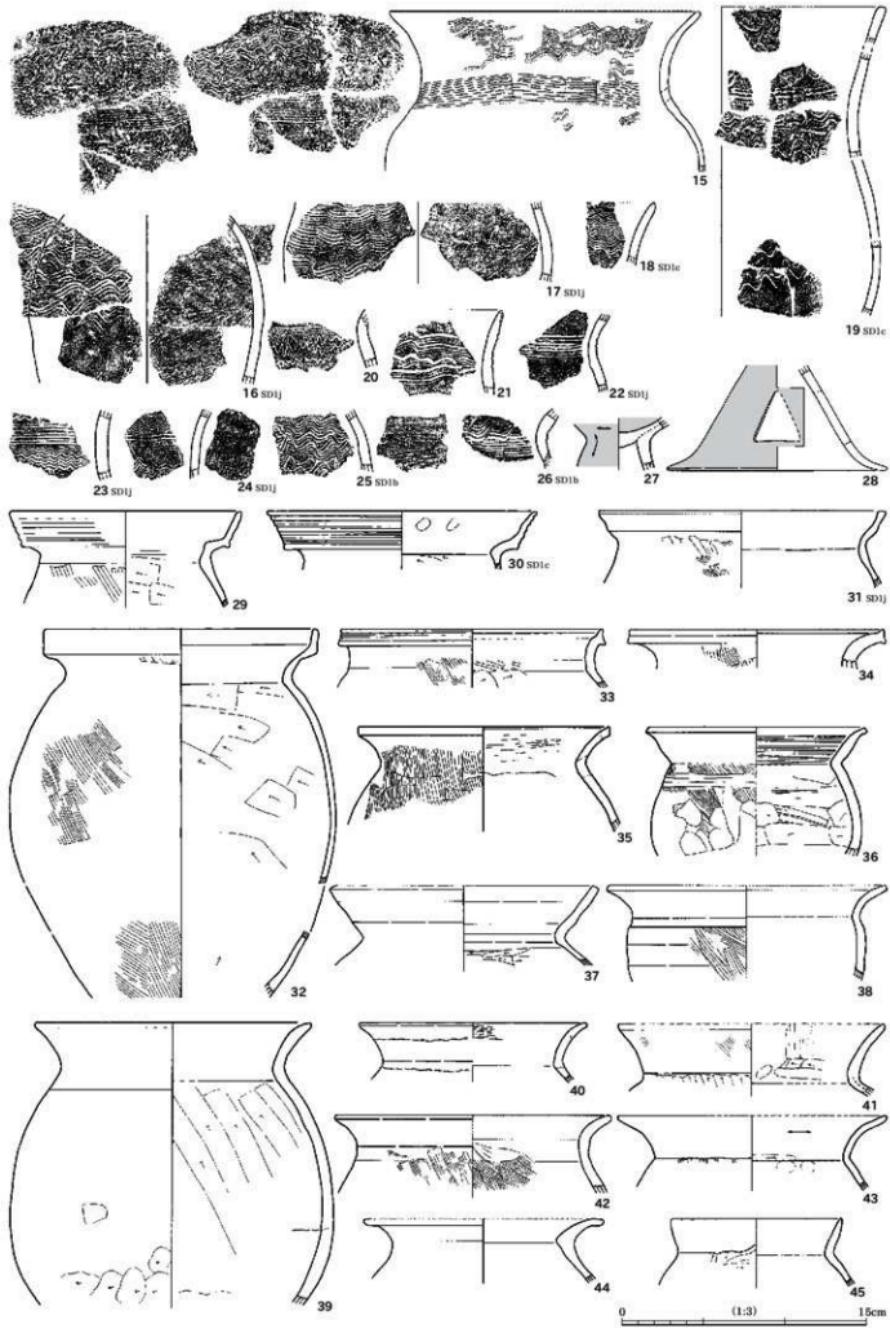


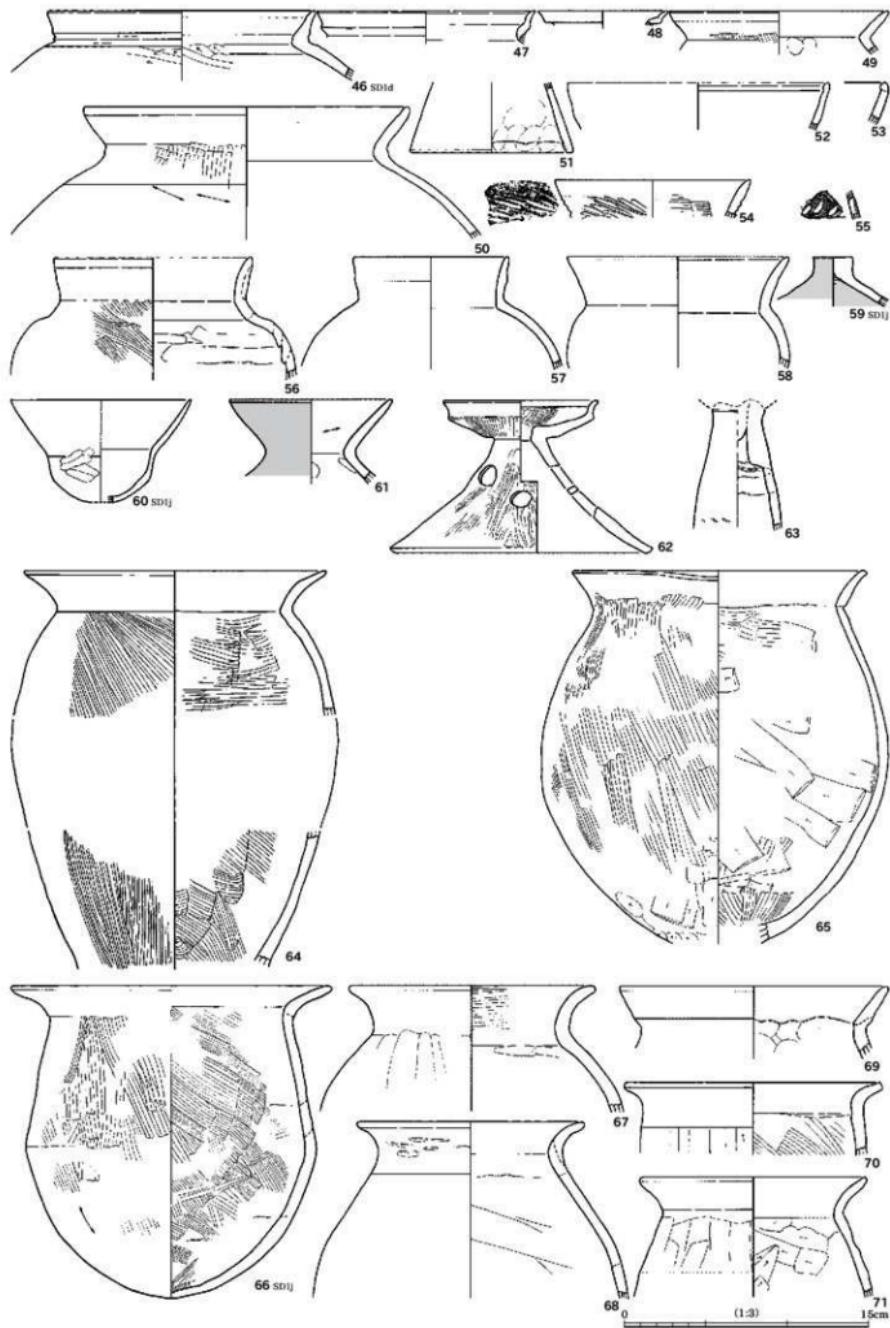
(1~5) 0 (2:3) 10cm

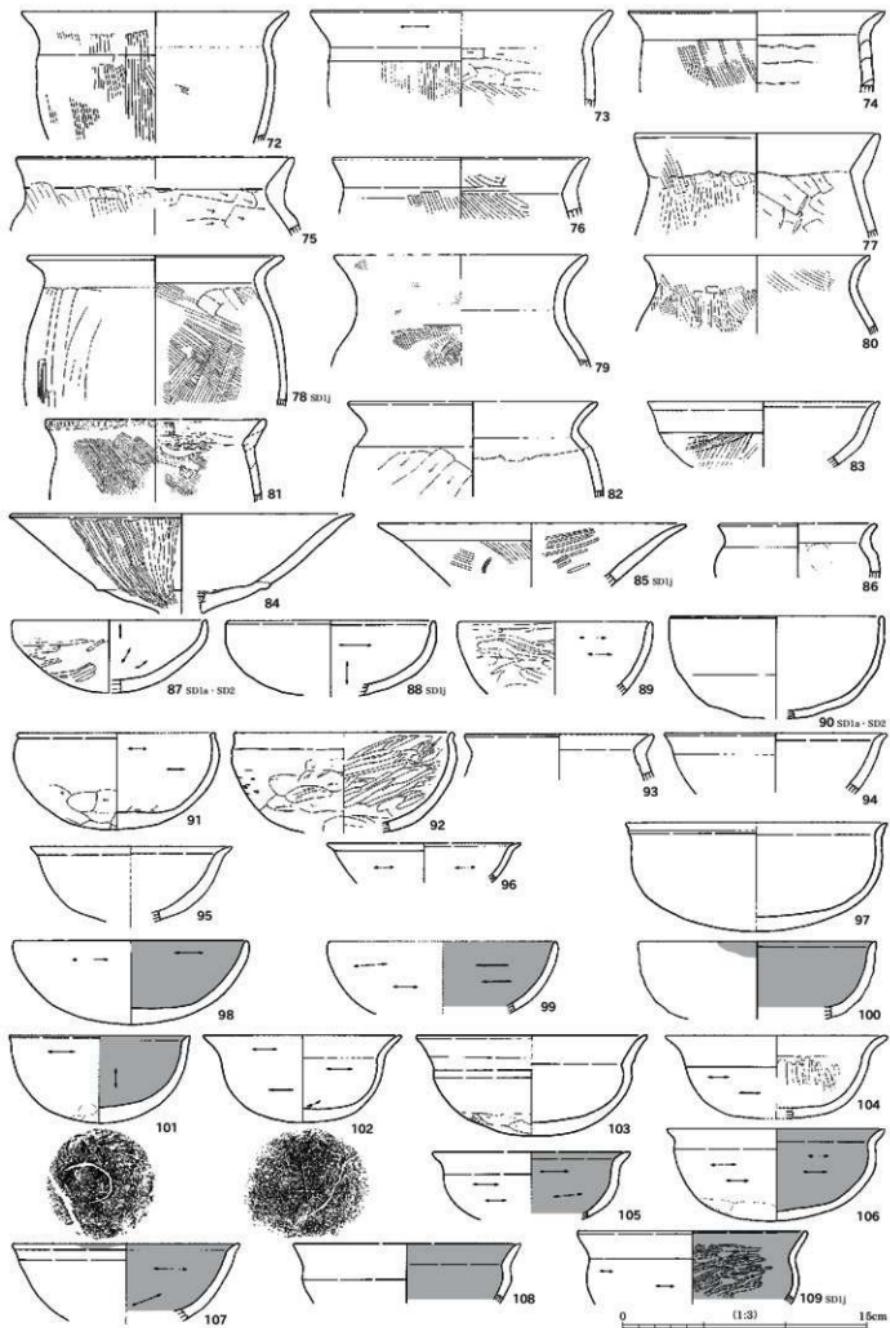
図版 10

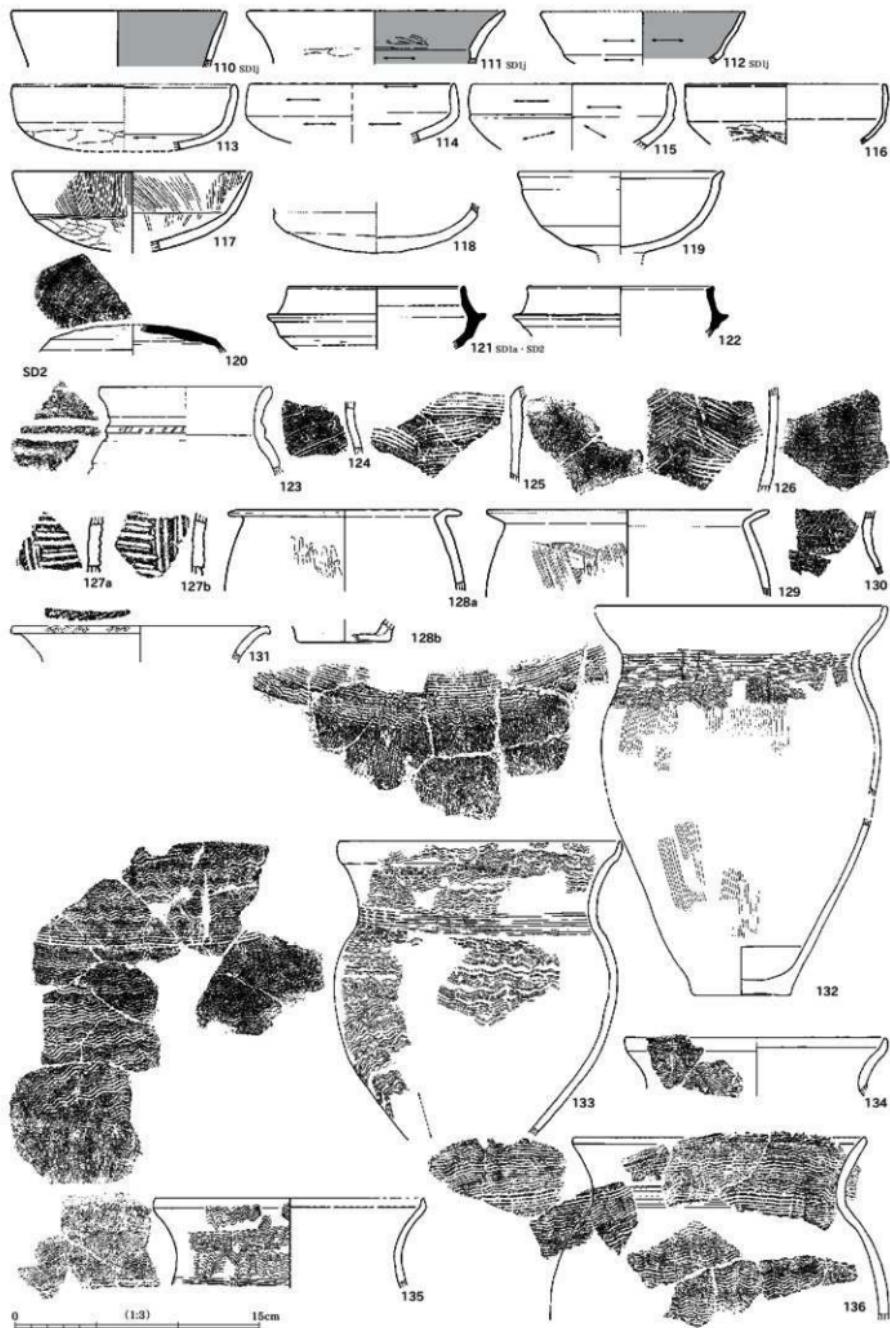
弥生～古代時代の遺物 (1) SD1

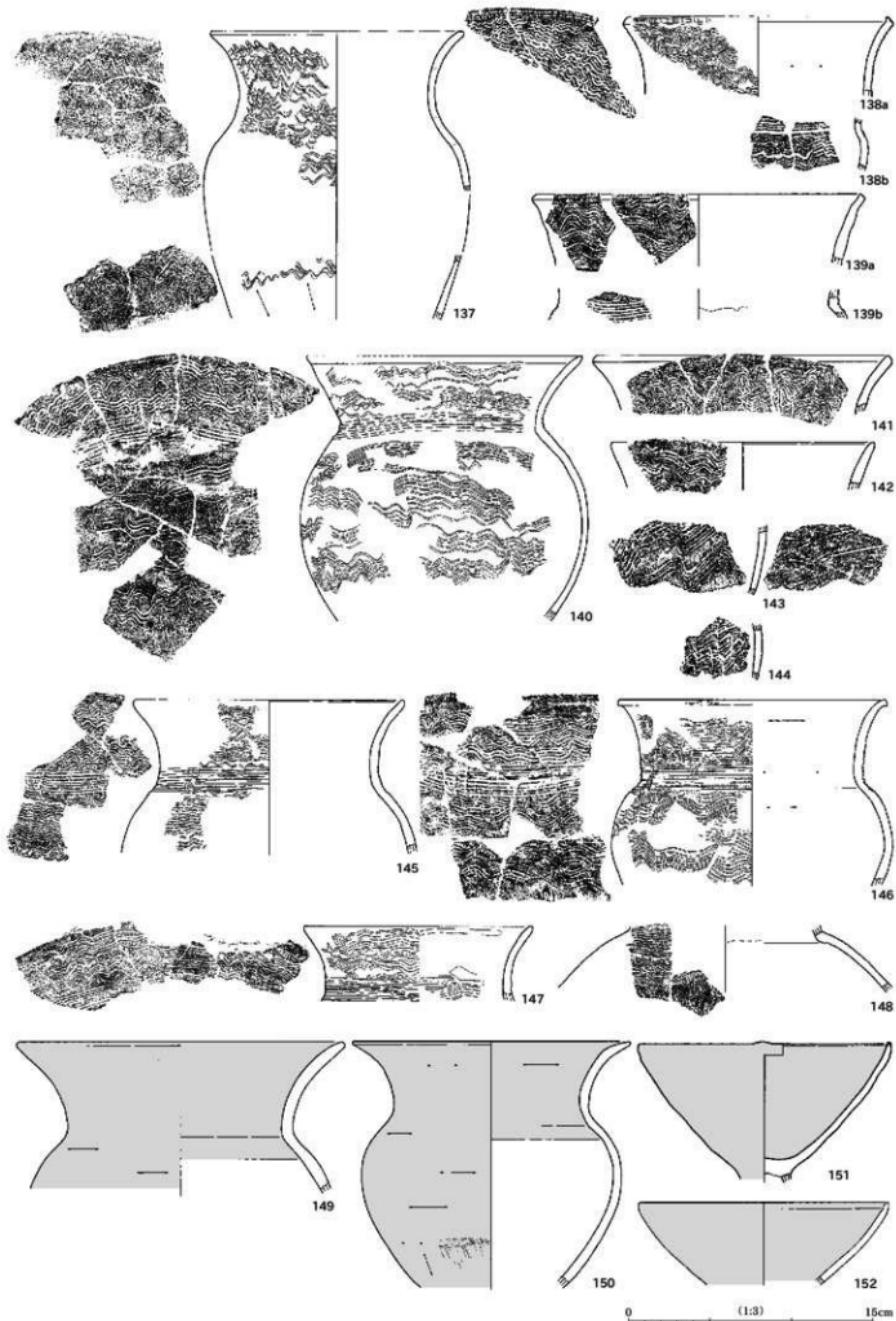


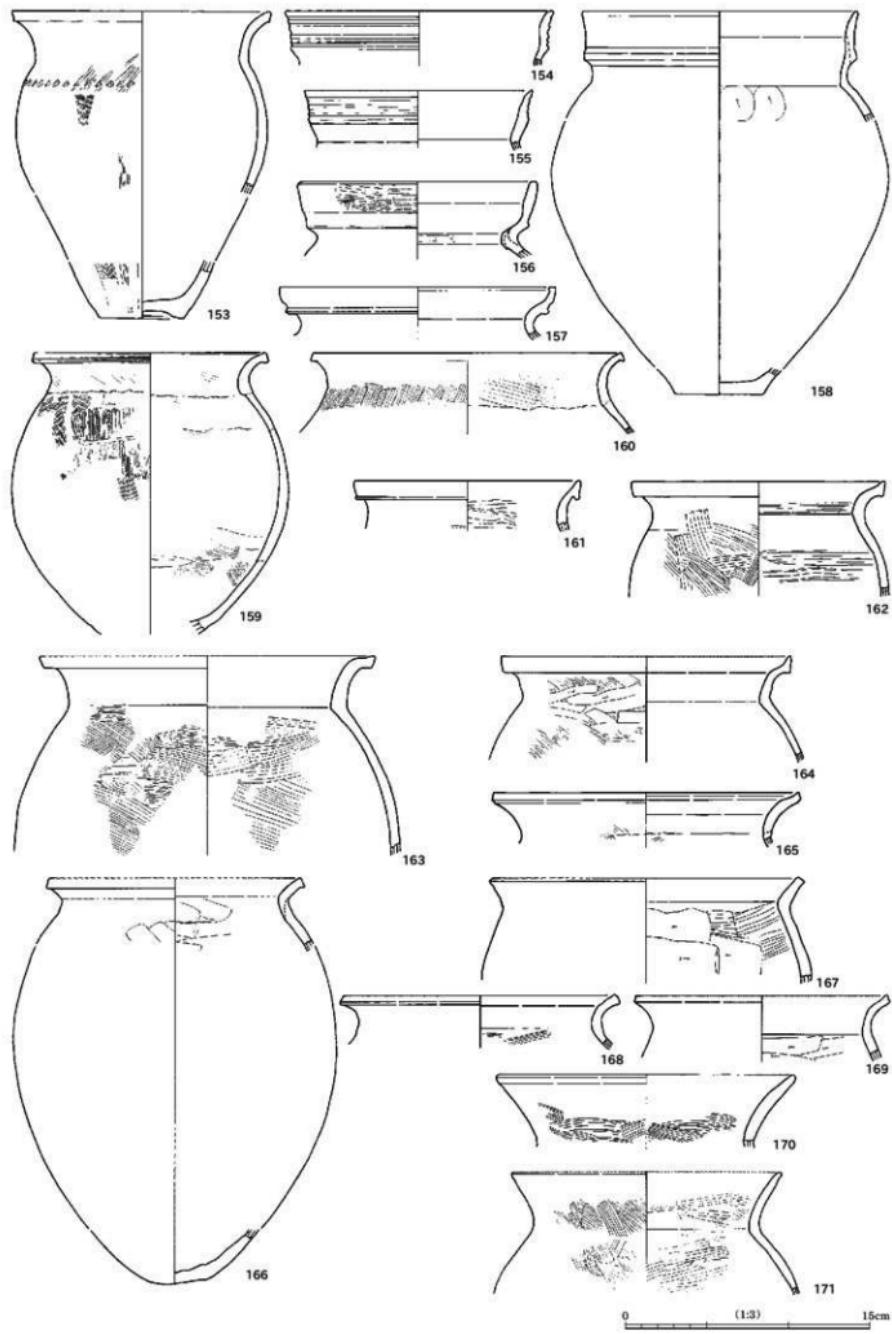


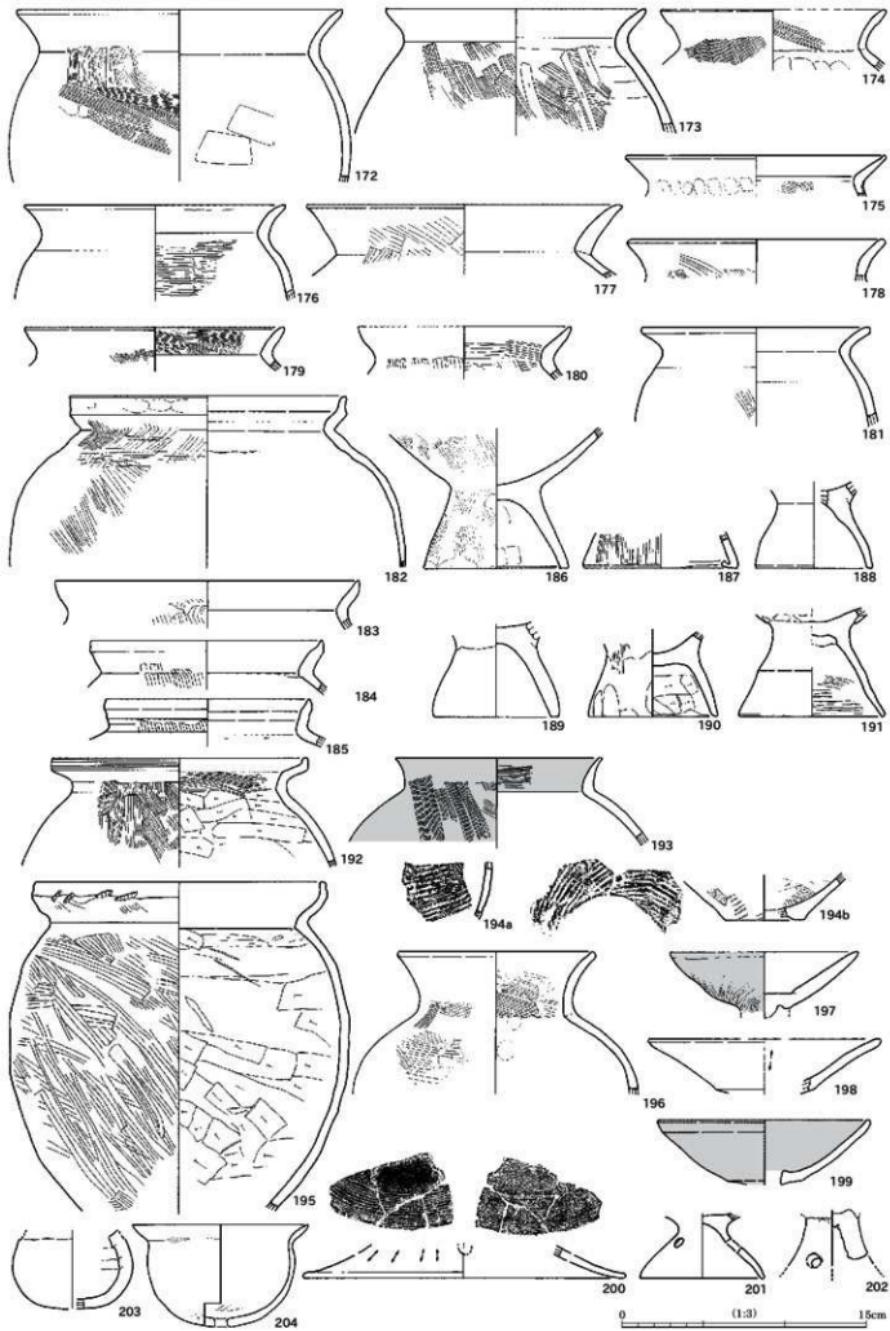


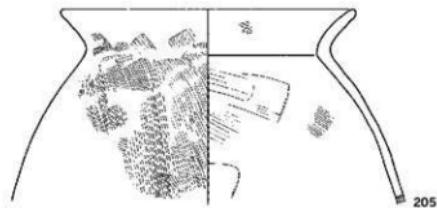




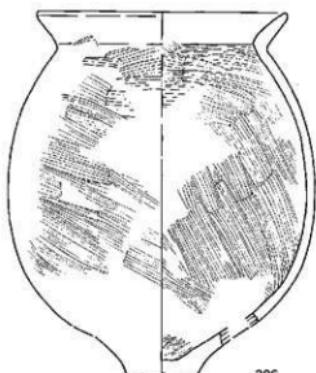




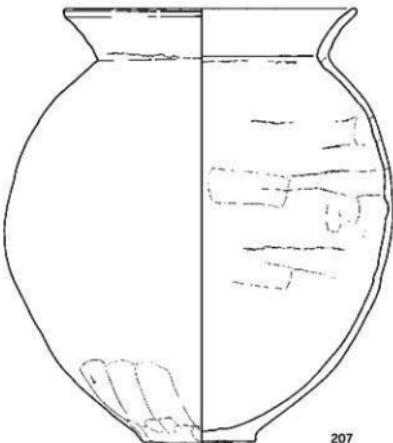




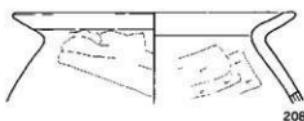
205



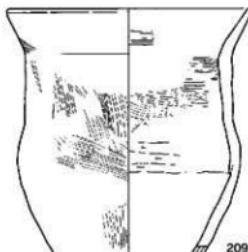
206



207



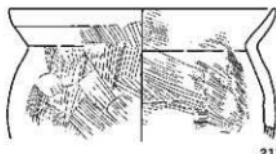
208



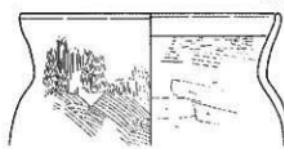
209



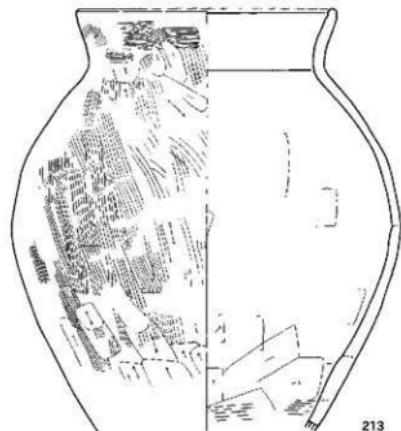
210



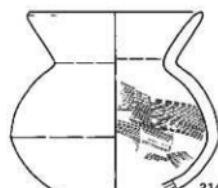
211



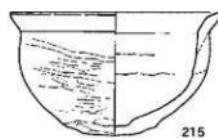
212



213



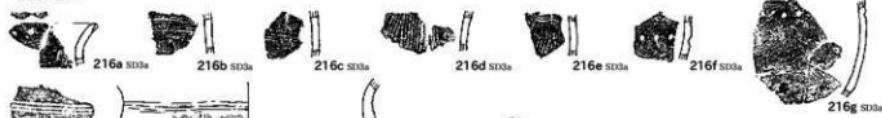
214



215

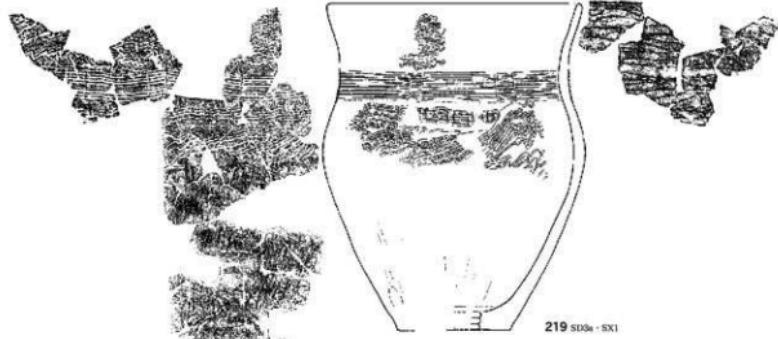
0 (1:3) 15cm

SD3・SX1

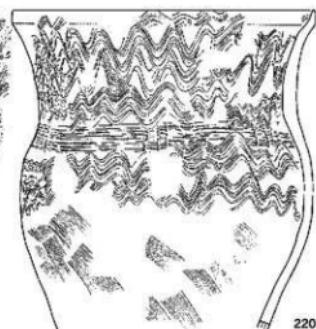


216g SD3a

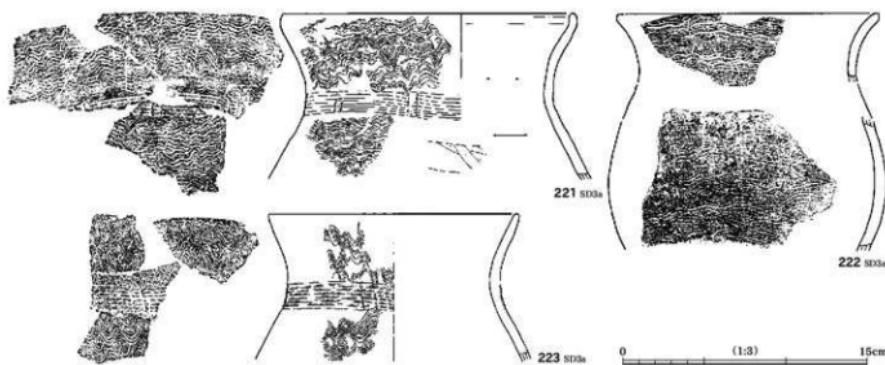
218 SX1



219 SD3a・SX1



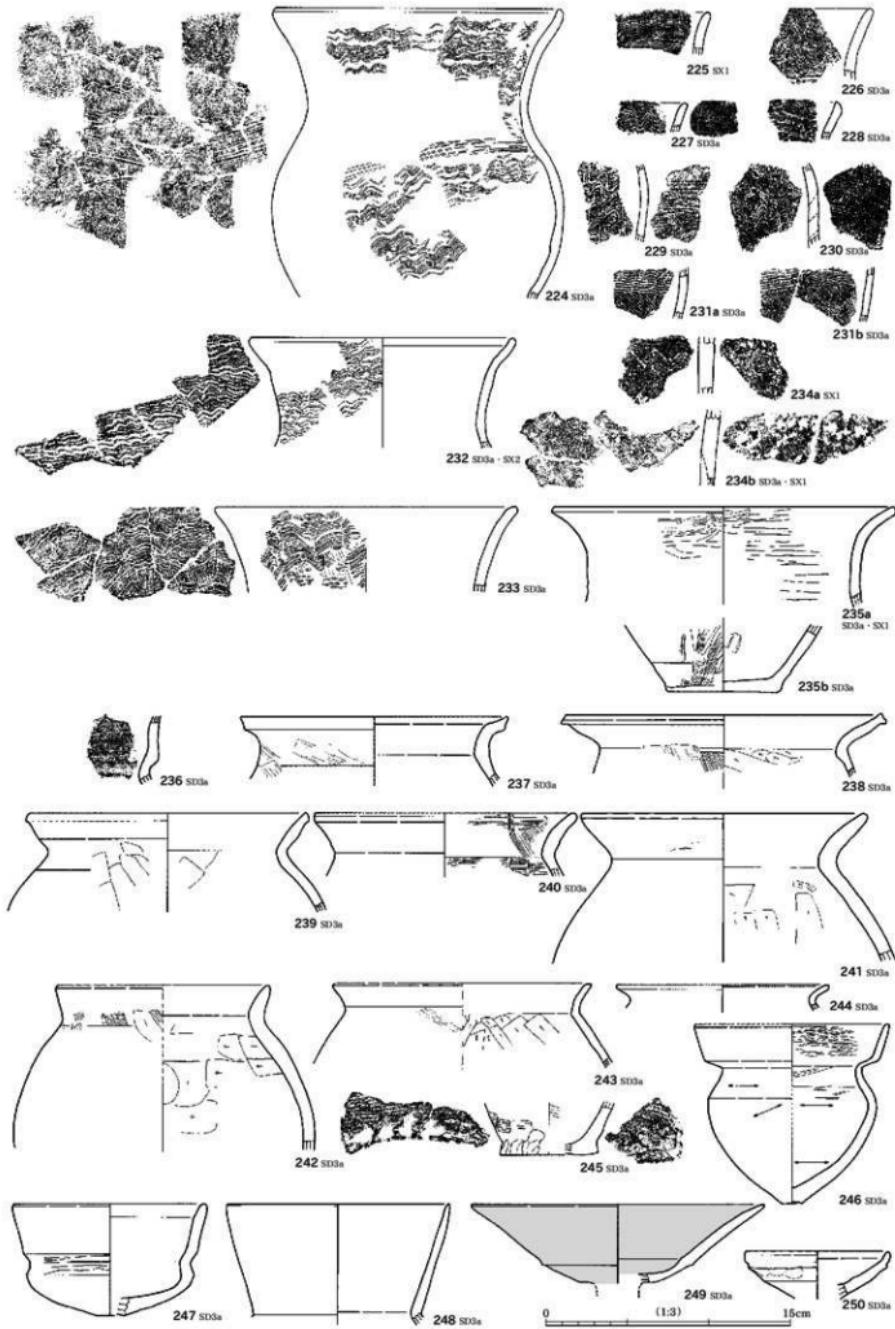
220 SD3a

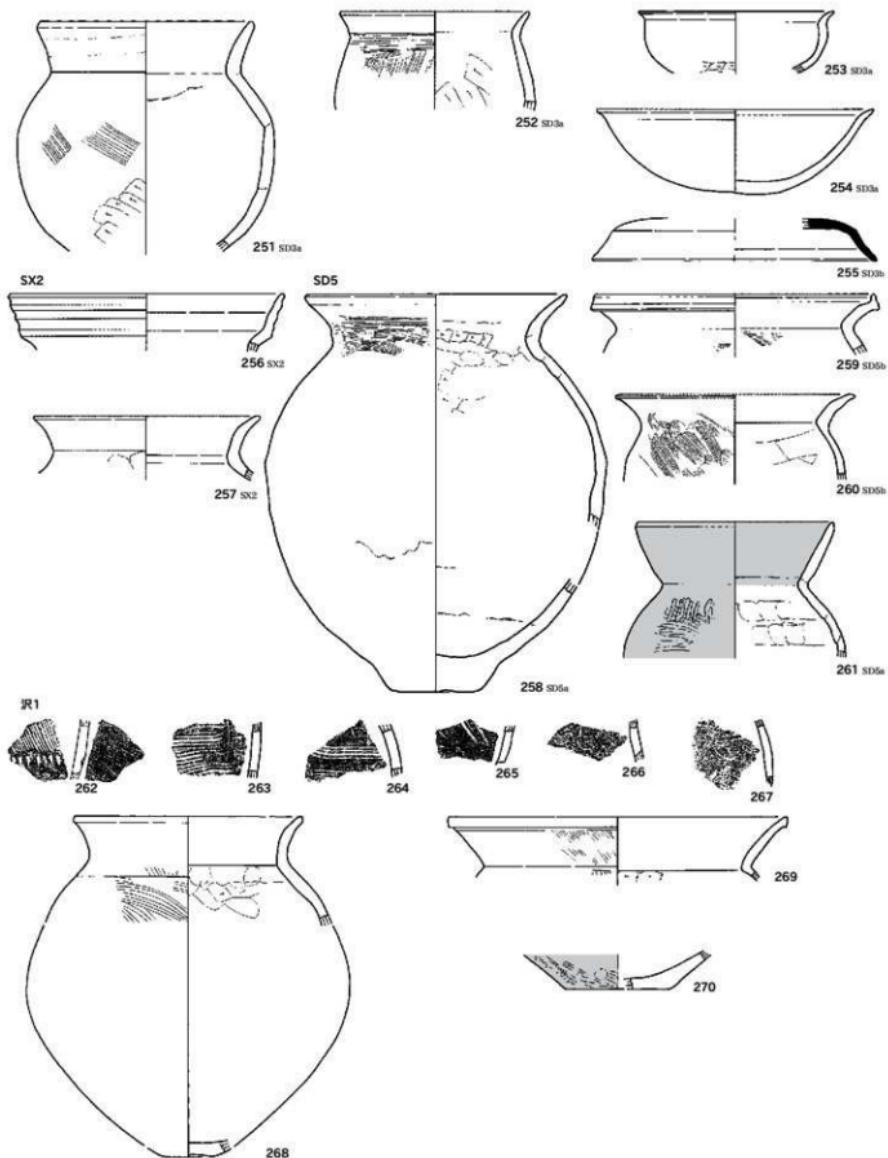


221 SD3a

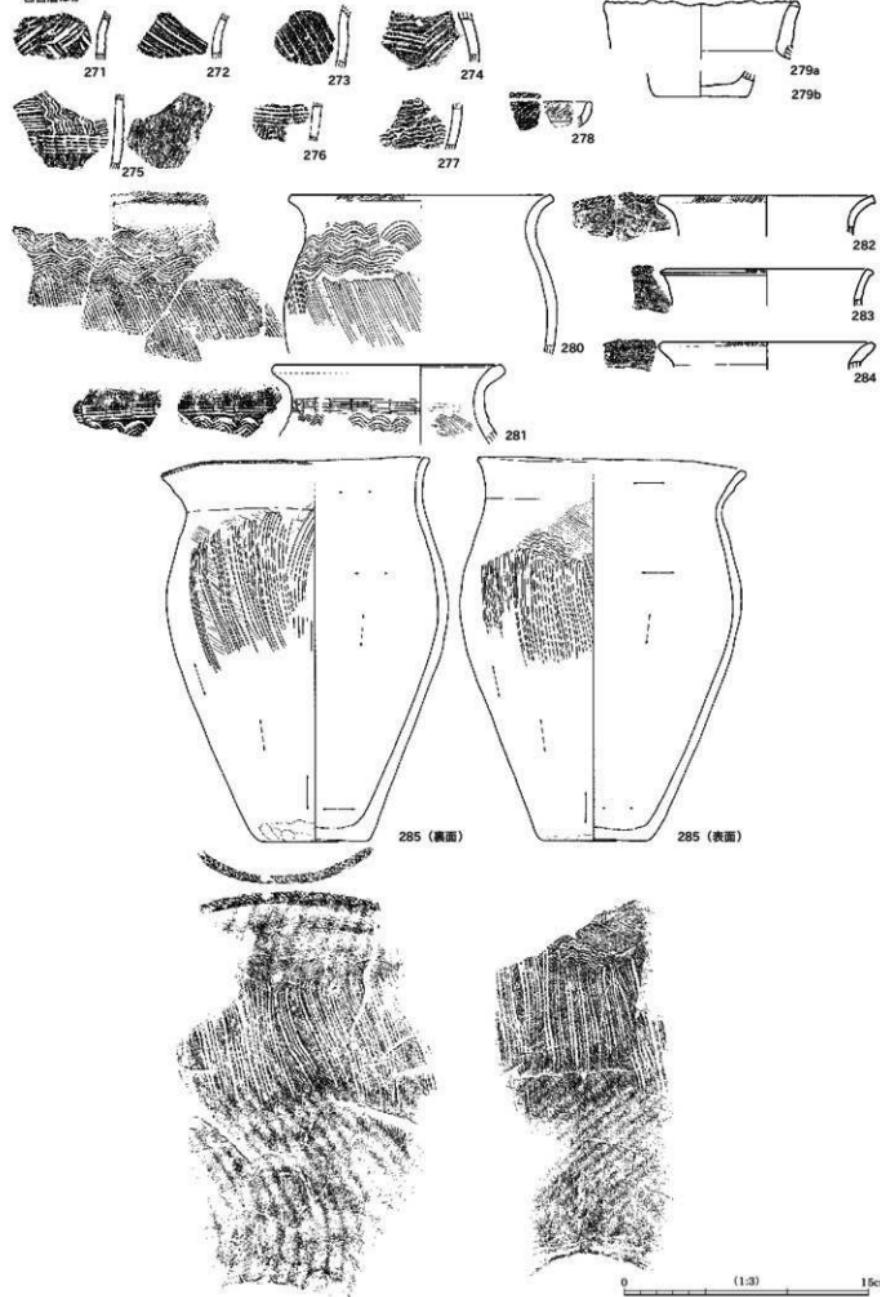
223 SD3a

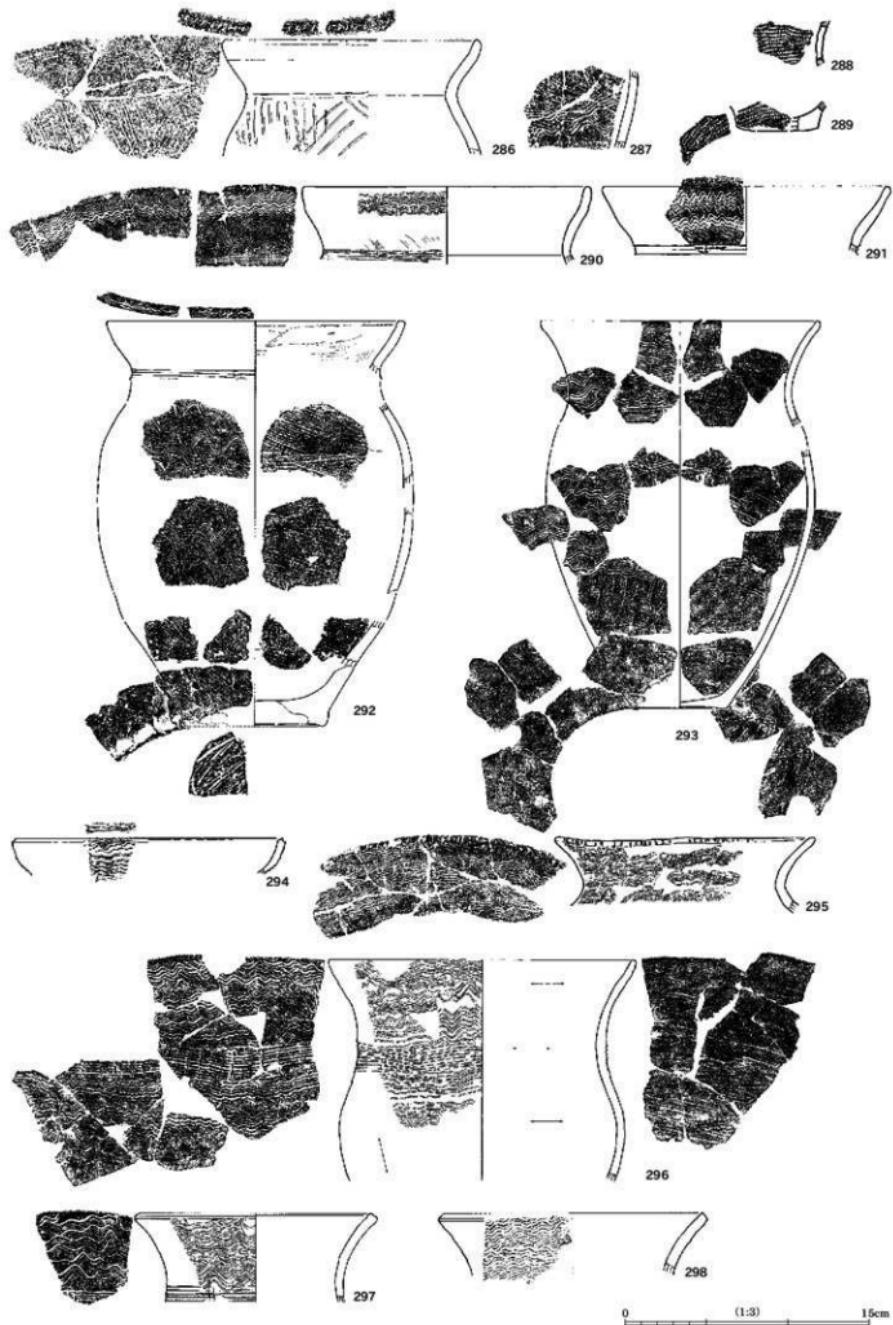
0 (1:3) 15cm

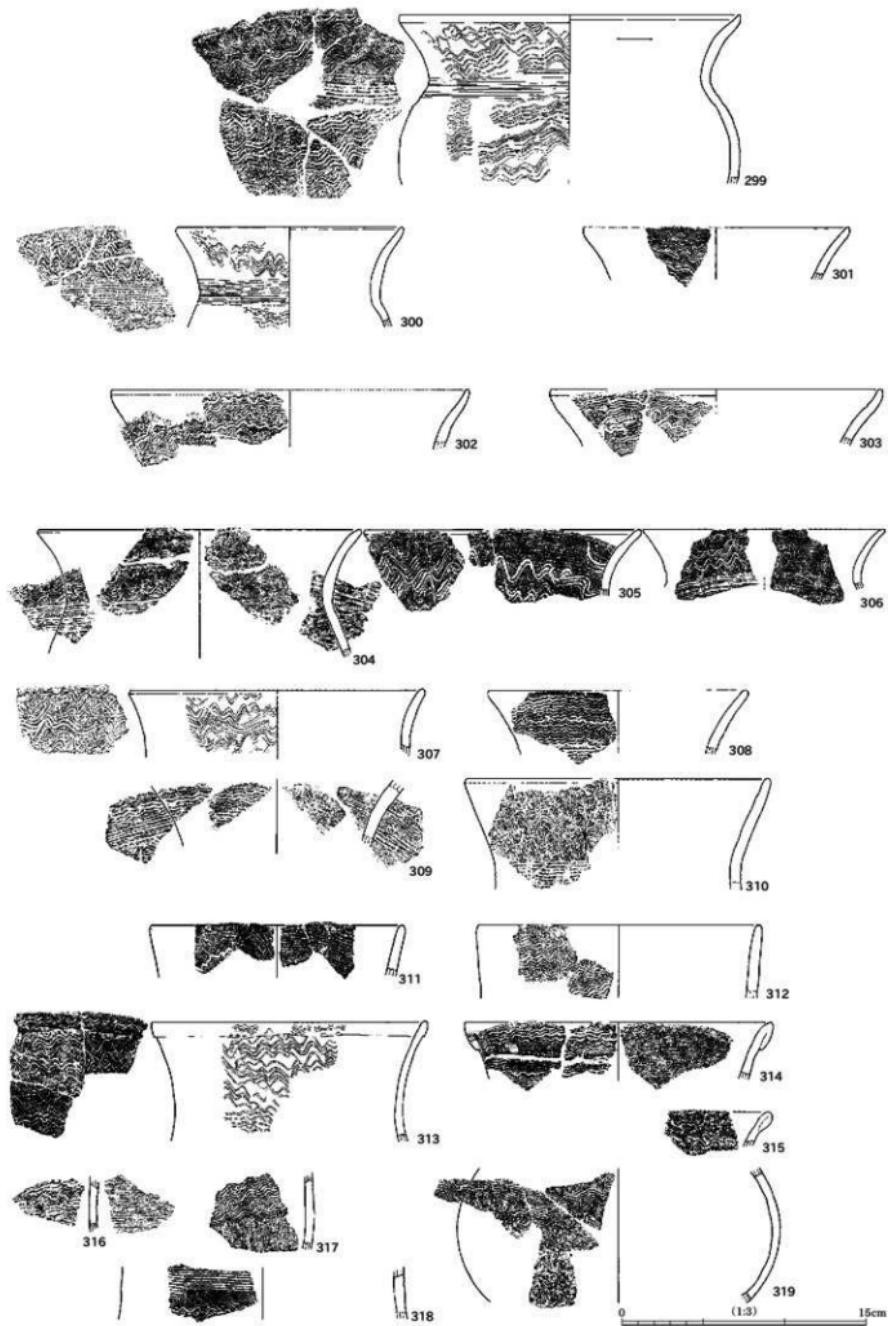


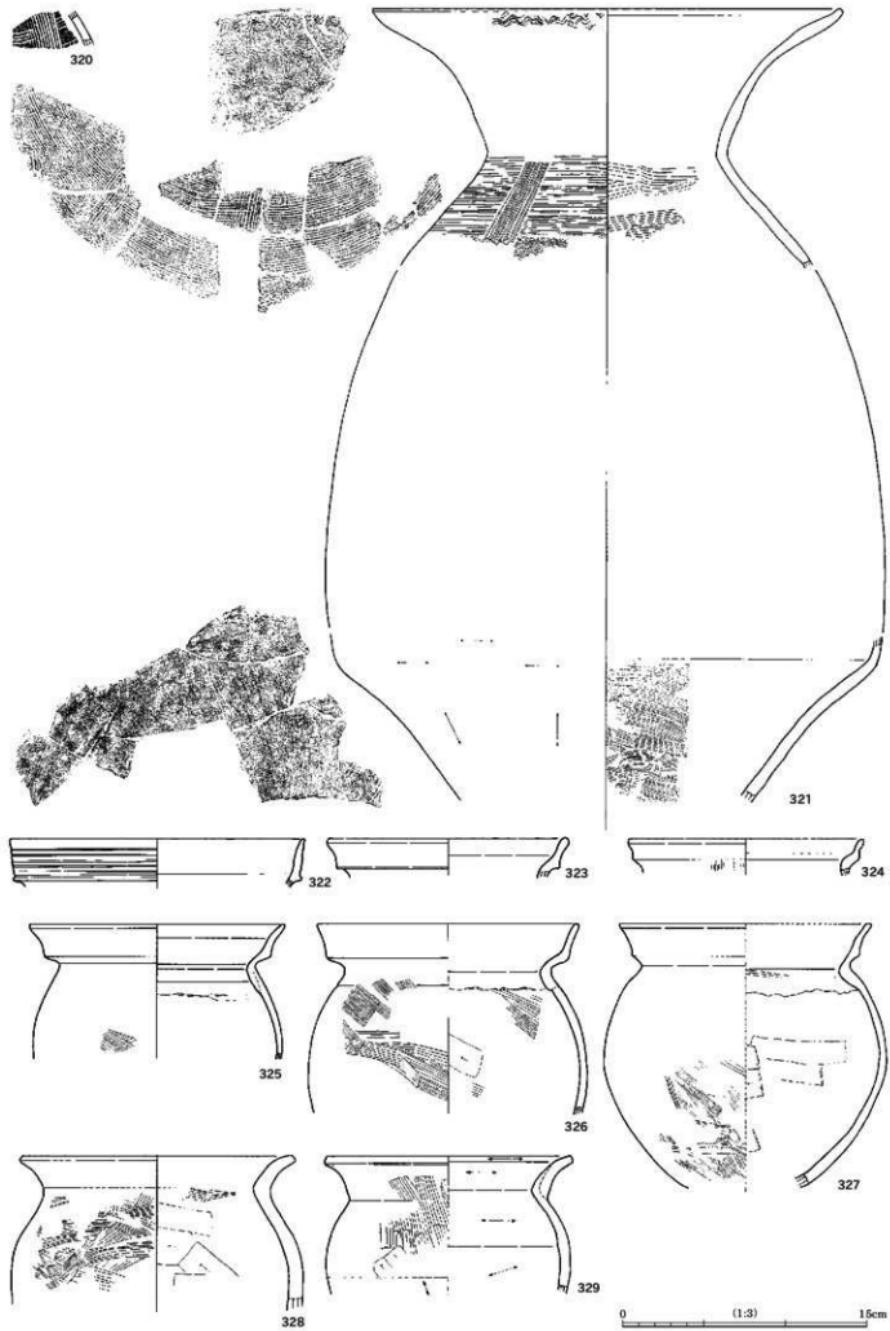


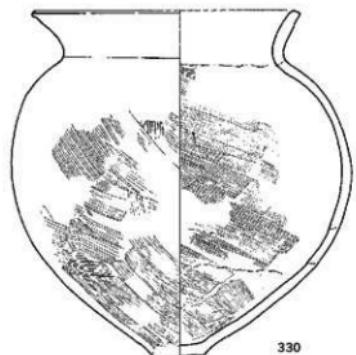
## 包含層ほか



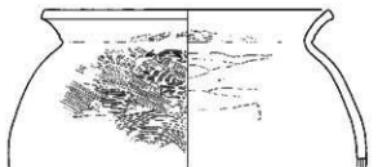




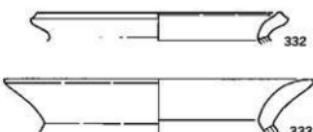




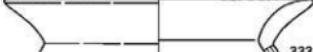
330



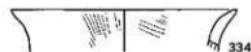
331



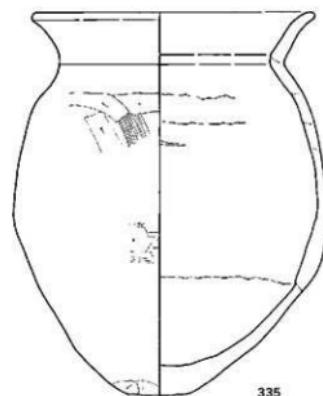
332



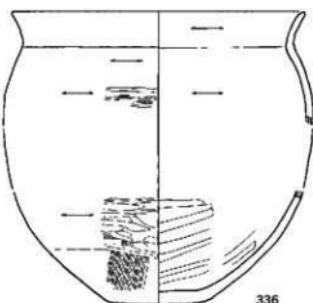
333



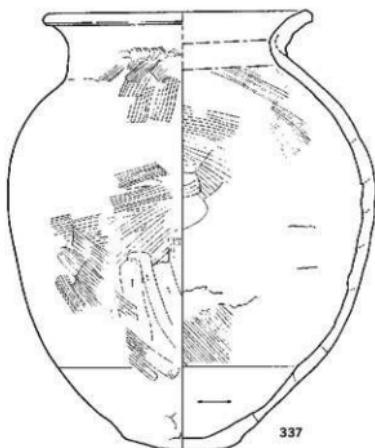
334



335



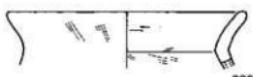
336



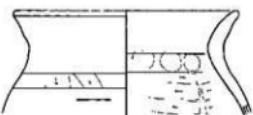
337



338



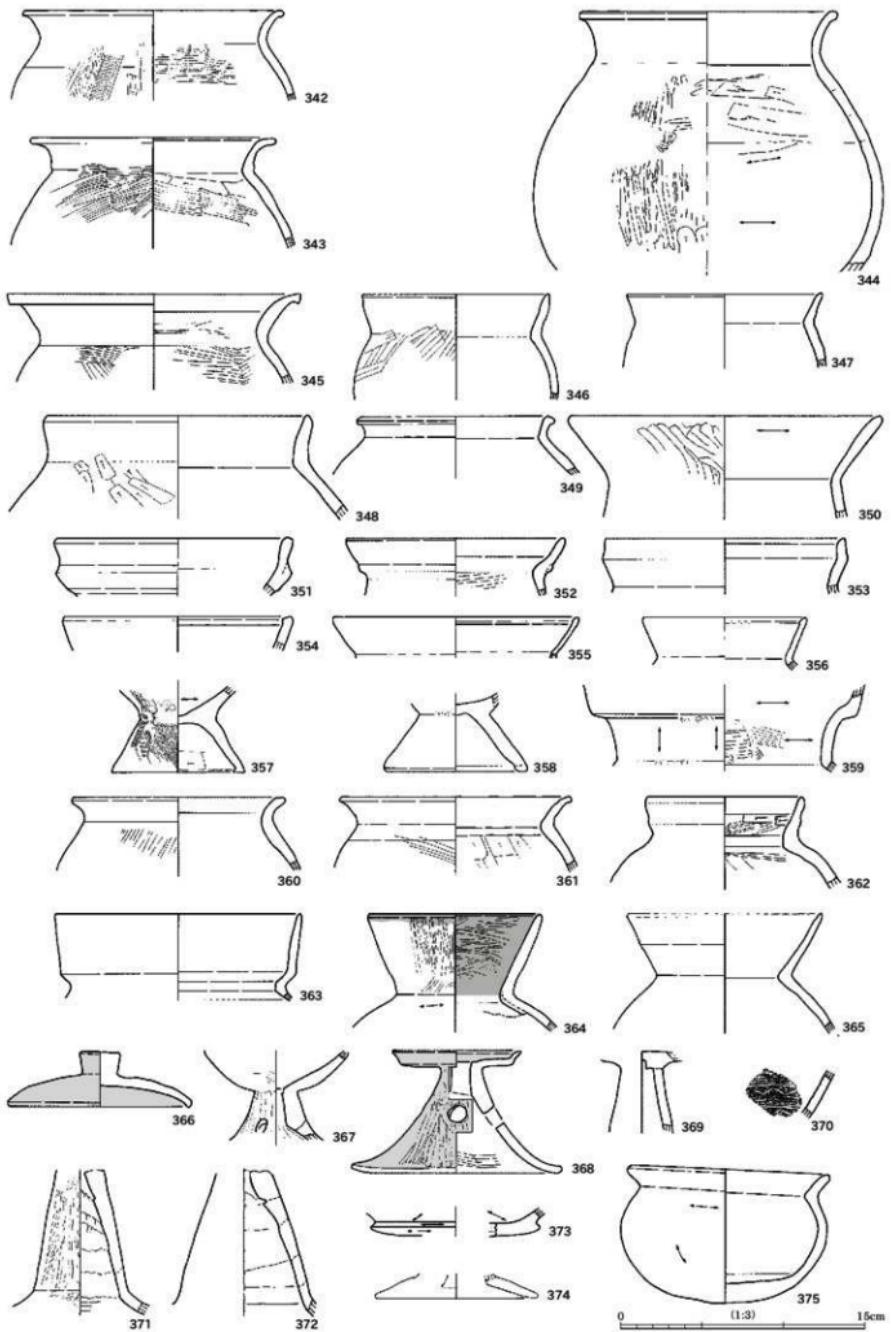
339

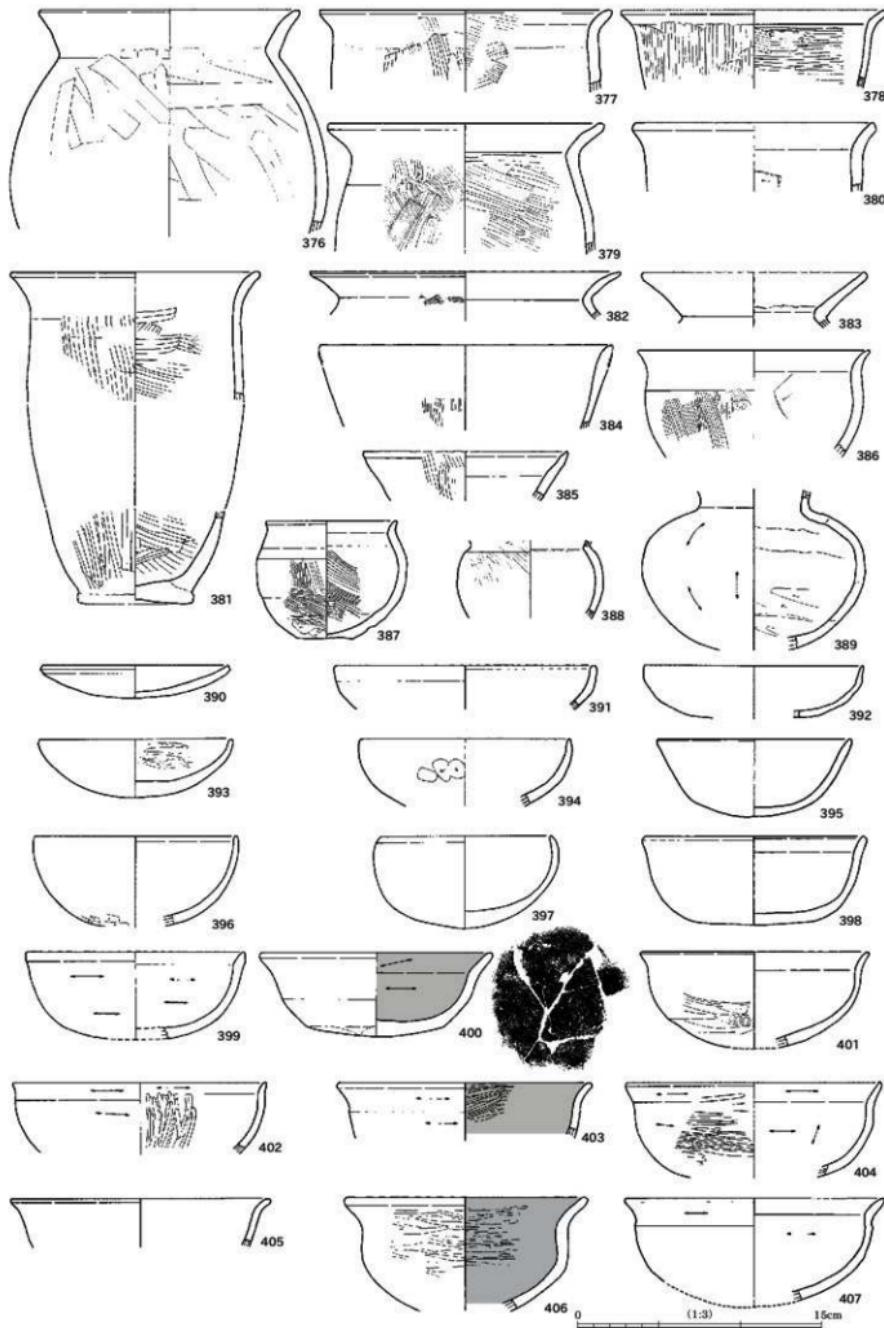


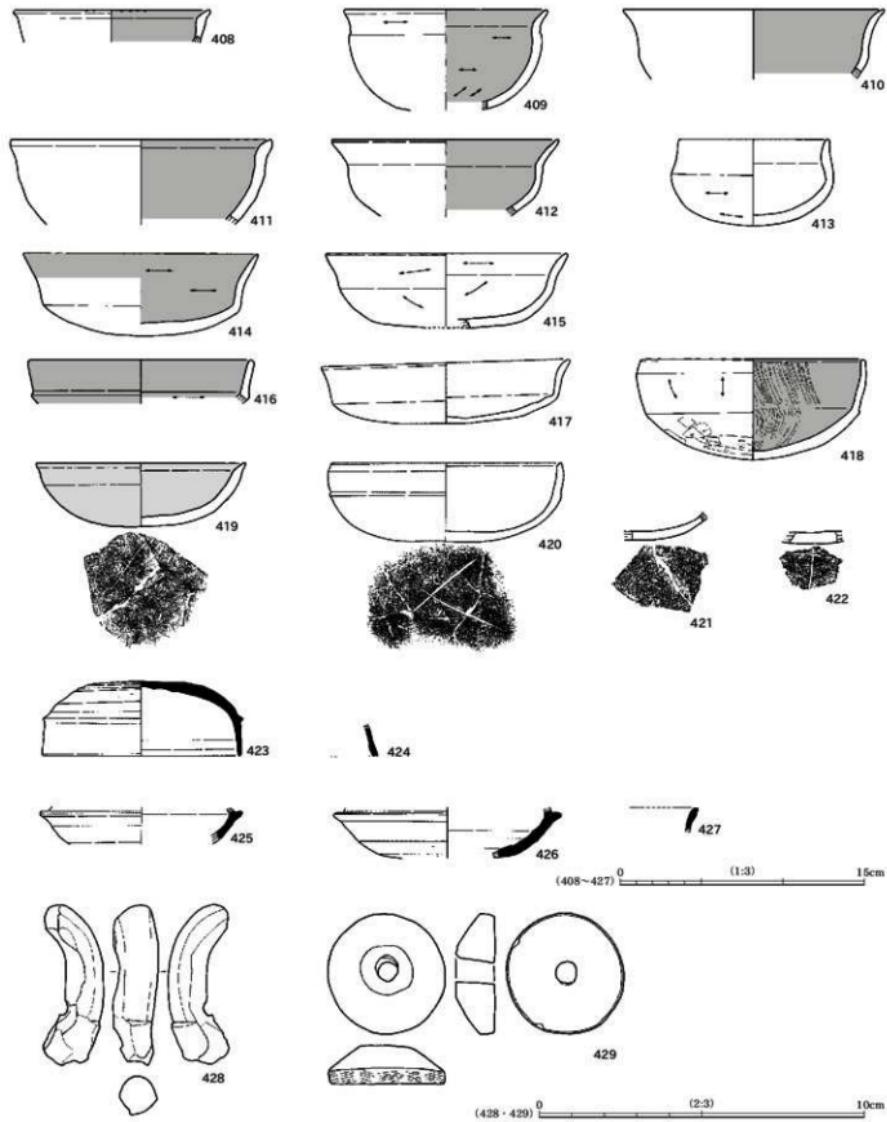
340



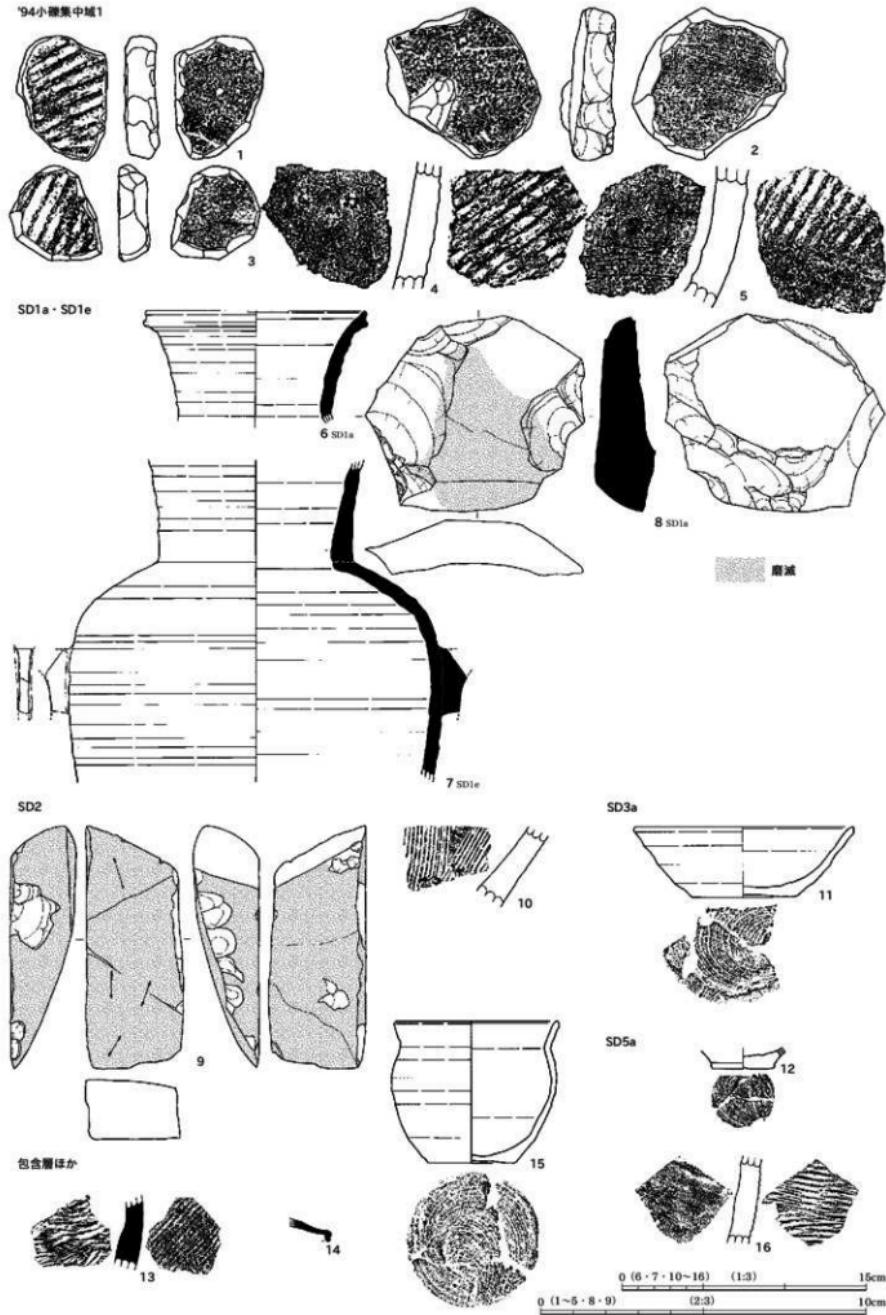
341

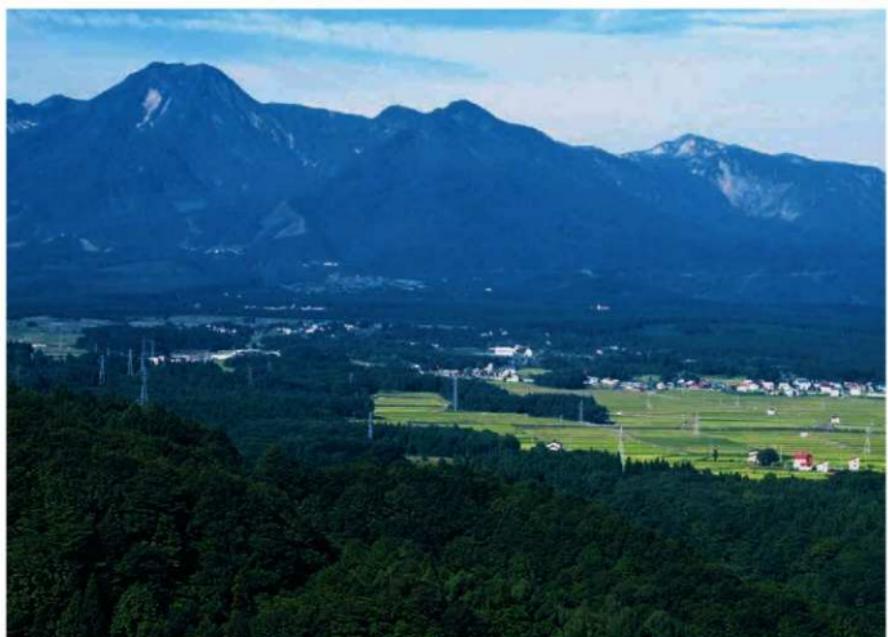






'94小鎌集中域1





遠景（東から）



'94調査区 完掘（西から）



'95調査区（I区） 完掘（西から）



'95調査区（II①区） 完掘（西から）



'95調査区（II②区） 完掘（北から）



'95調査区(II③区) 完掘(南から)



'95調査区(II③・④区) 完掘(南から)



'94基本層序①(14K)



'94基本層序④(11J)



'95基本層序①(17I)



沢1 a-a'セクション(東から)



SD1a 東側(b-b')セクション



SD1c 北側(c-c')セクション(南西から)



SD1c 西側 (d-d') セクション (西から)



SD1a・1b 西側 (d-d') セクション (西から)



SD1e 小礫検出状況 (南西から)



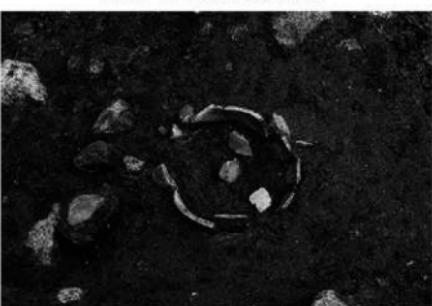
SD1j F-F'セクション (西から)



19H21・16 土器出土状況 (北から)



19H6 土器出土状況 (北から)



19F10 土器出土状況 (西から)



SD2 全景 (西から)



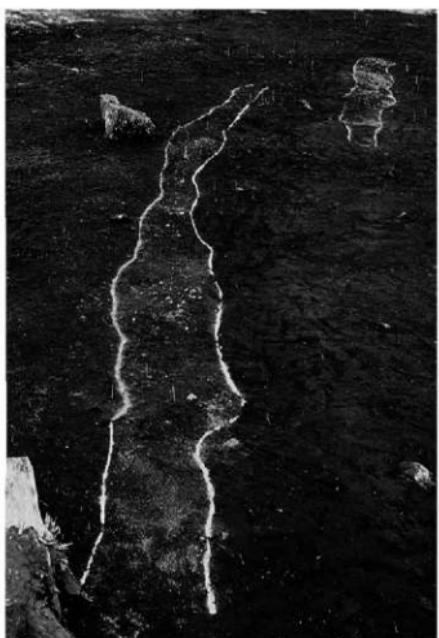
SD2 a-a'セクション (西から)



SD3 セクション (西から) (手前: a-a'、奥: b-b')



SD5 検出状況 (西から)



SX1 検出状況 (西から)



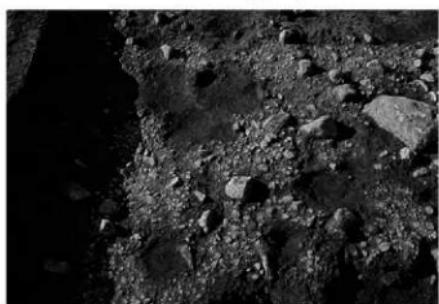
SX2 検出状況 (南から)



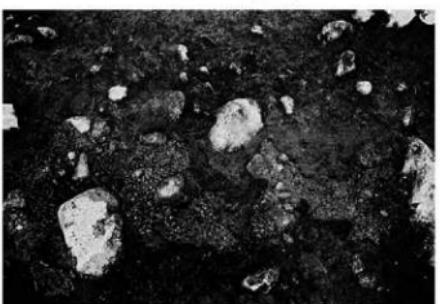
SX1 セクション（西から）



SX2 セクション（南から）



'94 小砾集中域1 部分（東から）



'94 小砾集中域2 部分（東から）



'95 小砾集中域1 部分（北から）



'95 小砾集中域1 セクション（北から）



'95 小砾集中域2 検出状況（南から）



'95 小砾集中域2 セクション（南から）



'94 Pit17 セクション



'94 Pit18 セクション



'94 Pit19 セクション



'94 Pit8 セクション



'94 Pit7 セクション



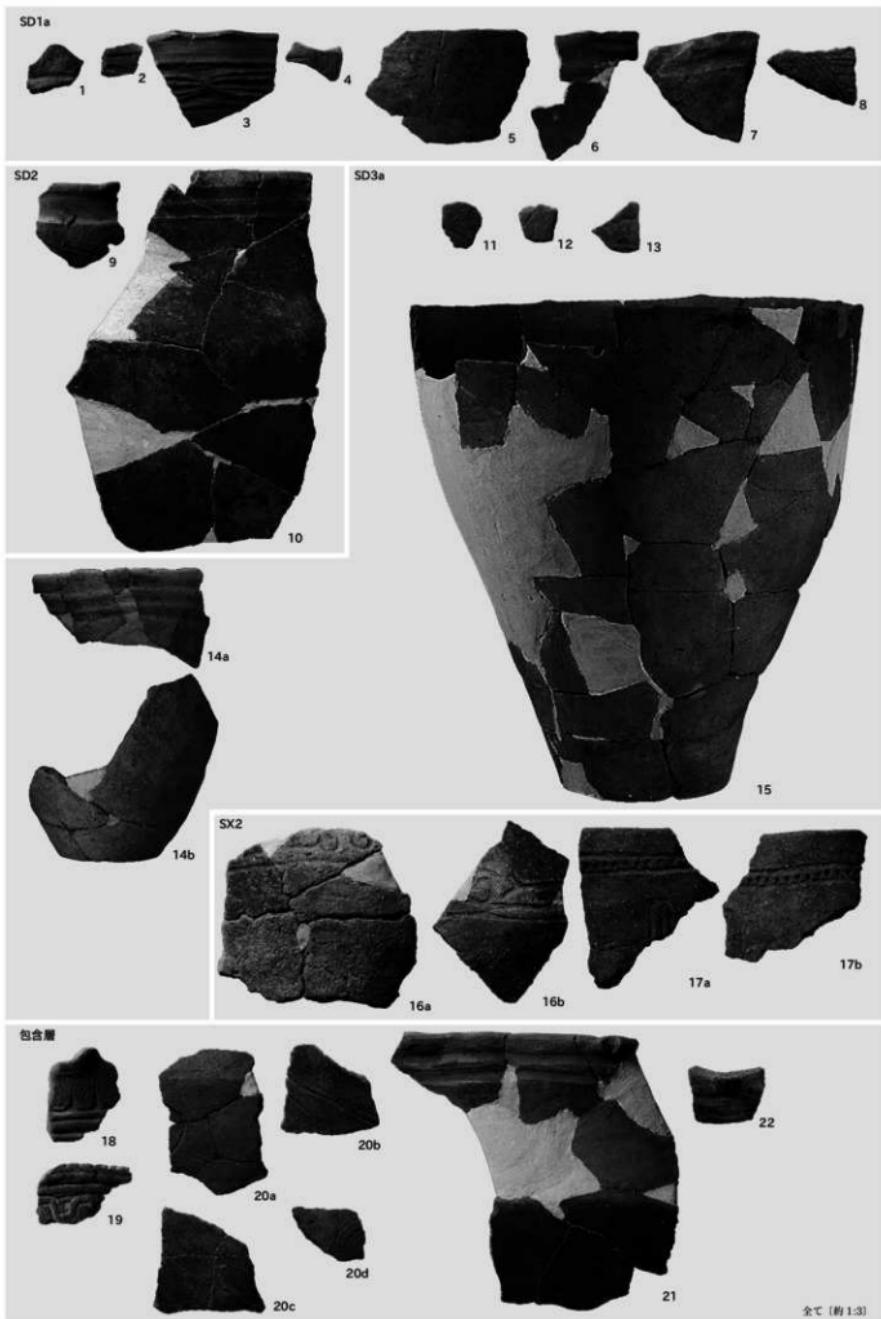
'94 小礫集中域周辺 完掘

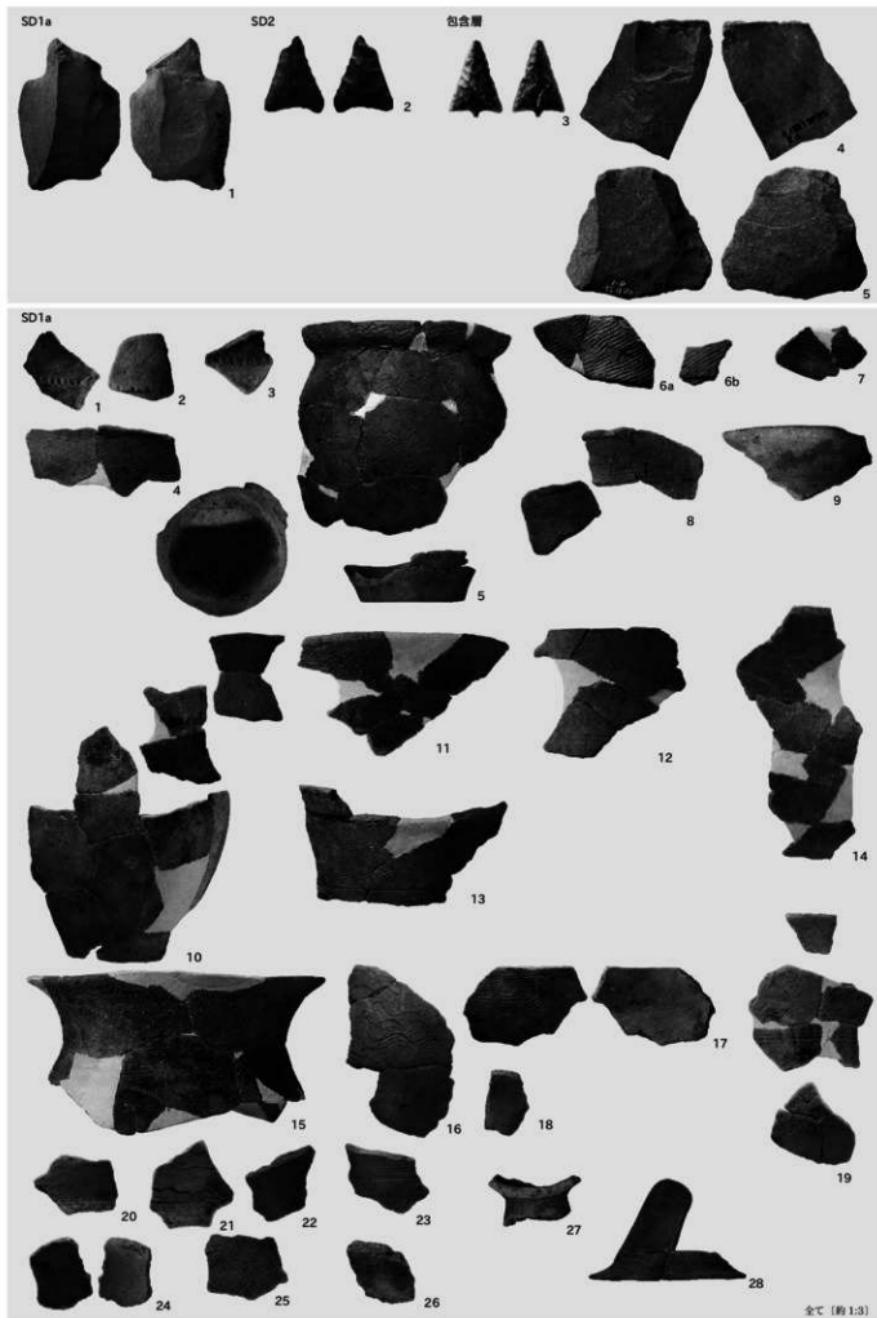


'95 SD14 北側部分（東から）

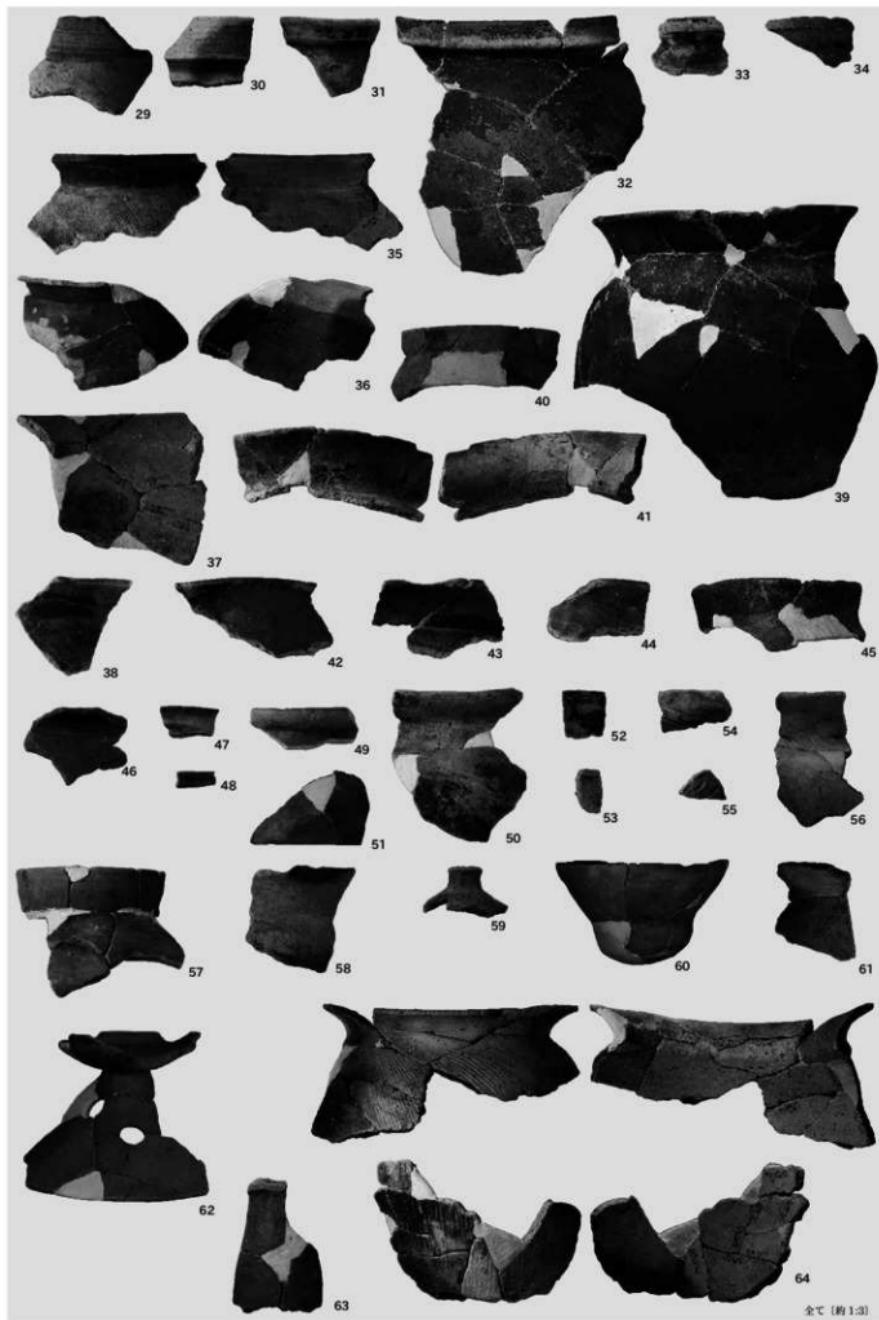


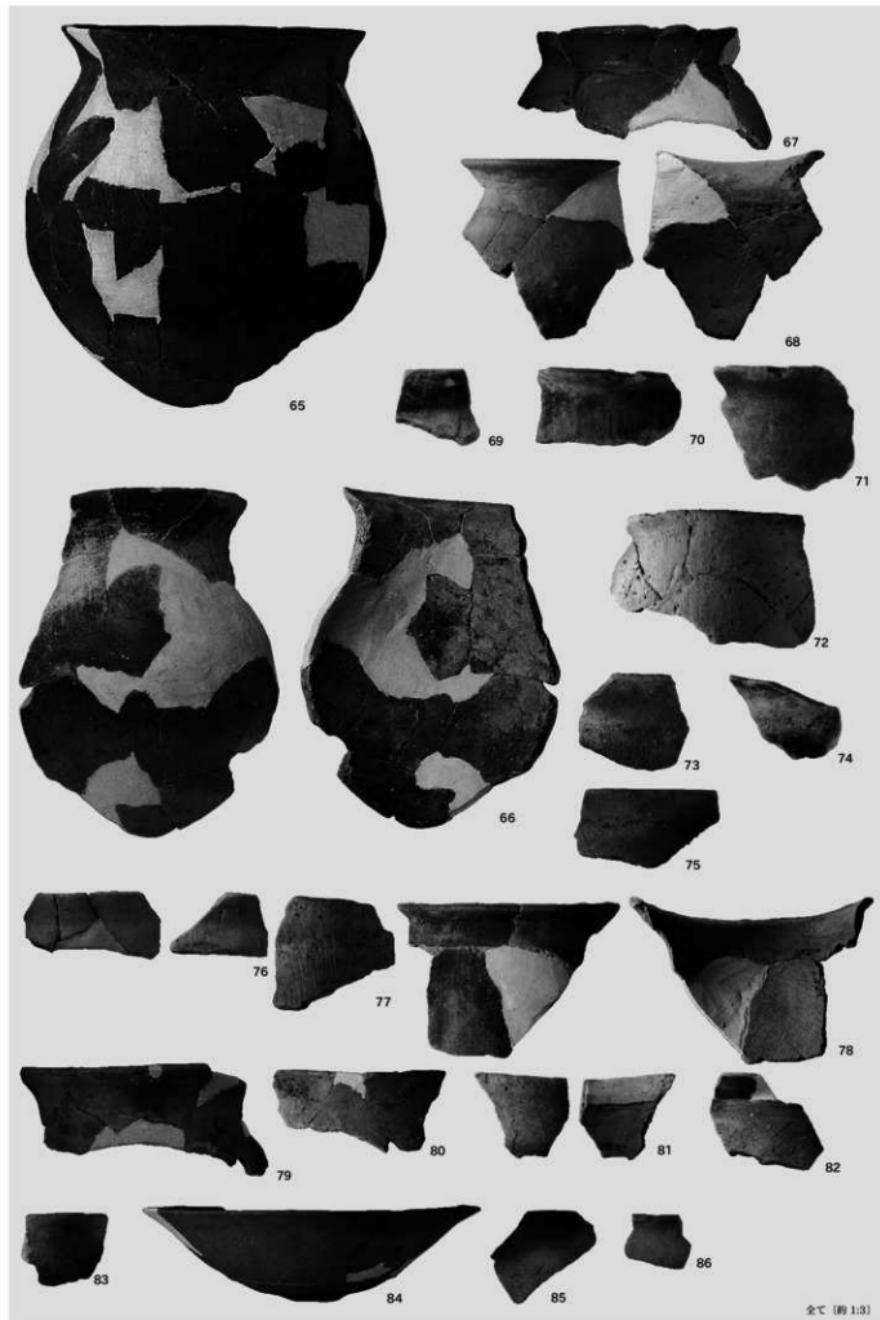
'95 SD14 セクション



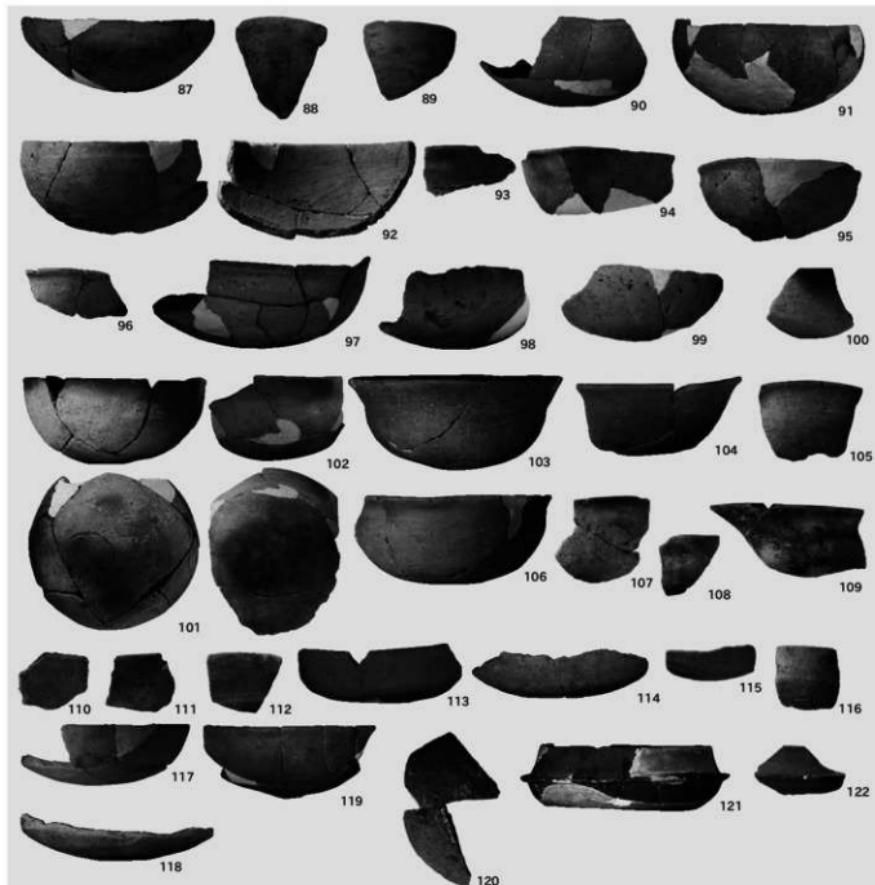


全て (約 1:3)

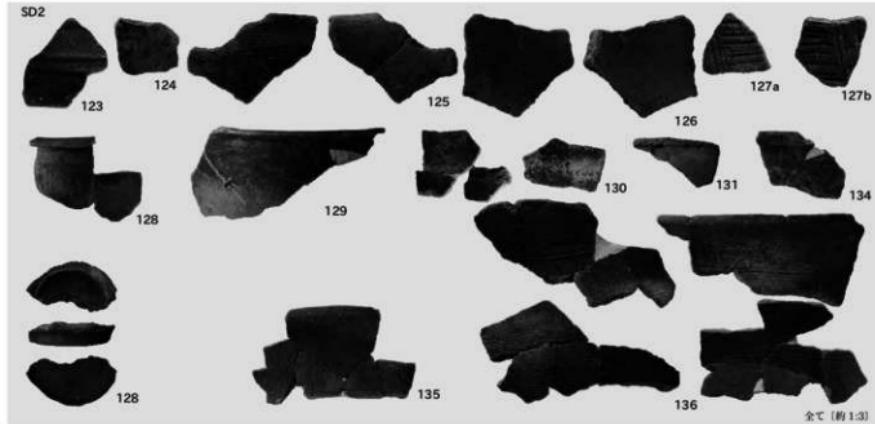




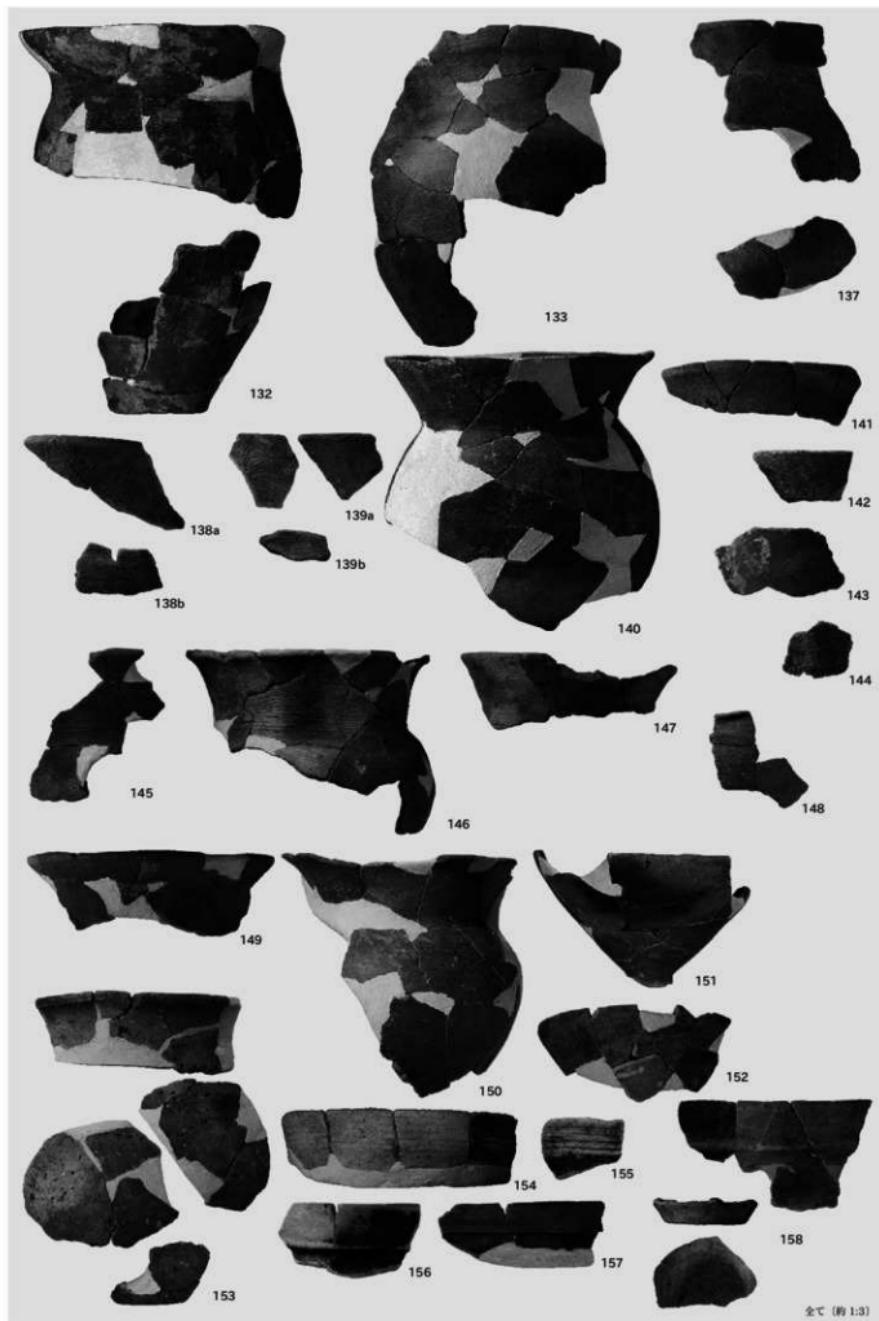
全て (約 1:3)



SD2



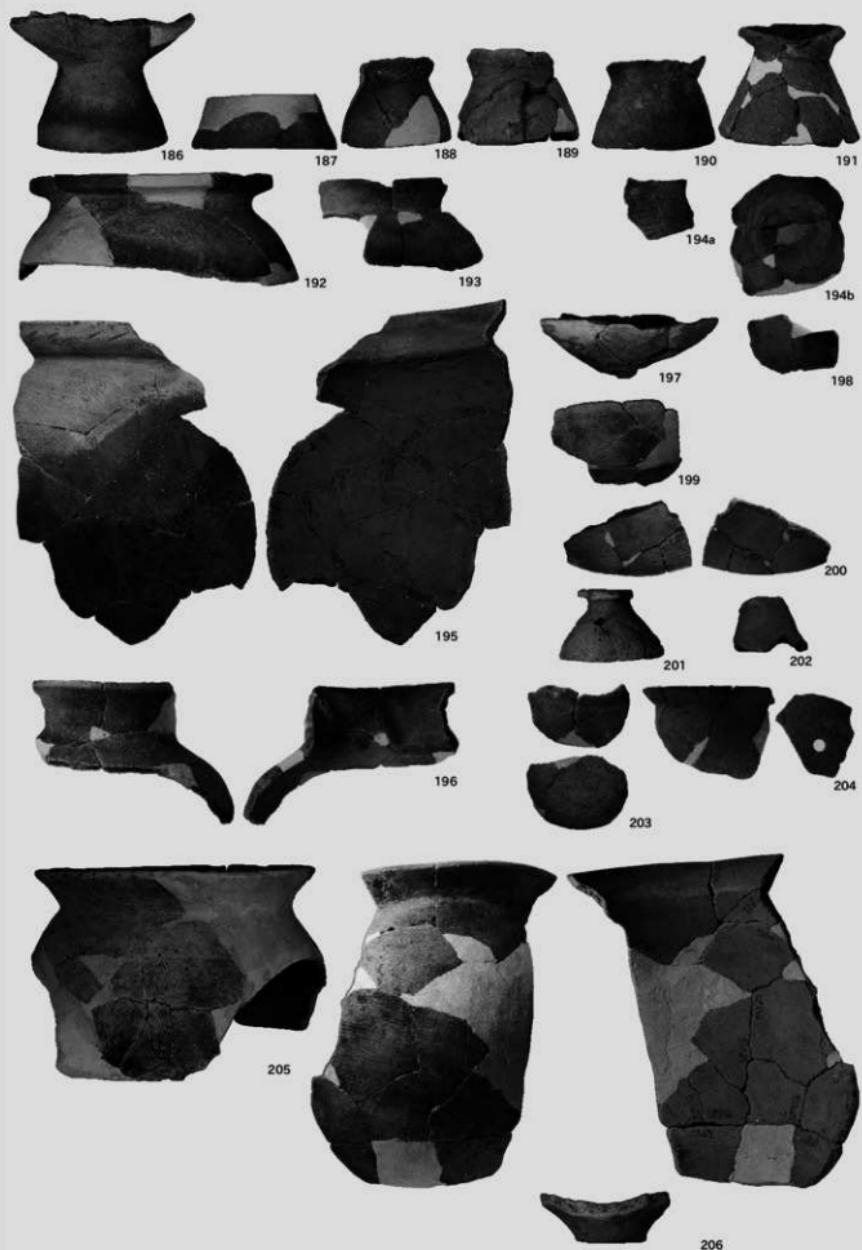
全て [約 1:3]

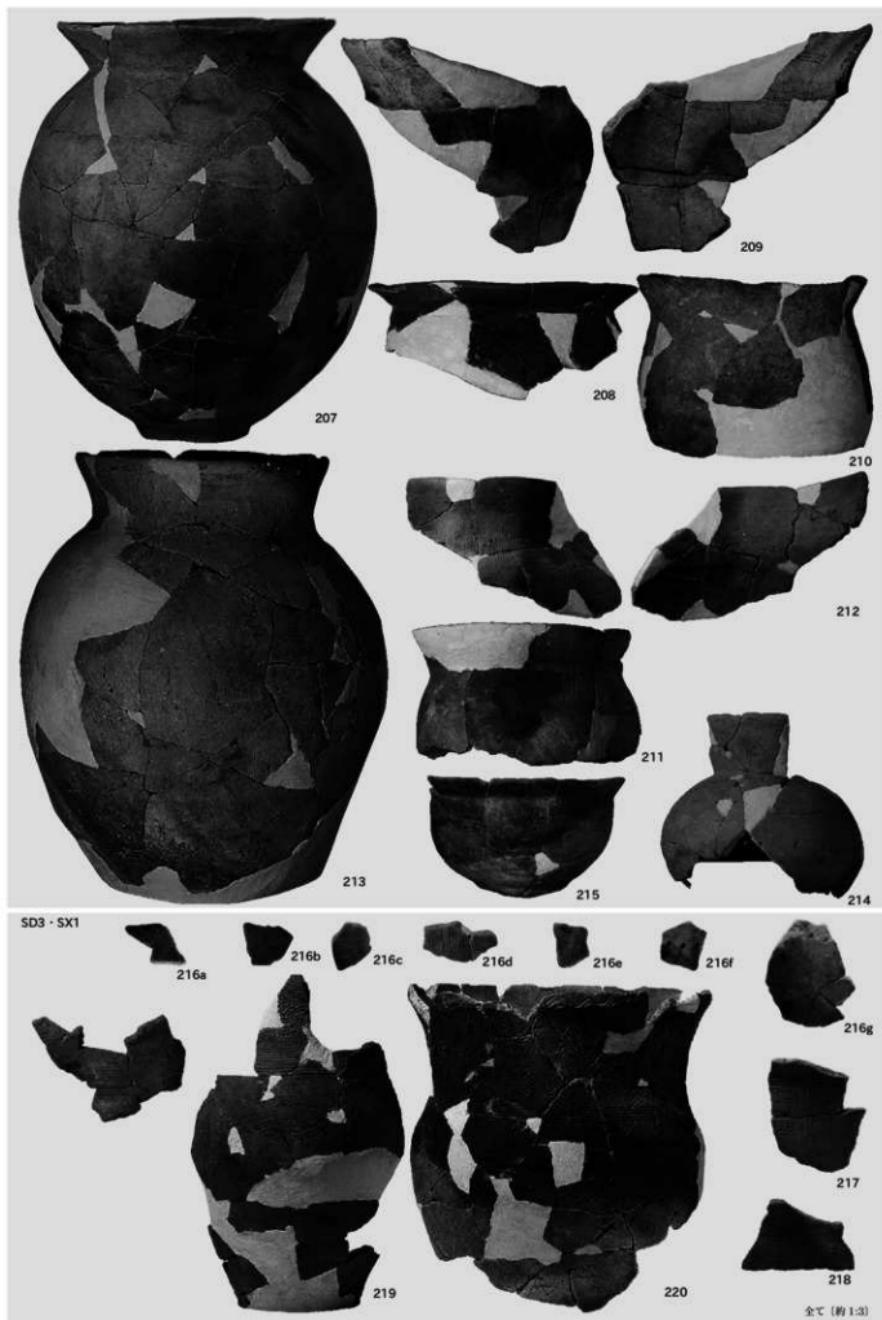


全て (約 1:3)

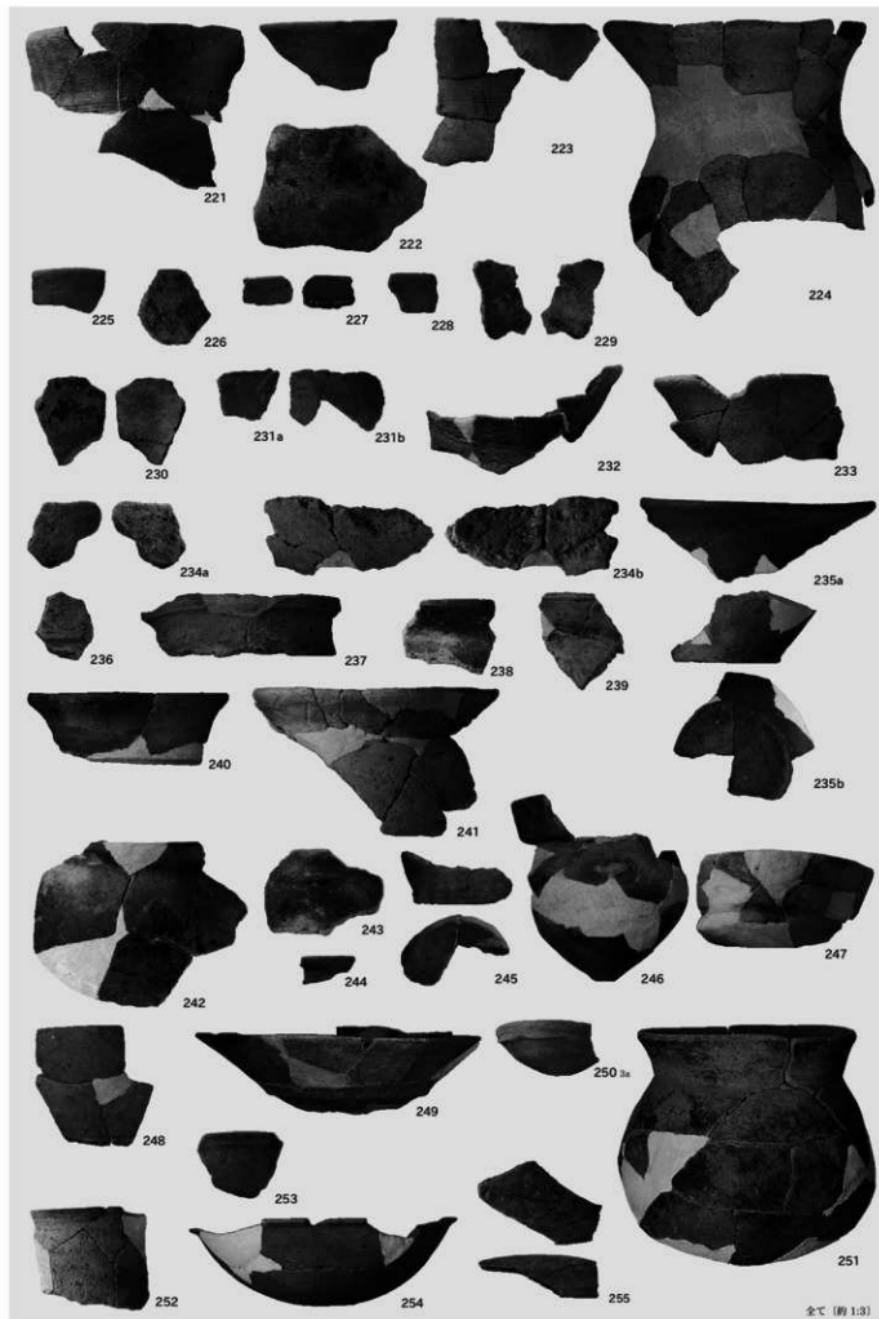


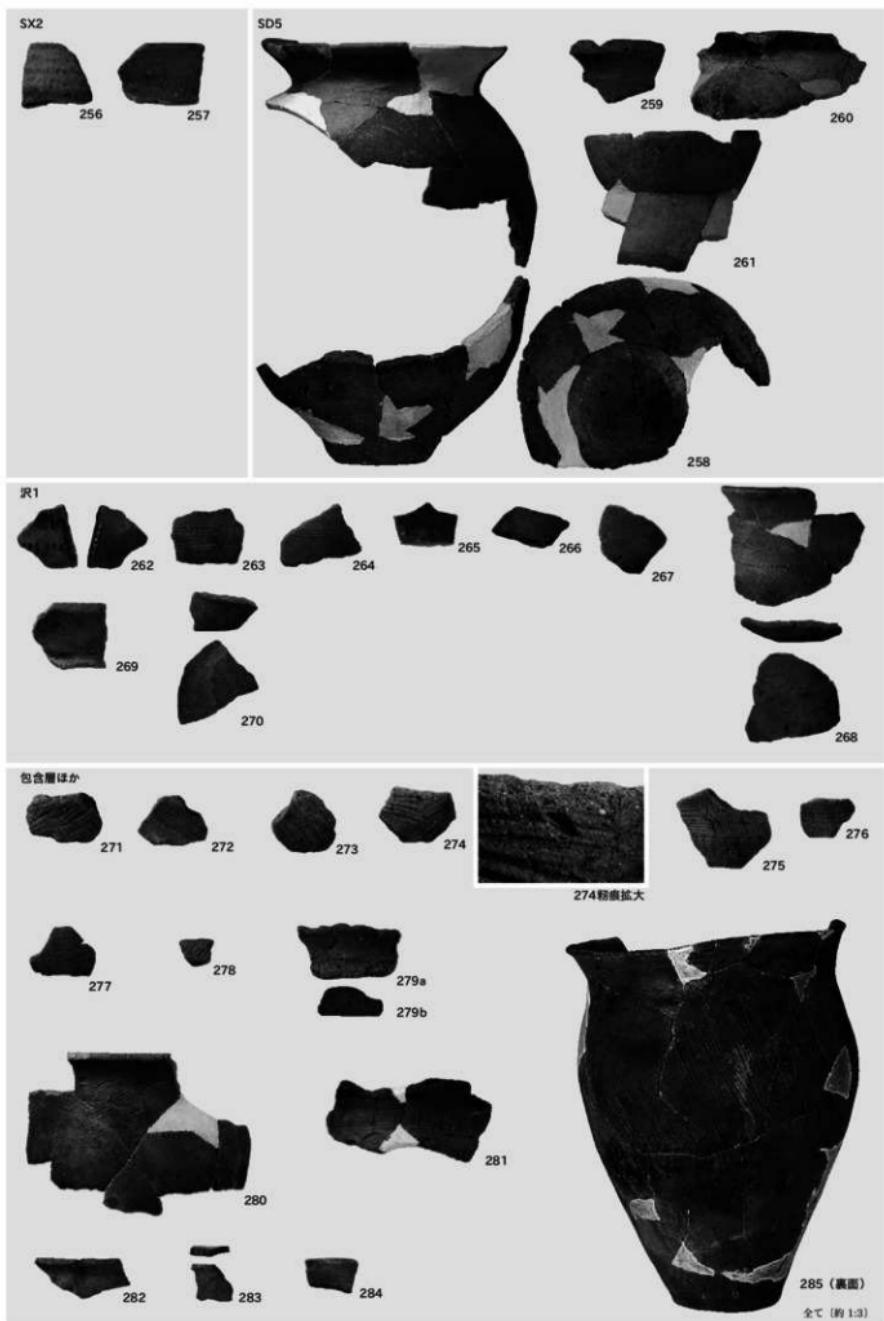
全て (約 1:3)

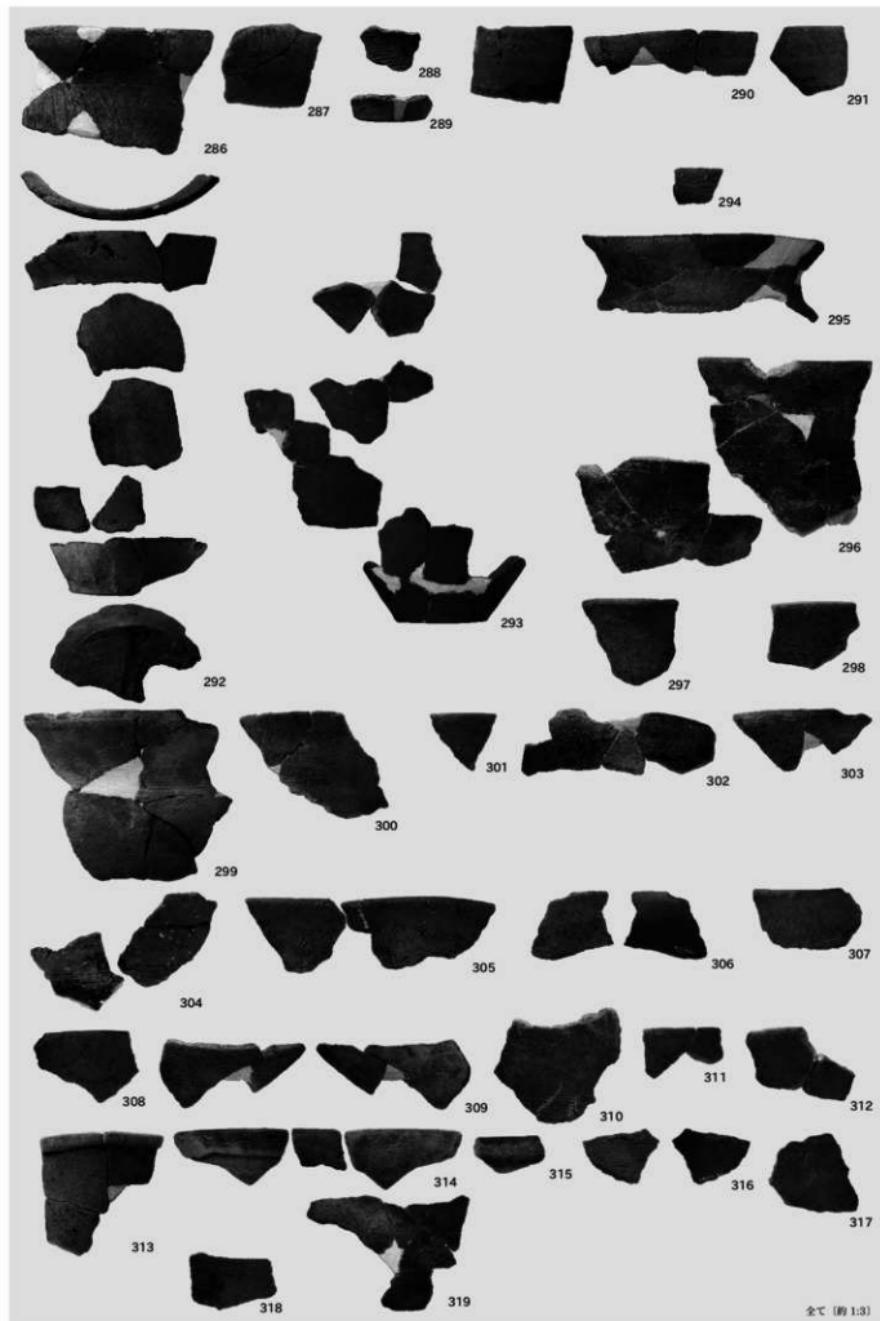


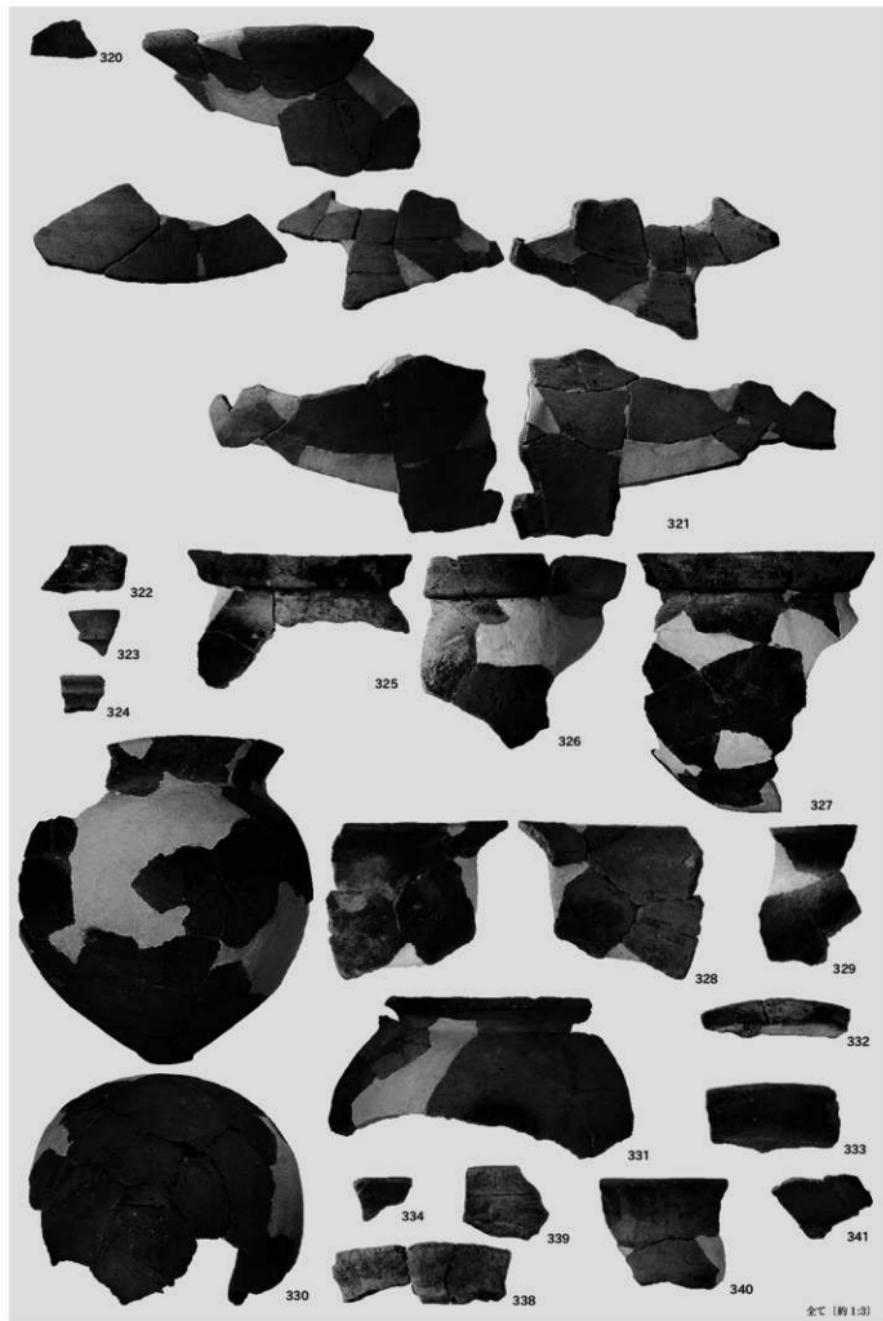


全て (約 1:3)

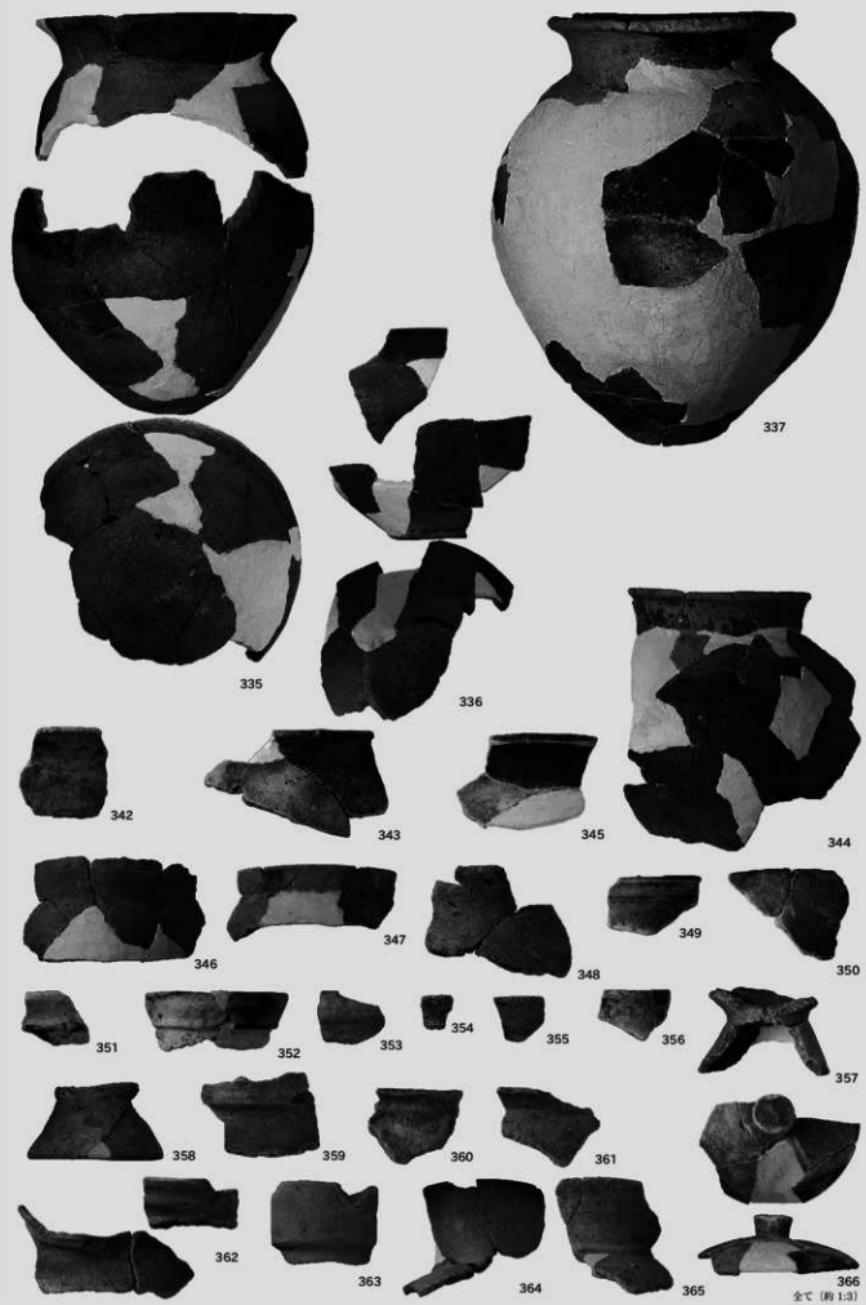


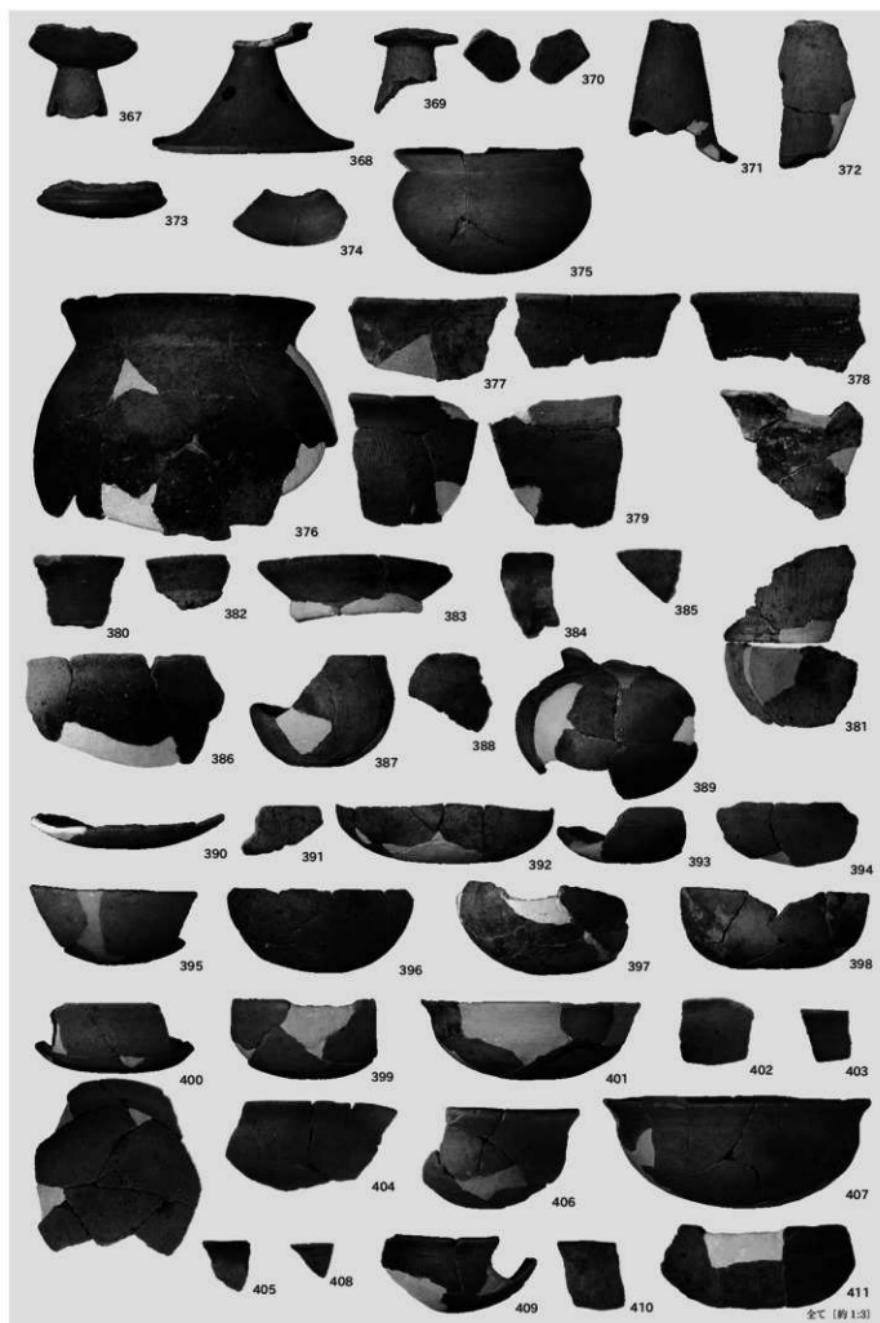


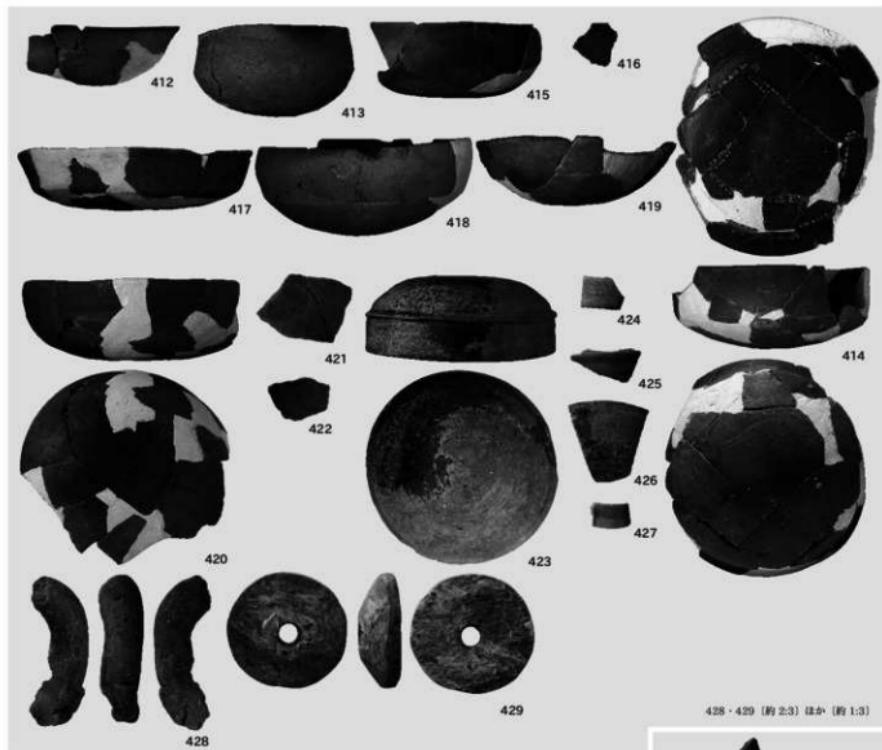




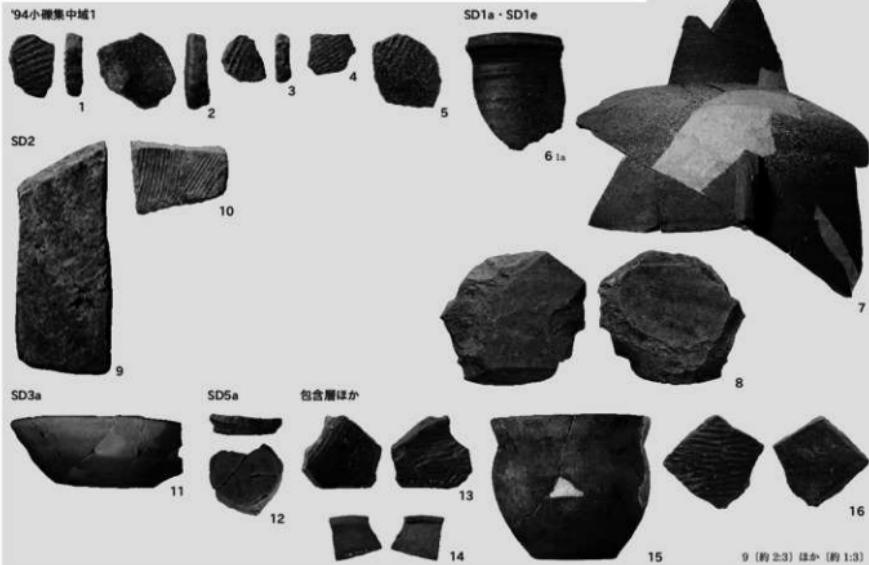
全て [約 1:3]







'94小礫集中域1



## 報告書抄録

ふりがな	おのざわにしいせき						
書名	小野沢西遺跡						
副書名	上信越自動車道関係発掘調査報告書						
巻次	XIII						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第131集						
編著者名	土橋由理子						
編集機関	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟県新津市大字金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981						
発行年月日	西暦2004(平成16)年3月31日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
小野沢西遺跡	新潟県中頃 城都妙高村 大字霞山字 大峯・小野 沢西ほか	15547 54分 04秒 (旧座標)	74 13度 13分 (旧座標)	36度 06秒 (旧座標)	138度 19931025～19931029 19931108～19931111 19940620～19940628 二次調査 19940907～19941118 19950424～19951018	13,870	上信越自 動車道の 建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
小野沢西遺跡	散布地	縄文 弥生 古墳 古代 中世	自然流路10条、ピット8基、溝5条、		縄文土器・石器 弥生土器 土師器・須恵器・結蹄車 土師器・須恵器・砾石 珠洲焼		

### 新潟県埋蔵文化財調査報告書 第131集

### 上信越自動車道関係発掘調査報告書 XIII

#### 小野沢西遺跡

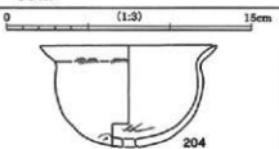
平成16年3月30日印刷  
平成16年3月31日発行

編集・発行 新潟県教育委員会  
〒950-8570 新潟市新光町4番地1  
電話 025 (285) 5511

財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
〒956-0845 新潟市大字金津93番地1  
電話 0250 (25) 3981  
FAX 0250 (25) 3986

印刷・製本 北越印刷株式会社  
〒940-0034 新潟県長岡市福住1丁目6番27号  
電話 0258 (33) 0306

新潟県埋蔵文化財調査報告書第131集 『小野沢西遺跡』 正誤表

頁	正	誤
3 第3図 スケール	(1:800) 50m	(1:3200) 80m
図版17		スケールとNo.204の土器の一部が欠損